とりっぷ

アマラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とりっぷ

【Ｎコード】
Ｎ５６８７Ｐ

【作者名】
アマラ

【あらすじ】
ストリートファイトが趣味の女子高生が、異世界に召喚獣として召喚される。

プロローグ？

ここではない異世界。
魔法が存在し、魔獣と呼ばれる獣が存在する、そんな世界。
そのとある窓が無い部屋で、老人と少年が向かい合わせに座り唸りあっていた。
蝋燭で明かりを取ってはいるが、石造りの室内は暗く、部屋全体は見渡せない。
白いローブのようなものを着ている老人は、白髪白髭。
言ってしまえば、いかにも魔法使いといった風情の老人だ。
少年の方も、服装は老人と同じ白いローブ。
童顔なのか実際に歳が若いのか、顔立ちが幼く可愛らしい。
「やっぱり換気って大事なんですね」
至極真剣な表情でそういうと、少年は自身が先生と呼んだ老人に目を向けた。
老人の方も少年同様、心底真面目な表情で頷く。
「まったくじゃ。まさか自分の研究室で窒息死しかけるとはおもわんかったわい」
数日前のことになる。
二人はこの石造りの部屋で、危うく死にかける目にあっていた。
「いやぁー。明るくしようと思って焚いた松明で一酸化炭素中毒とはのぉー」
「考えてませんでしたねー」
今でこそ薄暗いこの部屋。
実は数日前までは松明の照明でそれなりに明るく照らし出されていた。
普段は一日五時間程度しか松明を使っていなかったから気が付かなかったのだが、この部屋は石造りで窓が無いだけに、恐ろしく換気が悪かった。

いつもよりも順調に作業が進み、調子に乗って残業したトタン、酸素枯渇でばたんと逝き掛けてしまったのだ。
「もうマジ煉炭自殺が可能じゃって実感したのう」
「僕達あのまま倒れちゃってたら、見た目的には自殺でしたよね」
「まったくじゃ。こっちとらまだまだ死ぬ気なんぞないんじゃっちゅーの！　人生に心残りありまくりじゃしの」
やや興奮気味にまくし立てる老人の言葉に、コクコクと頷く少年。
「でも、換気口つけてもらいましたし。コレで安心ですね」
内部が暗くて良く分からないが、実は部屋の壁には通気口があったりした。
老人の“魔法使いの部屋っぽい雰囲気を壊さない”と言う要望を見事にクリアしたそれは、良く良く見ないとそれが穴だとも分からない外見になっていた。
勿論、外部からの光が差し込み真っ暗な部屋を明るく照らし出すことも無い。
それで居ながら換気は抜群と言う優れものだ。
「しっかし、なーんで魔法使いっつー連中はこんな真っ暗い部屋でナベ混ぜてるんじゃろのう？」
「さー？　良く分からないですけど。　やっぱり雰囲気が大切だからじゃないでしょうか」
魔法使いと言う魔法使いが全部暗い部屋でナベをかき混ぜていると思っているらしい。
世界中の魔法使いを敵に回しそうな発言だか、この空間に突っ込みを入れてくれる人間は皆無だった。
「雰囲気のぉー。まあ、雰囲気は大事じゃよね」
「何事も形からって言いますもんね」
雰囲気で魔法が使えたら世の中とんでもないことになるだろう。
「兎に角アレじゃ。この間死にかけたおかげで完成したのう。魔法陣」
「ですね」

老人はやおら立ち上がると、自分達の足元にろうそくを向けた。
照らし出された石畳には、なにやら文字のようなものがびっしりと刻まれている。
曲線や幾何学模様なども織り込まれたそれは、確かに魔法陣のように見えた。
「コレさえ上手く発動すれば、念願の召喚獣が出てくるはずなんじゃが・・・」
「上手くいけば良いんですけれど・・・」
真剣な面持ちで魔法陣を見つめる二人。
妙なところで死ぬ思いまでして作り上げたものなだけに、そこに込められた思いもひとしおらしい。
「ところで先生。　この魔法陣って、どんな召喚獣が出てくるんですか？」
「さあ？　じぇんじぇん見当も付かんのじゃけど。　なんか、出してみりゃわかるんじゃないかの？」
少年の言葉に、至極真面目な表情で答える老人。
かなり恐ろしいことをいっているような気がするが、それを指摘してくれる人間はやはり皆無だった。
「じゃあ、がんばって召喚成功させて、なにが出て来るか調べないとですね！」
「そうじゃ！　とりあえずやってみりゃ何とかなるじゃろ！　何事もチャレンジじゃ！」
「はい、先生！」
あんまり考えないで、ガンガンチャレンジしていく。
それが二人の研究方針らしい。

一話

深夜の裏路地。
ビルとビルの間の少し開けた、コンクリート詰めの空き地。
普通なら誰も近づかないだろうそんな場所に、複数の人間がたむろしていた。
人垣を作るように円状になった人の群れ。
その中心では、２人の人間が殴り合っていた。
酔っ払い同士の喧嘩。
と言うわけではない。
ここで行われているのは、違法な賭け試合。
素手での喧嘩でどちらが勝つか。
そんな単純な賭けだ。
ジャッジも居ない。
どちらかが倒れるまで終わらない。
ごくごく単純な、それだけに危険なゲームだ。
そういうものにこそ、人は引き寄せられる。
歓喜とも悲鳴とも付かない声を受けながら戦うのは、一人の男と一人の女。
女、とは言っても、年齢的に言えば少女と言うほうが当てはまるだろう。
どこかの高校の指定ジャージの上下を着込んだその少女は、一方的に攻撃を受けていた。
とはいっても、男の技はどれも少女に聞いている様子は無い。
蹴りは避けられ、拳は止められる。
焦りの色が見て取れるのは、男の方だ。
攻めて来るでもなくただ黙々と攻撃をいなす少女の態度に、男の苛立ちが募っていく。
「くっそ・・・！　なんでまともにあたんねぇーんだよぉ！！」

叫びながら振りぬいた拳は、ようやく少女の身体を捕らえる。
額の中央。
頭を確実に捕らえた拳はしかし、少女にダメージを与えることは出来ない。
まるで壁でも殴りつけたようにぴたりと止まった拳に、男の表情は引きつった。
表情一つ変えず男の様子を見ていた少女は、ふう　と息を吐き出す。
「貴様の拳には芯が無い」
低い、落ち着いた声で呟く。
少女の言葉に、男の背中につめたいものが通った。
次の瞬間。
男の顎に強烈な衝撃が走る。
少女が放った拳が当たったのだと気が付いたときには、男の意識は頭から吹き飛んでいた。

運ばれていく男を横目で見ながら、少女はこきこきと首を鳴らした。
両手両足を掴まれて運ばれているところを見ると、どうやらまだ気絶したままらしい。
「まだこんなことしてたのか」
後ろからかけられた声に振り向くと、目の前にペットボトルが飛び込んできた。
慌てる様子もなくキャッチすると、少女はためらい無くそれを開封、ぐびりと喉に流し込んだ。
「礼ぐらい言え！」
ペットボトルを投げた男は呆れたようにため息を吐くと、少女の隣に腰を下ろした。
鋭い目つきに、短く切り詰めた黒い髪。
少女と似た雰囲気の青年だ。

「計斗。　こういう場所には来るなって何回いえばわかるんだお前は」
計斗。それが少女の名前らしい。
怒った様子の青年の言葉もどこ吹く風。
少女、計斗はペットボトルをジャージのポケットにねじ込む。
青年のほうをちらりと見ると、人垣の方に顔を向けた。
「最近はろくな奴が居ない。　さっきの奴もボクシングを齧っていたようだが拳に芯が無かった。あれでは人は倒れん」
「どこの格闘家だお前は」
顔を引きつらせる青年。
「大体なぁ。　お前もうすぐ試験だろ。勉強をしろ。勉強を。せっかく高校に行けたのに留年するぞ」
「次の試験で赤点を取ったら退学かもしれんそうだ。　担任がそんなようなことといってたな」
「帰って勉強しろ！」
すーぱん
小気味いい音をたてて引っぱたかれる計斗。
まったく気にした様子もなく人垣のほうを向いているあたり、性質が悪い。
「ほら！　いけ！　早く！」
首根っこを掴まれて、計斗はようやく立ち上がる。
「今度は大阪にでも行ってみるかな・・・強いのが何人か居ると聞くし」
「だからお前は格闘家か！　勉強をしろというのに！」
再び頭をはたかれて、不満気な表情で歩き出す計斗。
「兄貴はどうするんだ？」
青年は、どうやら計斗の兄だったらしい。
確かに顔立ちは似ている。
「おお。もう少しロードワークしてから帰る」
「自分だって喧嘩しているだろうに・・・」

「俺のはボクシングだ。　お前のといっしょにするな」
「私だって金を稼いでるんだから同じだろう。さっきのだけで五十万儲けたんだぞ」
胸を張る計斗に、青年は諦めたようにため息を吐き出した。

計斗の足先が空気に溶け込むように消えかかっていることに、この時二人は気がついていなかった。

二話

ここではない異世界。
魔法が存在し、魔獣と呼ばれる獣が存在する、そんな世界。
そのとある窓が無い部屋で、老人と少年が向かい合わせに座り唸りあっていた。
蝋燭で明かりを取ってはいるが、石造りの室内は暗く、部屋全体は見渡せない。
白いローブのようなものを着ている老人は、白髪白髭。
言ってしまえば、いかにも魔法使いといった風情の老人だ。
少年の方も、服装は老人と同じ白いローブ。
童顔なのか実際に歳が若いのか、顔立ちが幼く可愛らしい。
「先生。何が悪かったんですかね・・・」
深いため息を吐き出し、少年は潤んだ目を自身が先生と呼んだ老人に向けた。
老人も少年同様、深い深いため息を吐き出した。
「それが分かったら上手いこと召還できると思うんじゃよねー」
「ですよね・・・」
再び吐き出される深いため息。
2人は、国の事業として魔法を研究している機関の研究員だった。
と、言っても、メンバーはこの2人しか居ない。
剣と魔法の世界といっても、どこの国でもぽんぽん魔法が使えるわけではなかった。
得意な国もあれば、不得意な国もある。
二人の国は、魔法が苦手な国の筆頭のような存在だった。
元々騎士が集まって出来た国であるせいか、憧れの職業は尽く騎士。
なりあがろうとするものがなるのも騎士。
実際に実力がある人がやっているのも騎士。
と、魔法使いになりたがるお子様が皆無状態だったのだ。

おまけにどこの国にとっても魔法を発動させる方法などははトップシークレット。
教えてくださいといっても鼻で笑われる状態だ。
かと言って、まったく魔法をやらないわけにも行かない。
そこで、それなりに魔力があるこの老人と少年が、国を代表して魔法を研究していく研究員として抜擢されたのだった。
とはいえ、教科書も無い状態で早々上手くいくはずも無い。
今も2人してなんとか召還術にチャレンジしているのだが、どうしても上手くいかなかった。
「なんかこー、もっと簡単じゃと思ったんじゃけどねー。　異世界の魔物とかぽーんと出てきそーな気がするんじゃけどー」
「そうですよねー」
誰がどう考えてもそう簡単にはいかないことは分かるだろう。
そんな認識だから、魔法も上手くいかないのだろう。
「よし。　兎に角、もっかいやってみるとするかのう。　何事もチャレンジじゃ！」
「はい、先生！」
あんまり考えないで、ガンガンチャレンジしていく。
それが二人の研究方針らしい。

「お。なんだこれ」
「ん？　どうした？」
先ほどまで居た人垣の近くから離れ、人影の無い道。
お互い背中を向けたタイミングで聞こえた計斗の声に、兄は何気ない様子で振り返った。
眉をひそめて自分の顔を見ている兄に、計斗は自分の足を指差して見せる。
不思議そうに目線を下ろした兄は、次の瞬間凍りついた。

じわじわと額から冷や汗を噴出させ始めると、二三歩後ろにたじろぐ。
「う、うぉおおお？！」
「叫ぶようなことか？」
青ざめる兄をものめずらしそうに眺めながら腕を組む計斗。
しかし、兄の驚きは止まらない。
「叫ぶようなことかってお前、脚！　半透明になってるぞ？！」
「だな」
絶叫といっていいだろう兄の声に対して、計斗はまったく焦る様子も何も無く落ち着き払っていた。

一方、そのころ。
剣と魔法の世界の件の石造りの部屋では。
「ふんだばだばぬるすわぁー！！」
「先生！　なんか脚でてきましたよ！　脚！」
床いっぱいに書かれた魔法陣が蒼く発光し、その中央に二本の何かがうっすらと現れ始めていた。
地面に接している部分が一番濃いところを見ると、下から徐々に実体化してきているらしい。
「まーじーかぁー！　まじでかぁー！　よっしゃー、もっと魔力を注ぎ込むんじゃぁー！」
魔方陣の端っこでは、老人が妙なオーラを全身から迸らせていた。
どうやら魔方陣を発動させているのは老人らしい。
「先生！　僕もお手伝いします！　はぁぁぁ！！」
少年も魔法陣が書いてある地面に手を付くと、体から妙なオーラを迸らせ始める。
どうやらそれが魔力らしい。

「消えてきてる！！　どんどん薄くなってるぞお前ぇ！！」
「叫ばんでも見れば分かる。　どうなってるんだろうなこれは」
先生と呼ばれた老人と少年が気張っている頃。
計斗の身体はみるみる薄くなっていた。
やはり兄はテンぱっていたが、当の本人はリアクションが薄い。
「これはアブダクションかなんかだろうか？」
「ＵＦＯ？！　宇宙人か？！」
「いや、心霊現象かも知れんが」
「どっちだ！！」
「どっちだろうな？」
まったく緊張感の無い計斗の言葉のせいでかく乱されたのか、兄はばたばたと歩き回ることしか出来ない。
もっとも、突然目の前で人の体が消えていけばそのぐらいしか出来ないだろうが。
「ん？　お？　なんか脚が元に戻ってきたぞ？」
眉をひそめる計斗。
その言葉通り、先ほどまで進んでいた半透明かが止まり、徐々にではあるが元に戻りつつある。
「何なんだいったい！　どっちだ？！　ＳＦか？！　心霊現象か？！」
「それが分かっても対処の仕様が無いだろう」

「あ、やば　わしちょっと意識遠くなってきたかも」
白目をむき、ふるふると震えている先生。
心なしか体から出ている魔力の量も減っている気がする。
「せ、せんせぇー！　しっかりして下さいぃぃぃ！」

弟子らしい少年の悲痛な叫びも、逝き掛けて居る先生には届かない。
それでも、このまま昇天して貰う訳には行かないだろう。
「先生！　これさえ成功すれば、きっと魔法にだってスポットが当たるんです！　国王様だってきっとお喜びになられますよー！」
少年の声が、先生の耳朶を叩く。
「そ、そうじゃ・・・！　国の発展の為・・・国王様のため・・・ここで倒れるわけにはいかぬわぁあ！！」
先生の目に光が蘇った。
体から放出される魔力が、今までと同じ、いや、それ以上に膨れ上がる。
「ふぉらぁああ！！」

先生の渾身の魔力が効いたのか、計斗の体が加速度的に透けていく。
「計斗！　くっそ、どうなって、ああ！！」
「まて」
腕を掴もうとする兄を、計斗は言葉で制止する。
「まてっておまえなぁ？！」
「私の身体に触れていることで兄貴も巻き込まれるかも知れん。掴んでどうなるものでもないだろう」
「そりゃ、そうかもしれんけどだな・・・！」
苦虫を噛み潰したような表情の兄に、計斗は肩をすくめてみせる。
「まあ、適当に待っていればどうにかなるだろう」
その言葉を言い終わるか終わらないか。
計斗の身体は完全に、空気に溶け込むように消えてしまった。

三話

薄暗い石造りの広い部屋。
窓も無く、明かりはろうそくの物らしい頼りないものだけ。
「どこの地下室だここは」
ぐるりとあたりを見回した計斗の感想は、そんな感じだった。
気になることがあるとすれば。
腰を抜かした老人と少年が、計斗を見てあわあわ言っている事だろうか。
暫くほっとこうかと思った計斗だったが、このままでは埒が開かない。
言葉が通じるか不安だったが、取り合えず声をかけてみることにした。
「大丈夫かじいさん」
ふと、計斗は自分が喋っているのが日本語では無いことに気が付いた。
聞いた事が無い言語が、口から出ている。
英語でもないし、大陸よりの言葉でもない。
と、思う。
日本語以外喋れない、というか、ディスイズアペンも危ない学力な計斗にはまったく分からなかった。
さっきまで居た裏路地から、この地下室らしい場所に来たとたん頭の中にすぽんと知らない言語一式がすぽんと入って来た感じだ。
妙な感覚で気味悪くはあったが、今は多分それどころではない。
なにせ体が透けて全然知らないところにつれてこられたらしいのだから。
「しょ、しょ、召喚成功じゃぁー！！」
「ばんざーい！！」
ふるふるしていた老人と少年が、突然立ち上がり両手を振り上げた。

「やったー！　ついにやったんじゃぁあ！！」
「ばんざーい！　ばんざーい！！」
万歳三唱状態だ。
よっぽど目出度い事でもあったのだろう、計斗の言葉も無視して喜びの声を上げる2人。
無視されて一瞬むっとする計斗だったが、二人の言葉でなんとなく状況が飲み込めてきた。
「そうか。ファンタジーの方だったのか」
どうやら自分は召喚されたらしい。
暗さに目が慣れてきたのか、さっきよりも周りの様子が良く見えるようになってきていた。
足元を見てみると、なにやら円形の魔方陣のようなものが描いてある。
まあ、十中八九魔方陣そのものなのだろう。
良く見れば、老人の服装は白いローブだ。
白髪白髭白ローブの老人　＝　魔法使い
計斗の中では絶対的な方程式だった。
かなり理不尽な気はしないではないが。
「盛り上がってるところ悪いんだが。　説明して貰えると有難いんだが」
「ふをっ？！」
ちょっと大き目に声をかけてみると、今度はリアクションが合った。
「そうじゃ、そうじゃった！　ファーストコンタクトじゃ！　召喚獣とファーストコンタクトをせねば！」
「がんばってください先生！」
召喚。獣。
獣なのだろうか。
獣と呼ばれることに一瞬抵抗があった計斗だったが、人間も獣の一種だ。
召喚された人間と言う意味では召喚獣でまったく間違いない。

そうか。私は召還獣なのか。
自分の中で妙に納得しながら、計斗は取り合えず老人の方に身体を向けた。
「ワシはガルド。　ただ、ガルドとだけ呼んでくれ。　多分恐らくきっとおぬしを召還したのはワシじゃ」
ガルド。
そう名乗った老人は、言葉とは裏腹に自信満々な様子でビシッと親指を立てた。
「私は稲生。　稲生　計斗という」
名乗られたらきちんと名乗り返す。
礼儀にうるさい兄に叩き込まれたことの一つだった。
「イノウ　ケイト。　イノウ？　が姓かの？」
「そうだな。　計斗が名前だ」
「じゃー、あれじゃ。近所のおばちゃんにケイチャンとか呼ばれる感じの」
「そんな感じだな」
近所のおばちゃんのあだ名のつけ方は全世界共通らしい。
意外な共感ポイントになんとなく異文化交流を感じだ計斗だった。
「というか、基本的なことから聞きたいんだが。　私は召還されたのかやっぱり」
「え。　なんじゃ。召還されるとこう、こっちの事情とかすぱっとわかるとかそういうベンリ機能はなしな感じなんかの？」
「んー」
言われて首をひねる計斗。
べつに召喚される理由とかは思いつかない。
「全然」
「そうなのかぁー。　すごいのう！　すごいのう召還獣！」
何か分からないがわくわくしてくれたらしい。
「いや、実は国家事業として来て貰ったんじゃよ！　戦ってもらおうと思っての！」

興奮気味に話すガルド老人。
「各国が異世界から召喚した魔獣どうしを戦わせると言う、夢の祭典があっての！」
「異世界か。　でも私の場合ビジュアル的に異世界のものって分からなく無いか。　ご老体ともあの少年ともあまり変わらんぞ」
「あ。マジじゃ」
ガルド老人の症状が始めて曇った。
じーっと計斗の足元から頭の先までを眺めると、唸りながら腕を組む。
「人型で、異世界の魔獣・・・そういえばケイト殿はなんという魔獣なんじゃろう・・・」
「私の世界では普通に人間と呼ばれていたが」
「人間。　あー。まー人間の形じゃしのー」
「人間の形ではあるな」
ガルド老人の中ではやっぱり魔獣前提なのだろう。
そのまま人間と言うことにする選択肢は無いらしい。
「のう、おぬしはどう思う？」
隣で棒立ちしていた少年は、急に話を振られて全身をびくつかせる。
「へ？！　え、えっと！　異世界で、人間の形って言うとですね！　えーっと・・・」
泡を食ったようにわたわたと手足をばたつかせる少年。
くるくるのくせっ毛とくりくりの大きい瞳が、とてつもなく愛玩動物っぽかった。
世の中可愛い生物って居るものなんだな。と、なんとなく計斗は頷いた。
「えっと、ですね、僕たちから見たら、ですけど、その、あ、悪魔とか？」
「おー。　悪魔かー。　その辺いい線かもしれんのー」
「異世界の生物的な意味では言い得て妙かもしれんな」
納得した様子の計斗とガルド老人。

計斗的には悪魔でも獣でもどっちでもいいらしい。
「なーるーほーどのぉー。　悪魔じゃったのかぁー」
「私も始めて知ったな」
「意外ですねー」
頷きあう三人。
「悪魔も従わせてしまうのか召喚術というのは。　すごいのぉー。
やっぱこー、逆らえないなーとかそんな感じなのかのう？」
召喚されたものは償還したものに従うとか、そんな感じのことなのだろうか。
「ん？　召喚されると逆らえないのか？」
「え、ちがうんかの？」
どうやらガルド老人にもその辺は良くわからないらしい。
「いや。私に聞かれても困るんだが。　召喚された側だしな」
「いやぁー、なにぶんワシらも召還とかはじめてじゃから」
あっはっはっはと笑いながら頭を掻くガルド老人。
「そうか。初めてなら分からんのも無理は無いか」
ありのままの出来事をまんま受け入れるのが計斗の人生訓らしい。
普通なら怒りそうなところだが、納得してしまう。
「そうだな。参考になるか分からんが、別に逆らわなくちゃいけないとか服従しようとか言う気は起こらんぞ？　こちらの言語が分かるようになっているぐらい
か。変化としては」
「そうか。異世界から来たから、言語は違うのが当たり前じゃもんな。それが分かるとなると召喚の際の影響かの・・・う？　む？」
研究者モードなシリアス顔で考え込もうとして、動きが止まるガルド老人。
ぎこちない動きで顔を上げると、確認するようにゆっくりと言葉を吐き出す。
「え、なに、じゃあ、特に行動制限とか無い悪魔とワシ今話してる

の？」
「そうなるんじゃないか？　私が悪魔だとすればだが」
大前提が間違っている気がするが、計斗が気にしていないのでするりと話が進む。
顔を見合わせるガルド老人と少年。
2人の頭には、同じようなことが浮かんでいた。
これって、魂とか取られるパターンなんじゃね？
恐る恐る計斗を振り返るガルド老人と少年。
よくよく見れば、計斗は目つきも鋭く結構迫力のある顔をしている。
美人系ではあるが、間違いなく・・・
「こ、こえぇ・・・」
ぼそりと呟くガルド老人。
一度怖いと思うと、人間というのは不思議なものでどんどん怖い方怖い方へと思考が走り出す。
これはもしかしたら。
取って食われる？
そんな考えが高速で2人の頭の中を走り始める。
「ん？　何だ2人して」
「ひぃっ！？」
思わず身体をびくつかせるガルド老人。
このリアクションで、計斗もなんとなく2人がおびえていることを察した。
考えてみたら悪魔と閉鎖空間に居るのだ。
しかも、さっきの会話の流れ的に考えればこちらはガルド老人と少年をあれこれする事に制限が無い的な感じになっている。
「大丈夫だ。　別に二人をとって食おうというつもりは無いしな」
と、計斗は言うと言うつもりだった。
だが。
「ひぎゃぁぁぁ！！」
「たすけてぇぇぇ！！」

二人をとって食おうと～
というあたりで、ガルド老人と少年は逃げ出していた。
石造りの部屋で唯一、木製のドアを体当たりするように開き飛び出していく。
「・・・素早いな」
なぜか感心したように呟く計斗だった。

四話

「・・・なんだこれ・・・」
植物の葉に移る石造りの室内の映像を見ながら、クスフリは加えていた煙草をぽとりと地面に落としてしまった。
兵士である彼は、今日はガルド老人の護衛任務についていた。
魔法の実験と言うのは爆発や発火などと言った事故が絶えない。
万が一のとき、ガルド老人と弟子である少年を助けるのが、護衛の主な任務だ。
元は周りの光を屈折させて合格迷彩を纏う植物を品種改良した草で、石造りの室内を監視すると言う極単純な仕事である。
たまたま今日の当番だった彼は、いつもの同じようにまた何事も無いか、爆発事故でガルド老人が死に掛けるかのどちらかだろうと高をくくっていた。
のだが。
「・・・召還成功しちゃったよ・・・」
なんということだろう。
以前から行っていた召還実験が、ついに成功したようなのだ。
何度か戦場に出たこともあるクスフリは、“敵国の魔術師が使う魔法”にはある程度慣れていた。
別に驚きもしない。
しかし。
“自国の魔術師が使う魔法”にはまったく免疫がなかった。
他人の家に新しいテレビが運ばれているのを見るのと、自分のうちに運ばれているのを見る差のような感じだろうか。
テンションのあがり方がまったく違う。
「やっべぇ・・・俺世紀の瞬間に立ち会っちゃったよ・・・なにこれ、え、何これどうすればいいのこれ・・・！」
立ち上がったり座ったりを繰り返すクスフリ。

召還に成功しただけでテンションが上がるほど、この国では魔法が普及していなのだ。
「ほんとに出てくるんだな召還獣。　獣・・・？　獣・・・これ、人間じゃないか？　え、でも人間って召還されんのか？」
剣と魔法の世界だからといって、誰でも彼でも魔法に明るいわけではない。
どちらかというと剣方面なクスフリには、魔法に関しては分からないことの方が圧倒的に多い。
「人型の魔獣ってことか？　いやでもビジュアル的にカンペキに人間じゃ・・・」
小首をかしげるクスフリ。
腕組みをして唸っていると、中の様子に変化があった。
ガルド老人と弟子の少年が、じりじりと召還された人っぽいのから離れ始めたのだ。
「ん？」
植物は光を伝えるだけなので、音は聞こえない。
そのため中でどんな話が展開しているのかまったく分からなかった。
「なんかあったのか？」
不審に思い、眉をひそめて植物に顔を近づけたときだった。
「ひぎやぁぁぁあああ！！」
「おーたすけぇぇぇ！！」
ガルド老人と少年が、研究室のドアを蹴破って飛び出してきたのだ。
ちなみに、研究室は森の中にあった。
態々窓もない石造りにしているのは、爆発事故が起こっても周りを巻き込まないためだった。
屋根部分は吹っ飛びやすい比較的軽い石材を使っているのだが、光が殆ど無いため事情を知らない計斗には地下室に居るように感じたわけだ。
「どうしたんですか？！」
走ってくるガルド老人と少年に面食らうクスフリ。

2人は年齢からはいろいろな意味で想像もできないような素早さで後ろに回りこむと、クスフリを盾にするように隠れた。
「ちょっと、何なんですか？！」
「どうやら悪魔を召還してしまったようなんじゃ！」
「悪魔？！」
人型で異世界の魔物。
なるほど悪魔という線もあるのか。
納得するクスフリに、ガルド老人は早口でまくし立てる。
「召還したは召還したんじゃが、言うこと聞いてもらえるようにする魔法とかそういうの全然考えとらんかった！　参考にしたずたぼろの魔道書に書いてあった魔法陣が穴食いじゃったから色々修復して試していこうとおもっとったんじゃが、意識ブロックやら行動制限やらがすっぽ抜けた状態で召還に成功してしまったんじゃぁ！！
　言語注入には成功したみたいなんじゃが」
「いやいやいや！　専門的なことは良いですから、要点だけ掻い摘んで下さいよ！」
こういう咄嗟の時には、一から説明されると逆にこんがらがるものだ。
「えーっと、あれじゃ！　言葉を分かるようにしただけで素のままの悪魔を召還してしまったわけじゃ！」
びしりと親指を立てるガルド老人。
錯乱しているのか何なのか、なぜか自慢げだ。
ガルド老人の言葉に、クスフリの顔から音を立てて血の気が引いていく。
「なにそれやばいんじゃないんですか？　こう、無闇に我を召還した罰として魂を頂くとかそんな感じのあれで」
「うん。そうかも」
「なにそれこわい」
「護衛兵がこわがってどーするんじゃー！　早くか弱い老人の盾になるんじゃこの若者！」

「こわいよー　こわいよー！」
理不尽なことを喚きながら、クスフリをぐいぐい押し出すガルド老人。
少年はあまりの恐怖からか、脚にがっしりとしがみ付いている。
「分かった！　わかんないけど！　取り合えず2人とも落ち着いてくださいよ！」
落ち着かせようと声をかけるが、完全にビビッて居る二人はまったく聞いていない。
そうこうしている内に、とうとう件の人物が石造りの部屋から出てきてしまった。
「おお。地下室じゃなかったのか」
明るいところに目が慣れていないのか若干目を細めながら、計斗はゆっくりとした足取りで扉を潜る。
腰まである黒髪に、鋭い目元。
凛とした顔立ちは、美人ではあるが妙にやはり迫力がある。
まあ、平たく言えば。
「うわ・・・思ったよりこえぇ・・・」
思わず口に出して観想を言ってしまうクスフリ。
戦士だから分かる感覚とでも言うのだろうか。
初見ではあるものの、計斗を見たクスフリは思わず身構えてしまった。
外見は女だが、纏う空気が尋常じゃない。
そう、感じ取っていた。
似たような感覚を自分の中で探すうち、ふと、思い当たるものがあった。
「そうか。　拳闘士か」
戦場で武器も持たずに拳だけで戦う奇特な奴らに会ったことがある。
そいつらの雰囲気が、ちょうど目の前の計斗と同じ感じだった。
クスフリの口から出た単語に、計斗の眉が上がった。
足を止め言葉を少し何かを考えるように視線を上にあげ、顔に微笑

を浮かべる。
「拳闘士か。悪魔よりもそれがいいな」
ごくり。
「なにあれこわい」
我知らずつばを飲み込み、クスフリは素直な感想を吐き出した。

五話

拳闘士。
何度か聞いたことがある言葉だったが、まさか自分がそう言われるとは思わなかった。
悪い気はしないものだな。
そんなことを考えながら、計斗はまだ光に慣れていない目で奇妙な物体を眺めていた。
金属製の胸当てをした兵士らしき若者に、おびえたじいさんと少年がへばりついているというものだ。
そうそうお目にかかれるアイテムでもないだろう。
いや、アイテム扱いは失礼だろうか。
もっとも、計斗的にはどっちでも良かったわけだが。
「たすけてくださいー　たすけてくださいぃぃ！　わしなんて食ってもすっかすかで全然うまないぞぉー！」
「ぼくもー！　ぼくもおいしくないですー！」
泣き喚くガルドと少年。
「ガルド老のほうは不味そうだが、少年の方はうまそうだぞ色々な意味で」
「どんないみですかー？！」
さらりと言う計斗に律儀に突っ込む少年。
どうやら基本的には突っ込みの人らしい。
「まてまてまて！　ちょっとまってって！」
兵士、クスフリは大きく手を振って、計斗の注目を自分に向けさせる。
「俺はクスフリ・バーンメル。　二等兵だ。　ガルド殿とラロ殿の護衛をしている者だ」
どうやらラロというのが少年の名前らしい。
漢字じゃなくてカタカナ表記なんだろうな、などとどうでも良い事

が頭を過ぎる。
そういえば、文字とかはどうしようか。
脱線しそうになる思考を、頭を振って振り払う。
名乗られたら、名乗り返すのが人の世の礼儀だ。
「私は稲生　計斗。　学生だ。　どういうわけかそこの御老体に召喚されたらしい」
「学生か・・・。　って、そこじゃない。　ほんとに、悪魔なのか？　この2人に危害を加えようというなら、護衛として俺は守らないといけないんだが」
クスフリは体と顔を計斗に向けながらも、周囲に目線を走らせた。
周りは森だ。
いざとなったら二人にはそっちに逃げてもらえば良い。
2人ともこの辺の地形には慣れているから、うまく逃げてくれるだろう。
今クスフリが持っている武器は、腰に刺した剣。
それと、映像伝達植物の横に置いた木製刃の訓練槍だ。
万が一召還獣が出たときに、殺さずに押さえつける為に持ってきたものだ。
とは言え実際に使うような状況になるとは、思いもしなかったわけだが。
正直、クスフリは剣よりも槍のほうが得意だった。
訓練用とは言え槍は槍。
返答次第では2人を逃がして、兎に角槍を取りに。
相手はせっかく召喚に成功した召喚獣だ。
出来れば倒さず、捕らえたい。
いや、そもそも自分ひとりでどうにかなる相手なのか？
様々な考えた、クスフリの頭を駆け巡る。
態度や見た目こそ変わらない。
それでもどういうわけが現代日本に生きていながら、無駄に修羅場を潜ってきた計斗にはクスフリが考えていることがなんと無しに察

することが出来た。
計斗はため息を吐くと、軽く両手を挙げてみせる。
「安心しろ。さっきも言おうとしたが、別に取って食おうとは思っとらんし、そもそも人間は食わん。魂もな」
「え、そうなの？！」
計斗の言葉に、真っ先に反応したのはガルド老人だった。
「なんじゃぁー！　びっくりしたぁー！　食われるかと思ったぁー！」
「よかったぁー　よかったぁー！」
クスフリから離れ、がっくりと膝から崩れ落ちるガルドとラロ。
「食わん食わん。食ったことも無いしな」
コクコクと頷く計斗。
あっけらかんとしたそのように、クスフリも少し肩の力を抜いた。
「なんだ・・・でも、悪魔なんだろう？」
「いや。自分の、なんというか。この世界で自分の種族を呼称する言葉がわからんでな。一応もとの世界では人間と呼ばれてはいたが」
小首を捻る計斗に、ガルド老人が眉を寄せる。
「それって。普通にただの人類ってことでいいんじゃないかのう？」
「そうか。その線もあるな」
今気が付いたとでも言うように、ポンと手を叩く計斗。
「・・・ていうか、それなら悪魔呼ばわりされた時点で文句言えばよかったんじゃ・・・」
「別に何と呼ばれようと私は私だ。　何も変わらん」
腕組みをして、平然と答える計斗。
そんな彼女に、その場に居た男三人は「なんて無駄な男らしさだ」と言う感想を胸に抱いたが、結局誰も口には出さなかった。
「じゃあ、召喚“獣”の魔方陣で、人間が出てきたってこと？　なのか？」
「そういうことじゃないでしょうか・・・」
クスフリに聞かれて、首をかしげるラロ。

「つまり、召喚獣の実験的には、失敗ってことか？」
「たぶん・・・」
三人の視線が、計斗に集まる。
「良いんじゃないか？　人間も獣だろう」
「・・・そりゃそうかもしれんけどのう・・・」
あっけらかんと言う計斗に、なぜか膝から崩れ落ちるガルド老人。
「なんてことじゃぁー！　魔獣を召喚しようとして一般人を召喚してしもうたのかぁー！」
「せ、先生！　大丈夫ですよ！　もしかしたら軍人さんとか、その、すごい、魔法が使えるとか！」
絶望して地面に突っ伏すガルド老人を、何とか励まそうとするラロ。
何が大丈夫なのか良くわからないが。
「いや。さっきも言ったように私は学生で魔力の類は一切無い多少身体能力に自信がある程度の一般人なのだが」
「ぐはっ？！」
「せんせー！」
計斗の言葉が突き刺さったのか、逆えびに仰け反るガルド老人。
「ああ、ちょっと。　老人になんてことを・・・ん？」
老人虐待現場に眉をひそめるクスフリだったが、耳に入って来た物音に後ろを振り返った。
計斗も何かの気配を感じ取ったらしく、三人に歩み寄りながらクスフリと同じ方向に目を向ける。
どたどたという地面を蹴る音。
動物のものだろうか。
人間のものよりもはるかに力強いそれに聞き覚えの無い計斗は、眉をひそめる。
クスフリには聞き馴染みのあるものなのか、相手が誰か察したように納得した顔をしていた。
木々の陰と、ちょっとした草の間を何かが駆け足でやってくる。
近づいてくるその姿に、計斗は驚きと楽しさが入り混じったような

微笑を浮かべた。
「なるほど。確かにここは、私の居た世界ではないな」
走ってくる、人を乗せた二足歩行の爬虫類の姿。
自分の世界ではお目にかかったことの無いそれに、計斗は自分が異世界に来たことを確信したのだった。

六話

ファンタジーなどの創作物に数多く触れている日本人の性と言うかなんというか。
計斗は自分が陥った状況についていくつか仮説を立てていた。
同じ地球上のどこかに飛ばされたのか。
同じ宇宙のどこかか。
それともまったく別の、所謂異次元なのか。
様々な可能性と恐れが頭に浮かんでは消えていく。
その中で、一番そうだったらつまらないと思っていた恐れが、今、計斗の目の前に消え去った。
石造りの小屋がある森の切れ間に、大きな足音が響いてくる。
巨大な二足歩行の爬虫類。
それも、人を乗せた。
クスフリの表情を見る限り、彼にとっては珍しい物ではないのだろう。
地球上に、計斗の知っている時代に、世界にあんなものが居れば、間違えなくニュースなり何なりになるだろう。
近所のヤバイじいさんが、ラリってたまたまあんな現象を起こした訳ではなかった。
一瞬だけど疑って悪かったガルド老人。
だってなんかテンションがおかしかったから。
そんな失礼なことを思う計斗。
兎に角。
計斗が生きる世界には、あの動物は存在しない。
異世界にしても。
違う惑星にしても。
ここは計斗の、知らない世界だ。
自分の知識の及ばないものが目の前にある。

今居る世界そのものがまったく知らない、未知の領域なんだ。
楽しい。
面白いことこの上ない。
計斗の顔が、自分でも分かるほどの歓喜の色に満ちる。
もっとも近くで見ていたクスフリ的には、「なんでこの人、獲物を見つけた肉食獣みたいな顔しるんだ」という感想を抱くような感じの表情だったのだが。
ふと、計斗は肝心なことに気が付いた。
爬虫類っぽいものが騎乗生物であることは、まあ、人を乗せているのですぐ分かったのだが。
問題は載っている人のほうだ。
人間にしては、妙に耳がとがっていないだろうか。
まあ、服装自体も変わってはいた。
アロハみたいな派手なシャツを着て、軍隊の高級仕官の物らしき上着を肩に引っ掛けてマント風になびかせているのだ。
金髪に青眼、白肌で、かなり整った顔立ちをしている。
そして、耳がとがっていた。
「あの人物は、エルフとか言う種族じゃないか？」
「ん？　ああ、そうみたいだな。　誰だろう、こんなところに」
計斗の質問に当たり前のように答え、腕を組むクスフリ。
エルフも当たり前らしい。
「ファンタジー世界か。　面白いな」
改めて計斗が振り返ると、騎乗生物に乗ったエルフは、声が届くところまで来ていた。
「ん・・・？」
そのエルフに見覚えがあったのか、クスフリの表情が凍りつく。
「おー？　なんじゃー？」
ガルド老人とラロもようやく気が付いたのか、むっくりと起き上がってきた。
恐ろしく気が付くのが遅いが、それだけショックだったのだろう。

騎乗生物のことがどうしても気になった計斗だったが、今は取り合えずエルフのほうに注目することにした。
人間関係はとても重要。
礼儀にうるさい兄の口癖だ。
半開きにも見える垂れ目に、寝癖のようにも見えるくせっ毛。
妙ににやけた表情。
そして、絶対に服務規程違反な派手なシャツに、シルバーアクセサリーに彩られた高級仕官上着。
年の頃は、二十代後半か三十代前半位だろうか。
チャラい。
ひたすらにチャラいおっさんだ。
チャラいおっさんがエルフ。
なんとなくファンタジーの流として「エルフ＝お堅い」なイメージだった計斗にとっては、カルチャーギャップこの上ない事態だ。
「なんじゃい、カロルコか。　どーしたんじゃこんなところに」
眉をしかめるという、計斗的あっけに取られた顔のとなりで、あっけらかんと言うガルド老人。
どうやらカロルコと言うのがこのエルフのおっさんの名前らしい。
「こんなところは無いんじゃないの？　自分の研究室じゃない」
見た目よりいくらか低い声だ。
カロルコはガルド老人の言葉に苦笑しながら、騎乗生物から飛び降りる。
飛び降りる動き、地面に着地するときの安定感。
そして何より、チョイワル親父風な服装の下にある骨格。
相当に鍛えてある。
一見してそっちに興味がある女子高生というのもどうかと思うが、計斗のカロルコに対する評価は「強そうなチョイワルおっさんエルフ」ということになった。
ちなみにガルド老人は「ぼけてそうなじいさん」、ラロは「ショタ」、クスフリは「かわいそうな青年」だった。

とてつもなく失礼な評価だが、まあ本人達が知ることは無いだろうから良いのだろう。
「つったっておぬしがくるよーなとこじゃないじゃろ。　何ぞ用でもあったんかの？」
「なぁーに。　ガルじぃの顔が見たくなってねぇ。　ところで、そこの彼女に紹介してもらってもいいかな？」
カロルコの視線が計斗に向いていることに気が付き、「それもそうじゃった」とガルド老人は頷いた。
「こちらは、イノウ・ケイト殿。　わしがなんやかんやで異世界から召喚してしもうた学生さんじゃ」
「ええ？」
カロルコの表情が曇る。
そりゃ突然そんなことを言われたらどう反応していいか困るだろう。
「召喚実験事故に巻き込まれた感じだとおもって貰って構わんのじゃないだろうか」
「そうそう。そんなかんじじゃな」
計斗の言葉に頷くガルド老人。
ますます困惑の顔を深めるカロルコだったが、ガルド老人と計斗的にはそれ以上説明する気もないようだった。
「召喚実験してるとは聞いてたけど。　それってなんか、けっこうな事故なんじゃないの？　異世界の女の子さらっちゃった様な感じになるんじゃない？」
カロルコの言葉に「そういやそうだ」と感心したように頷くガルド老人と計斗。
計斗的には別にさらわれようが何しようが特に気にしていなかったし、ガルド老人もなんかひとしきり落ち込んで落ち着いていたのでどうでもよくなっていたのだ。
「時に、貴方の御名前を御伺いしても良いだろうか。　カロルコ殿、と、呼ばれておいでの様ではあるが」
「おお。そうじゃったそうじゃった」

計斗の言葉に、ガルド老人が慌てたように声を上げる。
「紹介を頼まれたんじゃったの。　コヤツはカロルコ・ザルドフェルド中将。　この国の軍隊の将軍じゃよ」
「よろしくね」
軽い感じに手を上げるカロルコ。
中将。
その言葉にクスフリの顔色が一気に青ざめ、姿勢が直立不動になり、計斗の眉間の皺がますます深くなった。
「中将って偉いんじゃないのか？」
「まあ、そこそこ？」
「上から二番目ぐらいかの」
割と深刻な顔で聞く計斗だったが、カロルコとガルド老人の反応は恐ろしく軽かった。
「・・・大丈夫なのか？」
「あんま大丈夫じゃないと思うの」
思わず漏れた計斗の言葉に、やっぱりあっけらかんと答えるガルド老人だった。

六話（後書き）

ラロって一体どのぐらいの人に認識されてんだろうって思ったけど、
作者も読み返して思い出す程度の存在感だから良いかなっ
って、おもった

七話

「なんか、なんとも言いようが無い感じだねぇ」
森の中を進みながら、カロルコは複雑な表情で言った。
「生きていればどんな事でも起こり得るという教訓を得たな」
なんでもないことのように言い放つ計斗だったが、かなり長く生きてもあまり異世界召喚とかはされないんじゃないだろうか。
一通り起こったことを説明しながら、計斗達は森の中を歩いていた。
日本の里山のようにある程度管理された森林なのか、割と歩き易い。
考えてみればガルバス老人やラロのような少年も、道のない森の中を突っ切って石造りの小屋に言っているらしいので当然かもしれないが。
このままあの場所に居てもしょうがないということで、今五人は近くにあるという王城に向かっていた。
王城。
王様が住んでいるから、王城。
実に安直だ。
なんでも今居る森は、首都近くにあるものなのだそうだ。
とは言え、少し歩かないといけないのだそうだが。
そんな訳で、計斗とガルド老人は、歩きながらカロルコとクスフリに事の次第を説明していた。
もっとも召喚実験失敗したら一般人出てきちゃった。
位しか説明できないわけだが。
「でも、すごく落ち着いてますよね。　計斗さん」
少しだけ首をかしげ、少し潤んだ目で計斗を見上げるラロ。
ほわほわの銀髪に、青い目。
男の子か女の子か迷うほどの中性的な顔立ち。
この子はその手のマニア向けに設計された何かなんじゃないか、と、死ぬほど失礼なことを一瞬思ったりしながら、計斗は「ん」と短く

返事をする。
「私のもと居た世界の、私の住んで居た国は妄想力に長ける人間が多くてな。　自らが考えた事実無根の物語を捏造しては絵や文章にし、それを人に見せて金を貰うという職業が成り立っておるのだ」
「それは小説家さんや画家さんでいいんじゃ・・・」
顔を引きつらせて冷や汗をながすラロ。
「おお。そう言った者はこの世界にも居るのか。それは話が早い。
私の世界では実際に魔法が使えるものが居ない。　居たとしても、世間一般ではそんなものは存在しないことに成っている。　ゆえにそういったものに憧れ、そういったものが実際に使える世界を空想した作品なども多数存在する。　溢れ返っていると言ってもいい」
「はぁ・・・」
ぽかんとしているラロの顔をちらりと見て、計斗は肩をすくめて見せた。
「だから、突然こういう目にあって、ああそういう物なのか　と、さほど混乱することも無く思えた訳だ。　勿論驚いてはいるがな」
「まったくそうみえねぇーのぉー」
恐ろしいものを見る目でぼそりと呟くガルド老人だった。
「よーするにＳＦやらＦＴってことじゃろ？」
「おおう。　この世界にもそんな言葉があるのか」
「そりゃお前さん、うちの国は魔法も何も無いからの。火薬やら酸やら鉄やら。　何やらかんやら科学方面でもある程度やらんと攻め滅ぼされるんじゃて。そういう知識ぐらいあるわい」
「成るほどそれはそうか・・・」
感心したように唸る計斗。
ふと、四人に合わせるために騎乗動物から降りて歩くカロルコに目線を向ける。
よくよく見れば、縫合や布地など、かなり綺麗に作られていることがわかる。
技術力は計斗が考えているファンタジー世界よりも、高いのだろう。

「ケイトちゃんの住んでいた世界は、どんな感じだったんだい？
俺達のこと見たら原始人にみえるんじゃない？」
カロルコの質問に、計斗はなんと答えたものかと首を捻った。
「んー。街を見てみないと技術レベル差ははっきりとは言えんが・・・。　魔法や超能力的なものが無い代わりに、かなり科学力は進んでいるのだと思うぞ。　半径三キロを跡形も無く消し飛ばす爆弾や、三千人が乗り込み戦争する為の拠点となる鉄の船。　或いは、音が伝わる速さよりも素早く空を飛ぶ鉄の塊とかがある」
「なんじゃそりゃ。　マジでか。信じられんのぅ」
胡散臭そうな顔をするガルド老人に、カロルコは楽しげに笑って言う。
「逆に俺達が当たり前だと思ってる魔法なんかがその世界じゃ非常識なんだ。　さもあらんって感じなんじゃない？」
「そうなんかのぉー」
「私に言わせれば召喚術が他国では当たり前の技術だというこの世界こそ信じられんよ」
なるほどのぉー、と、納得した様子で頷くガルド老人。
「しかし、予想以上に話が早いな・・・もっと事情が通じずに困るかと思ったんだが」
怪訝そうに首をかしげる計斗。
サブカルチャーに親しく触れる日本の若者である計斗としては、こんなに簡単に話が進むのが不思議で仕方ないらしかった。
「そりゃーあれじゃ。よその国はバンバか魔法技術がすすんどる分、昔は時たまあったんじゃよ。異世界の人召喚しちゃう失敗」
「・・・あー」
一瞬顔をしかめてから、ぽむっと手を打つ計斗。
計斗が始めての異世界人、という訳ではないようだ。
ならば、ある程度見当をつけてくるのにも頷ける。
計斗の様子が面白かったのか、カロルコは声を出して笑う。
「とはいっても、ここ１０００年間に片手に納まるぐらいの人数だ

けどね。　案外、その中にケイトちゃんと同じ世界の住人がいたかもしれないよ」
「かもしれんな」
そう考えるのも面白いかもしれない。
我知らず、口の端が吊りあがる計斗だった。
「ちなみに、一番最近にそうなった人物は、まだ生きていたりしないのか？　会ってみたいモノだが」
「さーてのぉー。　他国でのことじゃし詳細はよう分からんが、確か二百年ちょい位前で、ガッツリお亡くなりになっとったと思ったがのぉー」
「そうか・・・貴重な先輩の話を聞いてみたかったのだが。　ところで・・・」
計斗は足を止めると、後ろを振り向く。
自分達の後ろ。
少し離れた位置から付いて来る、未だに青ざめているクスフリに顔を向けた。
「なんでクスフリはあんなに青くなってるんだ？」
「さあ？」
「なんでじゃろ」
首をかしげるガルド老人とカロルコ。
彼らの国では、まずトップが国王。
その次が、元帥、大将、中将、少将という順に階級付けがなされていた。
つまり、中将とはこの国の第四位。
四番目に偉い人ということに成る。
規律正しく真面目な兵隊である、下から数えて二番目な階級のクスフリにとっては、まさに雲の上の存在だ。
だが、当の本人は愚か、ガルド老人も計斗もまったくそれを気にした様子が無い。
「くっすぃー、だいじょぶ？」

カロルコの言葉に、ガルド老人が首をかしげる。
「だれじゃくっすぃーって」
「クスフリ君だから見たいな？」
要するにあだ名だ。
「あー。　なーる」
「あまり良いセンスとは言えん気がするが」
妙に納得した顔をするガルド老人と、腕組みをして小首をかしげる計斗。
突然話を振られたクスフリはたまった物ではない。
カロルコの声が耳に入った瞬間、クスフリの全身からブワリと嫌な汗が噴出す。
「は　はっ！　何か御用でありましょうか！」
ビシッと直立不動の姿勢になり、カロルコに向き直るクスフリ。
やばいぐらい顔色が悪いことに気が付いている・・・というか、気にしているのはラロ位だろう。
「いいよねぇ、くっすぃー」
「は？」
緊張していたクスフリには、そのくっすぃーが何を指す言葉なのか分からなかった。
あまりに緊張しすぎて、話が頭に入っていなかったのだ。
何のことか聞こうか、そう思ったクスフリだったが、次の瞬間その考えを脳内で槍で突き殺した。
下級兵士根性が骨身にしみている、というより、むしろもう下っ端根性で出来ているといっても過言ではないクスフリにとって、中将閣下の御言葉にＮＯの返事は絶対に無いのだ。
「いえ、はっ！　良いと思いますっ！」
「ほら」
「まあ。本人がそういうなら。良いんじゃないか？」
何のことなんだろう。
頭の中をぐるぐると回るその疑問が解消されたのは、結局暫く後に

なってからだった。

八話

そそり立つ様に巨大な石造りの本体に、空を突くいくつもの尖塔。
これぞまさにと言わんばかりな存在感を放つその城は、計斗を満足させるに十分なものだった。
「某県にあるのに首都の名前を冠したあのネズミが居る帝国にある城もはだしで逃げ出すサイズだな」
「なんじゃそれ」
感動のあまり良くわからないことを口走る計斗に、律儀に反応するガルド老人だった。
王城は、森のすぐ近くにあった。
元居た場所からも見えそうな距離だったが、木が邪魔で姿かたちを確認できなかったようだ。
「しかしデカイな。　東京競馬場のメモリアルスタンドとどっこいぐらいか」
「なにそれどこそこ」
コクコクと頷きながら言う計斗に突っ込みを入れるガルド老人。
喧嘩して回るのに、けっこういろんな場所に出没している計斗だった。
「割と立派でしょ？　ここがこの国の中枢。王城。　なになに城とか、なんとか城って名前は無くて、ただ王城ってことになってる」
「名前をつけると不吉だから。とかか？」
興味深そうにたずねる計斗。
計斗の質問に、カロルコはなんともいえない微妙な表情を作る。
半笑いと言うか、呆れていると言うか。そんな感じだ。
「いや。　これ作ったときの王様がね？　なんか自分がネーミングセンス無いからって言って。結局名前付けずじまいになったんだって」
「・・・そうか」

カロルコ同様、計斗もなんともいえない微妙な表情で返事をする。
これだけ立派な城なのに、なにか意味も無く切なくなる話だ。
「それで名前を付けんで終わると言うのがある意味凄いな」
「うちの王族は代々なんかそんな感じなんじゃよ。　今の王もなんかそんな癖の強い感じじゃぞ」
それは癖が強いで終わらせて良いんだろうか。
なんとなく、この国の王族に一抹の不安を覚える計斗だった。
と、唐突に重要なことに気が付いた。
「そうだ。この国は王政なのか？」
「何じゃいまさら」
計斗の質問に、ガルド老人は怪訝そうに首をかしげた。
「いや。まあそうなんだが。　王政と言っても色々あるだろう。議会やらなんやら」
「あー」
頷くガルド老人。
国王が居るからと言って、実際に政治を国王がやっているとは限らない。
象徴としての存在に成っていることがあるのは、こちらの世界の例を見ればわかるとおりだ。
「うちの国は絶対王政だよ。細かい形態は、いわゆる軍事国家に近いのかなぁ。　王様が一番偉くって、次が元帥、大将、中将、少将って感じでつづいてくんだよね。　国内外での戦闘は勿論、橋の修理の予算計上から戸籍の管理、土地の測量記録から何から公務にかかわることは一切合財軍のお仕事なんだよ。勿論、実際の工事とか建築とかは一般の専門家にお願いするわけだけどね？」
「司法、立法、警察なんかも軍なのか？」
「そういうこと。　いやぁ、ケイトちゃんは話が早くて助かるなぁ」
楽しそうに笑うカロルコ。
満足そうなその顔をみて、ふと、計斗は大切なことを思い出した。
「ん？　たしか中将だったよな？」

「俺の階級？」
「ああ」
「うん。中将だよ」
軽い感じに返され、眉間に皺を寄せる計斗。
少し後ろの方からその様子を見ていたクスフリは、計斗に力の篭った視線を送っていた。
そうだ。その人はすごい人なんだ。
だから頼むから失礼なことはしないでくれ。
下っ端根性が心底染み付いているクスフリとしては、計斗がカロルコと当たり前のように並んで話しているのを見ているだけでも心臓に悪いのだ。
「んー」
何事か考えるように唸る計斗。
中将というのは、計斗が最初想像していたよりもずっと高い地位だった。
軍だけでなく、国内で第四位だったとは思いもしなかったのだ。
少しの間じーっとカロルコを見つめ、計斗はコクリと頷いた。
「まあ、いいか」
「なにが？」
「いや、気にせんでくれ」
小首をかしげるカロルコに、首を振る計斗。
後ろでクスフリが「よくねぇぇぇ！！」と叫びたそうな顔をしていたが、計斗はまったく気にしていない。
クスフリの顔を見たラロがびびっていただけだった。
「さてと。王城まで来たのはいいんだけど、今、王様ちょっと国内の別の砦に行っててていないんだよね」
うなり、頭を掻くカロルコ。
その言葉に、ガルド老人の顔色も曇っる。
「そうじゃった。　召喚で呼び出された娘な訳じゃし、国家問題じゃぞ。異世界から誘拐してきたモンじゃしな」

何故か自身ありげに言うガルド老人。
「やった本人がすごいことといってるねぇ」
「開き直りだな」
カロルコと計斗がじと目で見るが、ガルド老人はへこたれない。
「うっさい。なにもうっさい。　研究実験には尊い犠牲がつき物なんじゃ。ケイト殿の身の振り方はわしが責任を持つからいいんじゃ」
「もうちょっとへこんでもいいんじゃない？」
呆れ顔のカロルコだったが、計斗本人は満足そうに頷いている。
「まあ、私は雨露を凌げる場所と食い扶持、それと喧嘩相手さえ居れば満足だからな」
さらっと物騒なことを言った計斗だったが、ラロがびびっていただけで他は別にノンリアクションだった。
「ひとまずその爬虫類の小屋の端っこにでも貸して貰えると非常にありがたいのだが」
「いやいやいやいや。そういうわけにもいかんじゃろ。　取り合えず国王陛下がお戻りになるまで正式な決定は保留じゃが、きちんと客人として扱わせてもらうからの」
そうそう、と、カロルコも頷く。
「非はこっちにあるんだしねぇ。　まー、どーんとまかせちゃってよ」
「そうか・・・夜な夜なその爬虫類の構造を調べようと思っていたんだが」
キュイ？！
突然計斗に肉食獣っぽい視線を向けられ、びびる騎乗動物。と、ラロ。
『そっち？！』
クスフリとラロの突っ込みの声も、きれいにハモったのだった。

九話

「あれは“草竜”と言う草食竜の一種です。　東の方にある国から渡来した騎乗動物なんですが、飼育が難しくてこのあたりでは我が国しか見られない種類なんですよ」
「ほー。　ぜひ解剖してみたい所だが」
「しないでください」
顔色一つ変えずにさらりと恐ろしい事を言う計斗に、眉間を押さえながら突っ込むクスフリ。
今2人がいるのは、王城内の応接室だった。
窓から庭園の見える、ゆったりとした広い部屋だ。
階段を三階分程上がった場所にあるこの部屋だったが、窓から顔をのぞかせてみるとまだまだ上には階があるようだった。
窓の数で何階建てか確かめようとした計斗だったが、中間階の物や階段の物らしい窓のせいで途中でごっちゃになり、数えるのをやめてしまった。
ざっと見た限りではあるが、一桁後半の階数であることは間違いないだろう。
室内にあるものやこの建築技術を見る限り、かなり高度な文明であることは間違いないだろう。
ただ、周りの魔法の影響や生物の違いなどから来る細かい技術差があるらしい。
一概に計斗がもといた世界の「〜世紀ごろの文明度」とはいえ無いだろう。
取り合えず王様が居ないから、お姫様と謁見してもらおうと言う話になってから暫く。
この応接室に通された計斗は、少しの間ここで待つようにと言われていた。
向こうも急なことで準備も色々あるだろう。

色々話を聞けるようにと残されたクスフリに色々質問をしてみている計斗だった。
窓から身体を乗り出し、外の様子を興味深そうに眺める。
庭園の木々や草花は、見たことが無いものばかりだ。
異様異質というより、国外のもの、と言ったイメージだろうか。
草はどこの世界でも草なようだ。
「面白いものだな。　やはり人間が考えることなど似たり寄ったりなのかもしれん」
「危ないですよ体乗り出したら」
心配した様子で声をかけるクスフリだが、計斗はまるっきり気にした様子もなくますます身体を窓の外に乗り出させる。
「どうでもいいが敬語で話すのはやめてくれんか。どうにも居心地が悪い」
「いえ。　ザルドフェルド中将から失礼の無い様にと言われておりますので」
「慇懃無礼と言う言葉もあるだろう。　あまり気を使われるとかえって息が詰まると言うこともある」
「はあ・・・そんなもんすか・・・あ、いや、失礼しました」
思わず出た崩れた口調に慌てるクスフリ。
その様子がおかしかったのか、計斗は目を細めてクスリと笑う。
「それで良い。そのほうがお互い遣り易いだろう」
「はあ。　まあ、ケイトさんがそれで良いって言うんなら自分はかまわないんすけど」
困ったような顔で頭をかくクスフリ。
計斗の口調は素なんだろうなぁ。なんか妙に似合うのは何でだ、と、おもうクスフリだったが、口には出さなかった。
なんとなく怖かったからだ。
「ところで聞きたいんだが」
「なんすか？」
窓から顔を出し上を眺めている計斗に声をかけられ、クスフリも窓

に近づく。
2人でのぞいても大丈夫な広さがあるそこからの眺めは、絶景と呼ぶにふさわしい。
手入れの行き届いた庭園の向こうに見える街並みも、実に美しい。
「この国の赤ん坊は皆壁に張り付いて這いずり回ったりするのか？」
「何言ってるんすか。んなわけないじゃないっすか」
突然何を言い出すのかと顔をしかめるクスフリ。
「いや。あれがな」
窓の縁に腰をかけ、背中から乗り出すように上を見る計斗。
計斗の目線の先を追いかけるように、クスフリも身を乗り出す。
「あれ」
計斗が指差した場所を見るクスフリ。
目に飛び込んできた光景の衝撃に、クスフリは思わず窓から落ちそうになった。
まだ一歳前後ぐらいの赤ん坊だろうか。
それが、壁の出っ張りに指や足をかけて、けっこうな勢いで横方向に進んでいるのだ。
「・・・な、なん・・・」
「クライミングの技術だな。アレならビルの壁だろうがなんだろうがいけるだろう」
動揺のあまりガクガク震えているクスフリに、感心したように頷く計斗。
ここまで反応が違うことも珍しいだろう。
「何感心してんすか？！　助けないと！」
「助けるも何も本人が登りたくてのぼっとるかんじだぞ」
「そういう問題じゃないっすよ！　落ちたらどうするんすか！」
「ん。それもそうか」
2人がそんな会話をしている間にも、赤ん坊は「たったったったったったっ」と声を出しながらリズミカルに壁を伝っていた。
「た？」

計斗とクスフリのことが目に入ったのだろう。
赤ん坊が進むのを止め、２人の方に顔を向けた。
目線が合い、硬直する２人と赤ん坊。
最初に動いたのは、赤ん坊だった。
「あい」
おもむろに手を伸ばして、声を発する。
恐らく挨拶だろう。
「や」
計斗も、それに吊られてびしりと手を伸ばして挨拶をする。
それを見て満足したのだろう。
赤ん坊は再び壁を移動し始めた。
「って、だめっすよ？！　こっち！　こっちっす！」
必死にアピールするクスフリの声に、赤ん坊は再び振り向いた。
自分を呼んでいることが理解出来たのか、赤ん坊は「あ？」と声を上げ、計斗たちが居る窓に近づいて来る。
「せいっ！」
窓の縁に足をかけ、腕を伸ばすクスフリ。
赤ん坊の両脇に手を滑り込ませると、ゆっくりと壁から引き剥がす。
落とさないように気をつけながら、部屋の中に入れ、ようやく安堵のため息をついた。
「まったく・・・なんだってあんな所に」
腕の中で不満気に唸っている赤ん坊を見ながら、眉間に皺を寄せるクスフリ。
計斗もようやく窓から離れると、近くのソファーにどっかりと腰を下ろした。
「まあ、どこかから脱走したと言うところだろう。どこの子供かわからんのか？」
「見当つかないっすけど。そもそもこの城に赤ん坊が居るってこと自体意味わかんないっすし」
「まあ、それはそうか」

納得したように腕組みする計斗。
ずっと抱いているのもどうかと思ったのだろう。
クスフリは取り合えず計斗が座っている横に赤ん坊を座らせることにする。
ソファーに下ろしてみると、赤ん坊は特に這い回るでもなくおとなしくそこに座った。
「あれ。逃げ出すかと思ったんすけどね」
「すわり心地がいいんだろう」
計斗の言葉通りなのか、落ち着いた様子で赤ん坊は座っている。
ふと、計斗は赤ん坊の背中が妙に膨らんでいることに気が付いた。
指を伸ばして触ってみると、かなり硬い。
「服の中に何か入ってるのか？」
怪訝そうな顔をする計斗をよそに、赤ん坊は突然自分の背中あたりに手を突っ込んだ。
「お？　なんすか？」
「解らん」
クスフリと計斗が注目する中。
赤ん坊が服から引っ張り出したのはなんと。
「・・・哺乳瓶・・・？」
そう。ガラス製の哺乳瓶だったのだ。
吸い口は透明なぷにぷにしているっぽい素材出てきている、かなり精巧なものだ。
様子を伺っているクスフリと計斗をよそに、赤ん坊はおもむろに哺乳瓶を振ると、中の白い液体をちゅーちゅーと飲み始めた。
「・・・赤ん坊が自分で哺乳瓶飲んでる・・・」
「感心なお子さんだな」
引きつるクスフリに、感心する計斗。
二者二様なリアクションだった。
「でもホント、どこの子なんすかね。この城の赤ん坊なんて、王子位しか・・・」

「王子？」
「ええ。この国の第一王子様っす。　でもいくらなんでも・・・」
苦笑を漏らすクスフリ。
そんなクスフリを見て、計斗は赤ん坊が飲んでいる哺乳瓶を指差した。
そこには、妙に厳つい紋章のようなものが付いている。
「これ、この国の紋章じゃないのか？　城にくっついてたが」
計斗がこの城の門を潜るときに見た紋章と、哺乳瓶にくっついていた紋章が同じものだったのだ。
「・・・国の紋章って言うか。王族の紋章っす」
硬直するクスフリ。
それを聞いて、計斗は納得したように頷いた。
「じゃあ、そう言う事だろう」
「王子様・・・！！」
クスフリの悲痛な声が、部屋の中に静かに響き渡った。

十話

「まてまてまて・・・そうだ、哺乳瓶だけだったら違うかもしれないぞ俺・・・！」
頭を抱えてぶつぶつ独り言を呟くクスフリ。
「お、オムツにもはいっとるぞ。紋章」
「あい」
そんな彼の悩みを知ってかしらずか、計斗は王子と思われる赤ん坊の服をひん剥いていた。
「何確認してんすかぁー？！」
「いや、他にも何か身元を確認できるものが無いかとおもってな」
ソファーの上に寝かせた赤ん坊の服を器用に脱がし、身体やらオムツやらを調べる計斗。
「赤ん坊の扱いなれてるんすね」
「近所にたくさん居てな。　風呂に入れたり飯を食わせたりもしたものだ」
「・・・みえねっすね」
「やかましい」
ひとしきり調べてものの、オムツの紋章以外めぼしいものは無い。とはいえ、オムツなんぞにそんなものをつけるような赤ん坊は一人しか居ないだろう。
「どう考えても王子だろう。クスフリの話が正しいなら。王族の紋章見間違えんだろうし。九割がたそうだろうな」
「・・・そうっすかね・・・」
目の前で寝転がっている赤ん坊に2人の視線が集まる。
服を剥かれた赤ん坊は、計斗の顔をじーっとみると、なにやら催促するようにぽむぽむとソファーを叩いた。
「ん？　ああ、服を着せろと言うのか。すまんすまん」
「あい」

どうやら赤ん坊はきちんとお返事が出来よい子らしい。
計斗が手際よく服を着せている間も、実におとなしくしている。
「と言うか主君の顔も知らんのか」
計斗にジと目で見られ、クスフリは顔をしかめる。
「自分、一兵卒っすよ。幼い王子なんて超重要人物じゃないっすか。お目にかかることなんてないっす」
「あー。それもそうか」
服を着せ終わり、ぽんと赤ん坊のおなかを叩く計斗。
それを確認するのを待っていたかのように、赤ん坊は寝返りをうつ。もぞもぞと両手両足を動かすとはいはいの体勢になり、近くにおいてある哺乳瓶まで移動を開始した。
「・・・ほんとにかしこいっすね」
ふと、クスフリの中にあるアイディアが浮かんだ。
一瞬ためらったものの、とりあえず試してみることにする。
「あの、王子様っすか？」
「あい」
恐る恐るなクスフリの質問に、赤ん坊は間髪居れずに返事をする。
あまりの即答っぷりに凍りつくクスフリ。
「そうらしいぞ？」
「いやいやいや。偶然かもしれないじゃないっすか」
どうやら信じたくないらしい。
フルフルと頭を振ると、再び赤ん坊に向き直る。
「王子様じゃないっすよね？」
「ぶー」
どうやら否定の意味らしい。
やはり凍りつくクスフリをよそに、赤ん坊は哺乳瓶を背中に収納し始める。
どうやらそこが定位置らしい。
「否定されとるぞ」
「・・・いやいや、意味が分かってるかわかんないじゃないっすか

！」
「ぶー」
何とか否定したいクスフリに、やはり否定の意味らしい音で対応する赤ん坊。
頭を抱えてソファーの背にもたれかかるクスフリ。
「あってってー」
そんなクスフリの身体を、元気を出せとでも言うように赤ん坊はぺしぺし叩く。
楽しそうにその様子を見ていた計斗だったが、部屋に近づいてくる足音に反応して顔をドアの方に向ける。
大理石のようなつるつるの廊下は、音を伝えやすい。
足音がすること自体は不思議ではないが、計斗が反応したのはその音の主に関することだった。
「足音が軽い。女だな」
「何でそんなこと分かるんすか」
若干呆れの表情で顔を上げるクスフリ。
人が来るのは察していたようで、ソファーに着席する。
赤ん坊も行儀良く、計斗の隣に座っていた。
こんこん、とドアを叩く音が響き、ゆっくりと開かれた。
入ってきたのは、メガネをかけたおさげ髪の少女だった。
シンプルで質素なワンピースに、同じく簡素な作りの上着を羽織っている。
ほのぼのとしたおっとりとした笑顔を浮かべた顔は、見るものに不思議な安心感を与える。
夏休みに田舎に帰ったときに会える、優しい親戚のお姉さんと言った感じだろうか。
恐らく同い年ぐらいと思われる計斗とはまったく違う人種だ。
「失礼します。　お客様に、お茶をお持ちしました」
にっこりと微笑む少女に、計斗は緊張をといた。
場合によっては殴りかかろうと思っていたのだが、その心配は要ら

ないらしい。
少女の顔を見た瞬間クスフリが凍り付いていたが、なんだかめんどくさかったので計斗は突っ込むのをやめた。
「そうか。それは申し訳ない」
「いえ。遅くなってしまって申し訳ありません」
少女はテーブルの前に座ると、計斗の前にティーカップのようなものを置く。
中に入った湯気の立った液体は、色合い的には紅茶に近いだろうか。
漂ってくる香ばしい匂いに表情をほころばせる計斗。
「ねーちゃ」
ふと、隣の赤ん坊が、少女に向かって声を発する。
位置的に計斗の隣の赤ん坊は、ドアからは死角に成っていた。
少女はその声でようやく赤ん坊に気が付いたのか、驚いたようにそちらに顔を向ける。
「ねーちゃ」
少女に手を伸ばす赤ん坊。
その姿に、少女は驚いたように目を丸くする。
「りゅーちゃん！　どうしたの？」
「あい　たーよ、なー」
何事か返事をするように声を出す赤ん坊。
少女はそんな赤ん坊を抱き上げると、困ったように微笑む。
「まあ、お客様に遊んで頂いていたんですか？　すみません」
赤ん坊は少女に抱かれると、そこはかとなく満足げに「あい」と声を出した。
満足そうに見えるのだが、赤ん坊の顔は終始変わらないむっつり顔だった。
不機嫌なのかと思っていた計斗だったが、どうやらそういうわけではないらしい。
かまぼこをひっくり返したような目が一切変化しない、変わったタイプの赤ん坊らしい。

「いや。今しがた壁に張り付いているのを発見してな」
「え?！　りゅーちゃん！　またそんな危ないことしてたの？　めっ！」
「ぶー」
可愛らしく眉をよせて怒る少女。
それが不満なのか、赤ん坊も同じように眉を寄せてみせる。
その様子が微笑ましく、計斗の表情が緩む。
そして、ある疑問が浮かんだ。
「ねーちゃ？　その子は貴女の弟なのか？」
「はい。そうですけど」
にっこりと笑って答える少女。
確かに少女にくっついている赤ん坊は、「ねーちゃ、ねーちゃ」と言っている。
ここで始めて、計斗はクスフリに顔を向けた。
クスフリは青ざめた顔で、がちがちになった体を動かし首を縦に振る。
「我が国の第一王子、リューヴェンス様と、第一王女、エリメラ様です・・・」
「・・・ほー」
素朴と言うか、むしろ地味目な少女に抱かれる、壁に張り付いていた妙な赤ん坊。
この組み合わせをじっくりと眺めながら、なんとも言えない声を上げる計斗だった。

十一話

「いーや、なーんかうちのお姫思い込みが激しくってさぁー！　お客が居るから顔出せっつったら、お茶出せってことだと思ったらしくってねー！」
豪快に笑いながら、ピザのような食べ物を豪快に齧る少年。
見た目こそ小中学生位に見えるが、これで立派に成人だと言う。
外見年齢が人間の子供程度で成長が止まる種族なのだそうだ。
名をクラリッツ・ブラッヘムという彼の階級は一等千人長。
王城の管理を任されているらしい彼が大量の食料を持って現れたのは、計斗がなんとも言えない感じの声を吐き出した直後だった。
勢い良く扉を開け、後ろに控えた十数人のメイドさん達が運び込んだ料理をがっつきながら話し始めたのが、少し前のことだ。
突然現れた上官に緊張して直立不動になっているクスフリを無視し、計斗も料理に手をつけながら話を聞いていた。
「なんというか。随分と難儀そうなお姫様だな」
パンのようなものをもそもそと食べながら、クリーム色のスープに手をつける計斗。
見たままパンの味のするそれと、コーンスープの味がするこの二つが気に入ったらしい。
「なのよねー。なんつーか、オーラがないっつーか、オーラが！」
王族の目の前で散々な言い様だが、当のエリメラ王女が特に気にした風も無くきょとんとした顔で座っているので、特に問題ないらしい。
「メイドの人と並んでも違和感なさそうだな」
「そーなんだよ！　こないだなんて新人の娘がお姫のこと知らないで更衣室に連れてっちゃってさ！　お姫も抵抗しないから丸々三日ぐらいメイドとして働いてやんの！！」
「おー。それはすごいな」

大爆笑するクラリッツに、感心する計斗。
エリメラ王女はにっこり笑顔で「お仕事してると、とっても落ち着くんですよ」
などと言っている。
「それって大事なんじゃ・・・」
細かく震えながら呟くクスフリなんてお構い無しだ。
「まーまー、とりあえず遠慮なく食って食って！　なんか召喚とかされると腹へりそうだし！　異世界から来て口に合うかわっかんねけどさ！」
「ん。旨いぞ？」
「そーかそーか！　そりゃーよかった！」
黙々と料理に手をつける計斗を見て、満足げに豪快に笑うクラリッツ。
召還と言うものにどういうイメージを持っているのだろうか。
「でも、クラリッツさん。ゴハンよりも、今後の身の振り方を考えて差し上げるのが先なんじゃないでしょうか・・・。　突然この世界に来て、不安でしょうし・・・」
クラリッツもエリメラ王女も、粗方の話は聞いているらしい。
恐る恐ると言った様子で言うエリメラ王女の言葉に、クラリッツも深く頷く。
「確かにそれも一理あるっけどもさ。　やっぱ腹減ってると人間ろくなこと考えないもんよ！　飯食って腹いっぱいになってる方がポジティブに成るんだって人間って生き物はー！」
何故かキメ顔で言うクラリッツ。
顔がそこそこ美形なので様になるが、言葉遣いがガサツなせいかまったく様になっていない。
それでも勢いに押されたのか、「は、はい・・・」とエリメラ王女は口ごもってしまった。
王女として押しに弱いってどうなんだろうと思った計斗だったが、面白いので良い事にした。

「腹が減っては戦は出来ぬと言うしな。飯は大切だ」
頷く計斗に、クラリッツはうれしそうに相槌を打つ。
「いーいこというねぇーお客人！　そーそー！　働くにも何するにも、腹が減ってりゃ何にもできねぇーってなー！」
計斗の肩をバシバシ叩きまくるクラリッツ。
当の計斗はまったく気にした様子もなく食べ物を口に運んでいるが、それを見てなぜかエリメラ王女があわあわしていた。
「んでだ！　とりあえず寝泊りする場所なんだけどよ！　城んなかテキトーに使ってもらおうかと思ってなぁー！　取り合えず客間用意させてあんから！」
「其れは有難い。　突然押しかけてご迷惑をかける」
サラダを頬張りながら言う計斗。
クラリッツは手と首を振りながら、豪快に笑ってみせる。
「いんやー！　どっちかっつーとこっちが人攫いみたいな真似したわけだしよぉー！　訴えられてもしかたねぇーっての！」
「人攫い。　誘拐。に、なるのか？」
「見たいなもんじゃねーのぉー？　そーなんとアレか！　国家規模の誘拐だ！　あっはっはっは！！」
何か壷にはまったらしい。
机をバシバシ叩きながら爆笑するクラリッツ。
国家規模と言う言葉に、エリメラ王女の表情が凍りついた。
「こっか・・・ということは、私やお父様も罪に問われるのでしょうか・・・？」
「ぬあ？」
「ん？」
青ざめた顔でガクガク震えるエリメラ王女に、計斗とクラリッツは不思議そうに首をかしげた。
「誘拐を、指示したとか・・・なんかそういう・・・」
本気で心配しているらしい。
膝におとなしく座っているリューヴェンス王子を抱きしめている様

は、誘拐犯と言うよりさらわれた町娘だ。
「いや。んー・・・」
なんといったものか計斗が考えている間にも、エリメラ王女の顔色はミルミル青くなっていく。
「ご、ごめんなさい、ごめんなさい・・・！　そんなつもり無かったんです・・・！　召喚獣を呼び出すのがんばって下さいって応援したけど、そんなつもりじゃなかったんです・・・！」
子犬のように震えながら目に涙を溜めるその姿は、完全に被害者側なビジュアルだ。
それを見てたじろぐ計斗。
２人の姿をはたから見たら、完全に計斗が悪役だ。
ちなみにエリメラ王女に抱きしめられているリューヴェンス王子は、何事も無いかのように哺乳瓶を吸っている。
「まあ、取り合えず落ち着け。私は別にさらわれたとは思っていない」
苦笑交じりにいいながら、計斗はエリメラ王女の肩へ手を伸ばした。
その伸ばされた手を見たエリメラ王女は、まるで奴隷商人に売られていく少女のように怯えた表情を浮かべる。
「ひぃぃぃ！！　ご、ごめんなさいぃぃぃ！！」
何事も無いように哺乳瓶を吸うリューヴェンス王子を庇う様に実を縮めるエリメラ王女。
彼女の悲鳴が部屋に響いた、その瞬間だった。
計斗は手元に感じた鋭い冷たさに、ソファーを飛び退いた。
距離にして、２〜３ｍを軽々と飛び壁に背を密着させた計斗の目に飛び込んできたのは、さっきまで自分がいた位置に突きつけられた剣と。
それを握るまったくの無表情な青年の姿だった。
黒髪に、黒い瞳。
むすっとしている訳でもなく、ぼうっとしている訳でもない。
ただ、喜怒哀楽がごっそり抜け落ちたような表情の青年だ。

彼が手にしている剣は、エリメラ王女と計斗の間に割って入るように差し出されている。
恐らく、エリメラ王女の尋常でない怯えっぷりに反応しての間に入ったのだろう。
だが、計斗の身体は、頭が冷静な判断を降す前に動いていた。
「しっ！！」
短い気合の声とともに壁を蹴り、ばね仕掛けのおもちゃのような加速で青年に拳を繰り出す。
咄嗟に手に持った剣を振るう青年だったが、上半身を狙ったそれを計斗はいとも容易く交わして見せた。
自分の拳が青年の鳩尾に突き刺さるのを確信した計斗。
しかし、拳に走った鋭い痛みに、思わず顔をしかめる羽目になった。
青年の手に装着された盾が、計斗の拳と鳩尾の間に滑り込んでいたのだ。
金属製であろうそれをまともに殴りつけたわけだから、痛くないわけが無い。
それでも怯まず、計斗は拳で盾を押し込みながら、青年に身体を密着させた。
剣を持つ腕の動きを制限して、攻撃をさせ難くするためだ。
「なっ、なんだっ？！」
あまりのことに目を白黒させるクスフリをよそに、それまで驚きに固まっていたクラリッツは計斗と青年の様子に手を叩いて大笑いしだした。
「あっはっはっは！！　安心しろガーランド！　その人は敵じゃねぇーっての！」
どうやらガーランドと言うのが計斗とにらみ合っている青年の名前らしい。
クラリッツの言葉は聞こえているのだろうが、それでもガーランドは手の力を緩めない。
「彼は？」

視線を動かさず質問する計斗。
「おー！　ガーランドっつってな！　うちのお姫の護衛兵だ！　ちっと大袈裟なんだよ！」
大袈裟とかそういうレベルではない気がしないでもない。
目の前で起こった出来事に固まっていたエリメラ王女だったが、ようやく我に返り、慌てたようにガーランドの服の裾を掴んだ。
「だ、だいじょうぶだよがーちゃん！　ちょっとびっくりしただけだから！」
エリメラ王女の声を聞き、ガーランドはようやく顔を動かした。
王女の顔を確認すると、剣を持つ手と盾に込めていた力を緩める。
それにあわせて、計斗も拳と身体を引いた。
ガーランドは王女の安否を確認するようにその姿を見ながら剣を鞘に収めると、計斗に軽く頭を下げる。
そして、何事も無かったかのように部屋の外に出て、ドアを閉めた。
「な、な、なんなんすか・・・今の・・・！」
冷や汗を流しながら呟くクスフリ。
あまりの衝撃にドン引きしているクスフリをよそに、計斗は落ち着きを取り戻したらしいエリメラ王女を見て満足げにソファーに腰を下ろしていた。
「さっきも言ったように、お姫の専属護衛官だなー！　野朗、お姫が危険だと思ったら見境無しだからよぉー！　いや、悪かったなお客人！　でもあいつもちっと首筋に剣押し当てようとしたぐれぇーでよぉー！　別にたたっきろーって了見じゃねかったとおもうんだわ！」
それもそれで随分だが、計斗は気にした風も無く頷く。
「なに。王女に護衛は不可欠だろう。　私も殴りつけたわけだしな」
魔法の無い科学な世界の一般人として、剣を向けられて拳で対応するのはどうなのだろうか。
落ち着いた計斗の様子を見て、エリメラ王女は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい・・・私がびっくりしたから、がーちゃんが・・・！」
「気にしなくて良い。召喚されたこともさっきのことも、別にどうとも思っていない。むしろ面白いと思っているぐらいだからな」
微笑む計斗を見て、エリメラ王女はほっと胸をなでおろした。
「でも、やっぱり私たちに非があるわけですし・・・何かお詫びを・・・そうだ！」
エリメラ王女は良いことを思いついたというようにぱんっと手を叩いた。
にっこりと笑顔を作って、計斗の手を取る。
「どうか私の部屋にお泊りになってください！　客間よりも広いですし、きっと居心地もいいはずです！」
「ん？　いや、幾らなんでもそういう訳にはいかんだろう？」
眉を寄せる計斗。
だが、話を聞いていたクラリッツはそれだ！　とでも言わんばかりに親指を立てていた。
「おお、それだ！　あそこなら広いしちょうどいいーじゃねぇーの！　そうしようそうしよう！」
「まあ、私は別にどこでもかまわんのだが」
困惑気味の計斗に対し、エリメラ王女とクラリッツは乗り気だ。
「よかったね、りゅーちゃん！　お客様、許してくれるって！」
「たーにゃ」
にこにこと話しかけるエリメラ王女に、分かっているのか分かっていないのかコクリと頷いて見せるリューヴェンス王子。
「いや。だから許すも許さんも・・・まあいいか」
苦笑交じりに呟く計斗。
ふと、クスフリのほうに顔を向け、何かを考えるように眉をしかめた。
その様子に気が付き、直立不動の体勢を取っていたクスフリは嫌な予感に額に冷や汗を流す。

暫くクスフリを見ていた計斗は、今度はクラリッツのほうに顔を向けた。
「クラリッツ殿。　すまんが暫くクスフリを貸してくれないだろうか」
「あ？　くっすぃー？　いいよ？」
軽く返事するクラリッツ。
「く、くっすぃーって自分のことですか？！」
あまりに軽く扱われる自分の立場に驚愕しつつも、ようやく「くっすぃー」のなぞが解けたクスフリだった。

十一話（後書き）

次回・くっすぃーと計斗のぶらり城下町の旅

そこらにいるチンピラと喧嘩する流れになるかしら

十二話

要するに計斗としては、異世界に居る間色々と世話をしてくれる人がほしかったわけだ。
クスフリならなんとなく色々いいやすそうだし、こき使える気がする。
とは、口には出さないまでもそう思う計斗だった。
「なんで俺が計斗さんのお世話を・・・他にももっとこう、適任の人材が居るきがするんすけど」
「しょっぱなの印象的に色々わがままに付き合わせやすそうだったからな」
「なんすかそれ?!」
思いっきり口で言ってしまった。
基本的に思っていることを包み隠さないタイプな計斗だった。
取り合えず、王様が王城に戻ってくるまでの数日間、計斗は王女の部屋で寝泊りすることになった。
飯もなんやかんやでクラリッツが用意してくれることになり、当面の生活は何とかなることになった、の、だが。
一般的な女性よりも身長が高い計斗に合う服が、王城内には無かった。
早速服屋を呼び寄せようとしたクラリッツだったが、たらふく食った後の腹ごなしにと、計斗が直接城下町に行くことになったのだった。
元の世界では夜中だったが、この世界では現在お昼ちょっとすぎ。
散歩にももってこいの日和だ。
クスフリに案内してもらう、と言うより、クスフリをお供につけて、計斗は早速城の正面門を潜った。
クラリッツから渡された手形のような印籠のような札を見せると、門兵達は敬礼で二人を送り出してくれた。

「服かー。　俺女性の服とか良くわかんないんすけど。取り合えず街中に案内したらいいっすかね？」
「いや。　服はどうでも良い」
「へ？」
前を歩く計斗の言葉に、きょとんとするクスフリ。
「いや、だって服買いに行くって・・・」
「さっき王女の護衛兵と拳を交えただろう」
「はあ」
「アレで火がついた。　町場に出れば喧嘩相手もいるだろう」
「ちょっ」
けっこう恐ろしいことをさらりと言う計斗に、クスフリの顔からサーっと血の気が引く。
「何考えてるんすかー！　ケイトさんは国賓扱い何すよ？！　もし怪我でもあったら・・・！」
慌てて計斗の肩に手をかけ、立ち止まらせるクスフリ。
計斗はまったく動揺した様子もなく振り返る。
そして、クスフリの後ろの方に目を向けて、指を刺した。
「おい、あそこにリューヴェンス王子がおるぞ」
「まった、何いってんすか・・・」
呆れたような表情で計斗が指したほうを振り返るクスフリ。
その目に飛び込んできたのは。
城壁の上で座り込み、何事も無いかのように哺乳瓶を吸うリューヴェンス王子の姿だった。
「・・・」
自分の目を疑うように、何度か目を擦ってから、もう一度見上げてみるクスフリ。
やはりリューヴェンス王子だ。
「な、ななな・・・」
細かく震えているクスフリをよそに、計斗はいたって落ち着いた様子だ。

手を軽くあげると、「や」と、リューヴェンス王子に向かって声をかける。
王子もそれに気が付いたのか、手を上に伸ばすと「あい」と返事を返した。
「さ、行くぞ」
その問答に満足したのだろう。
計斗はくるりときびすを返すと、すたすたと歩き出す。
一方のクスフリは大混乱だ。
「ちょ、なに行こうとしてるんすかケイトさん！」
「あの王子ならほっといても平気だろう」
「んなわけないじゃないっすか？！　門兵の人に知らせないと！」
「おお、行って来い。私は先にいっとるぞ」
「ちょ、ま、あぁぁぁぁ！！！」
結局、城門から少し離れた位置だったその場に計斗を立たせ、クスフリは必死の思いで走る羽目になった。
王子からも目を離せないが、人を呼びに行かないとどうにも成らない。
そんな状態での苦肉の策だ。
が。
暫くたってから慌てて走ってきた門兵とクスフリの目に映ったのは、既にかなり遠くまで歩いていっている、背中に王子を貼り付けた計斗の姿だった。

十二話（後書き）

予定って未定なんだなってつくづく思った。
次回こそ喧嘩シーンが書きたいな。

十三話

「なにかんがえてるんすかぁぁぁ！！」
「いや、別に何にも」
後ろで怒鳴っているクスフリも軽くあしらい、街の中をすたすたと歩いていく計斗。
そんな計斗を追いかけながら、クスフリは身振り手振りを加えて怒りを表そうとしていた。
「何で王子見ててくださいって言ったのにいっしょにどっかいこうとしてるんすか？！」
「見てただろうが」
「意味がちがうっすよ！」
クスフリの悲痛な叫びも、計斗にはどこ吹く風だ。
結局、何とか計斗に追いついた門兵とクスフリは、王子を無事王城に届けることに成功した。
特に抵抗も見せず計斗の背中から引き剥がされた王子だったが、計斗曰く自分からくっついてきたとのことだった。
そんなわけ無いだろうと呆れ顔をしていたクスフリと兵士達。
だが、その考えはつれて帰ろうと王子を草竜の背に乗せたところで消え去った。
兵士の手が離れた瞬間、まるで昆虫のような高速のハイハイで草竜の背を駆け下りると、今度は計斗の後ろに回りこみ凄まじい勢いでよじ登り始めたのだ。
その間、ほんの数瞬。
あっという間に背中に収まったリューヴェンス王子を横目で見やり、計斗はクスフリと兵士達にドヤ顔を向ける。
結局、誰かに抱かれていると大人しくしているという変な習性を活かし、抱きかかえられたまま連行されることになった王子だった。
そんなこんなあって、計斗とクスフリはなんとか城下町にたどり着

いた。
計斗が思っていた数倍街並みは立派なものだった。
石造りの家々に、しっかりと固められた広い道路。
露天や店の並ぶ光景は、所謂中世よりも技術的には優れているのだろうか。
もっとも、計斗は建築などに明るく無く、良くわからないわけだが。
「産業革命前・・・と言った所か？」
一人呟く計斗。
「きいてるんすか？！」
「全然」
「あぁぁぁもぉぉぉ！！」
クスフリの悲鳴も気にせず、計斗はすたすたと街中を歩いていく。
「人通りが多い町だな」
「そりゃ、この国の首都っすから」
「人だけ通るにしては道も広いな・・・さっきの草竜とかが通るのか？」
「今日は露天が出る市の日っすから入ってこないっすけど、馬車とかも行きかうっすからね。ほら、あそこ」
クスフリが指差した路地の方に目を向けると、馬止めの前に止まった馬車あった。
露天に並べる品物などを下ろしている様だ。
「・・・馬だ」
意外そうに呟く計斗。
異世界のお約束だろうか。馬はやっぱり馬だった。
「馬は草食だよな・・・？」
真顔で聞いてくる計斗に、クスフリは一瞬怪訝な顔をするも、すぐに頷いて見せた。
「ええ。飼葉とか食う草食っすよ。　計斗さんの世界にも馬いるんすか？」
「ああ。おんなじ形状でな」

「そう言う事ってあるんすねー」
「人間が人間のカタチしとるしな」
「なるほど」
腕を組み感心したように唸るクスフリ。
ふと、計斗の足が止まった。
「ん？　どうしたんすか？」
「すまん、少しその辺で待っていてくれ」
「何でっすか？」
不思議そうに首を捻るクスフリに、計斗は静かに告げる。
「下着を選ぼうと思ってな」
「いってらっしゃい」
即答だった。
計斗はクスフリから財布を受け取ると、すたすたと歩き出した。
計斗の背中を見送り、クスフリは仕方なく近くにあった露天の椅子に腰掛ける。
恐らくこれがあったから計斗はこの場で待つようにと言ったのだろう。
店員を探そうと視界をめぐらすクスフリ。
「お。くっすぃーじゃ。くっすぃー」
突然背中からかけられた声に反応して振り向くと、見知った顔が目に入った。
「ああ。ガルド殿にラロ殿」
「うむ」
「こんにちはー」
かるーい感じに手を上げるガルド老人と、丁寧にお辞儀するラロ。
2人とも手に手に料理の乗った皿を持っている。
「態々こんなところで食事ですか？　城内でいくらでも用意があるのに」
「いやの。久々にカロルコに会ったから一杯飲もうと思ったんじゃよ。　どうせケイトちゃんは暫くクラリッツと話があるじゃろと思

ったし。別に城に居らんでもいいじゃろと思ってのぉ」
「ああ。だからあの場所に居なかったんですか。　でも召喚したのガルド殿じゃないですか・・・話ぐらい聞いておいたほうが良かったんじゃ・・・」
ジと目で見られ、ガルド老人は笑いながら頭をかいた。
「暮らし向きの安定や身分関係は門外漢じゃからのぉー」
確かに、魔法技術を研究するのが仕事のガルド老人には出来ないことだろう。
「わしはわしの方で出来る事をしようと思っての。　これから作戦会議じゃよ」
「なるほど。　そうでしたか・・・」
一兵卒であるクスフリには良くわからなかったが、突然現れた少女一人を保護すると言うのは、そう簡単なことではないのだろう。
考えてみれば身寄りも知り合いも居ないのだ。
ガルド老人の言うように、自分の専門のことでサポートをと考えるのが正しいのかもしれない。
感心して頷くクスフリ。
「ん？　カロルコって、ザルドフェルド中将ですか？！」
「そうじゃよ」
驚愕するクスフリに軽く返事をすると、ガルドは彼の着いているテーブルに料理の皿を乗せ始める。
ラロもそれを見て、慌てたように料理を置き始めた。
「そうじゃよって、来てるんですか中将閣下が？！」
「あ、くっすぃーだ。　やっほー」
「うわっ？！」
後ろからかけられた声に、がっと高速で振り返るクスフリ。
そこには、派手なシャツを来たチョい悪エルフが、飲み物の入ったコップを持ってたっていた。
「ザルドフェルド中将閣下！」
思わず姿勢をただし敬礼するクスフリ。

カロルコはその様子を見て声を出して笑う。
「まーまー、今は俺オフだから。　ほら、制服も着てないでしょ？」
そういって、自分の肩を指差すカロルコ。
確かに森であったときにかけていた士官服は無い。
「それに街中でそんなことしてたら皆びっくりしちゃうでしょ。
ほら、座って座って！」
「は、はっ！」
カロルコはがちがちに緊張するクスフリの肩を叩き、席に座らせる。
「いやぁー、偶然だねぇー！　ちょーどケイトちゃんの後見人とかのことはなそうと思ってたところでさぁー！」
「は、後見人、で、ありますかっ？」
「そうそう。何するにも後ろ盾になる人が居るでしょう？　そういう話をちょこっとしようかと思ってね。　くっすぃーは何しに来てたの？」
「はっ、自分はその、ケイトさんの直接のお世話をするように言われましてっ！　不慣れなことなどのサポートをっ！」
目を白黒させながら言うクスフリ。
聞いているほうのカロルコやガルド老人はまったく気にした様子もないが、ラロだけが心配そうにクスフリを見ている。
「おー。　なるほどのぉー。たしかにくっすぃーは巻き込まれ体質じゃしそういうの得意じゃろーなぁー」
クスフリは研究室の警護をすることも多く、ガルド老人とは意外と長い付き合いだった。
「そっかー。　あれ、じゃあもしかして今も？」
「はっ、ケイトさんが洋服を買うと言うことでしたのでっ　今はその、　し、　肌着を買うと言うことでっ」
若干頬を赤くしながら言うクスフリ。
「あー。そりゃつきあえんじゃろのぉー」
「男の悲しいところだねぇー」
ニヤニヤ笑いながら言うガルド老人とカロルコ。

この2人、妙に息が合っている。
「でも、ケイトちゃんあそこに居るよ？　なんか絡まれてるし」
「はっ　へ？」
カロルコの指差した方向に目を向けると、確かに計斗がいた。
しかもなにやら、三人組の男に囲まれている。
「ここら辺は兵士の巡回も少ないからの。　くっすぃーも今私服じゃしああいうのもわくんじゃろ」
ガルド老人の言うとおり、クスフリは今私服だった。
兵士の格好は警官の服装と似たようなものだ。
色々と動きにくいだろうということからの配慮だったが、裏目に出たようだ。
「すみません、行って来ます」
表情を変え立ち上がるクスフリ。
すぐさま走り出そうとする、が。
「まーまぁー、まちなって」
カロルコの手が、クスフリの肩を掴む。
「うわっとっとっ？」
その瞬間、走り出そうとしていたクスフリの脚が止まってしまった。
強く掴まれているわけではない。
むしろ、肩にかかっているのは普通に手を置いているのと変わらない程度のものだ。
動こうとする瞬間、ほんの少し力を加えてバランスを崩させる。
それによって、クスフリの動きを制御しているのだ。
まるで操り人形のようにふらふらと力なく椅子に座らされ、目を白黒させるクスフリ。
そうしている間にも、計斗に絡んでいる三人組の様子はどんどん悪くなっている。
ついにはその中の一人が、計斗の胸倉を掴んだ。
「計斗さ」
クスフリが思わず大声を上げそうになった、そのときだった。

ゴスリ
かなり離れた位置にいるはずのクスフリの耳にもはっきりと聞こえる鈍い音が響いた。
計斗の拳が、胸倉を掴んだ男の顔面に突き刺さったのだ。
鼻を潰されたのか、鼻血を吹きながら膝から崩れ落ちる男。
他の二人があっけに取られた顔をしているのが良くわかった。
「む、無茶苦茶だっ・・・！」
クスフリは自分の顔から血の気が引く音を聞いた気がした。
すぐに我に返った別の男が計斗に掴みかかるが、その手を軽く捻り上げられ跪かされる。
相当痛いらしく、悲鳴がクスフリたちのテーブルまで聞こえてきた。
勿論、それだけでは終わらない。
素早く背中に蹴りを入れると、男の腕が若干あらぬ方向に曲がって見えた。
「折った？！」
悲鳴に近い声を上げるクスフリ。
「いんや、ありゃ肩外しただけじゃろ」
「うまいなぁー」
そんなクスフリの横では、ガルド老人とカロルコが酒をあおって観戦を決め込んでいた。
かなりの騒ぎになり、周りの交通人が逃げたりしているがお構い無しだ。
ガルド老人とカロルコの言うとおり、男は肩を外されただけだった。
地面に転がり悲鳴をあげる男を捨て置き、残った一人に向き直る計斗。
完全に勢いに飲まれた男は、半ばやけに成って計斗に殴りかかる。
一発。
避けるか、受け止められるかと思われたその拳は、計斗の頬を叩いた。
二発、三発。

胸は腹部に拳が入る。
だが、計斗はまったく意に介した様子が無かった。
四発目。
クスフリの目には、計斗が何かを呟いたのが見えたが、聞き取ることは出来ない。
繰り出された男の拳は、身を乗り出した計斗の額にかち合う。
人体の中でも、額というのかはなり頑丈に出来ている部位だ。
それに比べて、拳は所詮細かな骨の集合体でしかない。
まともにぶつけ合えば、どちらのダメージが大きいかはそう難しい問題ではないだろう。
自分の拳を押さえ悲鳴を上げる羽目になった男を見やりながら、ゆっくりと身を起こす計斗。
ゆっくりとした動作で思い切り後ろに振りかぶった拳を、今度は計斗が男に向かって振るう。
ドンっ
生身の人間を殴ったとは思えない音が、あたりに響いた。
みぞおちに一発貰い、男は白目を剥いて崩れ落ちる。
「おー。　おみごとー！」
「いーぞー、ケイトちゃーん！」
やんややんやと拍手を送るガルド老人とカロルコ。
どうやら計斗も彼らに気が付いていたらしい。
腕組みをしていた手を解き、拳を軽く上に掲げて見せた。
あっけにとられているのは、クスフリとラロだ。
もっともラロは終始口をあんぐりあけて小刻みに震えていたわけだが。
「あ、あれいまの、ケイトさんが・・・！」
「やっぱケイトちゃんけんか強いんだねぇー。　最初会ったときにからそうだろうとは思ったけどさ」
楽しそうに言うカロルコ。
その言葉に、ガルド老人は深く頷く。

「目力がはんぱじゃないからのぉー。　くっすぃーを最初見たときなんぞ、獲物を見つけた肉食動物の目じゃったぞ」
「そりゃ、確かに実力はあるかもしれませんが・・・ガーランド殿と切り結んでましたし・・・」
「ガーランド？　姫の護衛官の？」
驚いたような顔をするカロルコに、クスフリは頷いてみせる。
「城でひと悶着ありまして。　ケイトさんにガーランド殿が剣を突きつけたんです。　ケイトさんはそれを避けて、突っ込んでいきながら殴りかかって。ガーランド殿はそれを剣で払おうとしたんですが、ケイトさんはそれを拳を振るいながら避けて、盾と拳でつばぜり合いの形に・・・」
「なんじゃ。みたかったのぉー。それ」
舌打ちするガルド老人。
カロルコのほうは、感心したように頷いている。
「へー。　ガーランドがねぇー。　そりゃ本物だなぁ・・・」
「はっ　そうだ、そんなことよりケイトさんをっ！」
ようやく本来の目的を思い出し、立ち上がるクスフリ。
見れば、三人組のうち鼻血を吹いた男が走って逃げていく。
一人は気絶したままで、残る一人は立ち上がろうとするたび計斗に蹴りを入れられ、地面に転ばされていた。
「あー。　ありゃ人質だな」
「ひ、人質？！」
酒をあおりながら呟くカロルコに言葉に、クスフリは激しく動揺する。
「多分もっと人数集めて来いとかそんな感じのこと言って一人逃がしたんでしょ」
「け、ケイトさぁぁぁん！！」
悲鳴にも似たクスフリの声が、逃げ惑う一般人と野次馬で混沌とした露天街に響いた。

十三話（後書き）

そろそろ名前表つくろうかしら

十四話

魚のフライに手を伸ばし、口の中に放り込む。
数度噛み締めると、うまみがじわりと口の中に広がった。
それをコップになみなみと注がれた琥珀色の酒で胃の中に流し込むと、カロルコは楽しげに笑う。
「こわいねぇー。　ありゃまだ遣り足りないって顔だよ」
「好戦的じゃのぉー。異世界の女の子は皆あんなんじゃろか」
焼かれた肉の塊に齧りつきながら呟くガルド老人。
カロルコはテーブルに頬杖をつきながら、ちらりとガルド老人に目を向ける。
「俺も長く生きてるけどそういう話は聞かないなぁー。　大体こっちに来る異世界人って、同じ世界の人間が多いみたいだしね？」
ガルド老人は意外そうに眉を上げる。
「ほぉー。　流石エルフは歳食っとるだけあって物知りじゃのぉー。
一体わしの何倍生きとるんじゃ」
「さーねぇー。　男はミステリアスな方がかっこいいでしょ？」
「言うとれ不良中年」
「あっはっはっは！」
「あ、あの・・・それよりもあの2人、どうしましょう・・・」
食事と酒を楽しむガルド老人とカロルコに、ラロは申し訳なさそうに言う。
あの2人。
絡んできたチンピラを蹴り回している計斗と、悲愴な面持ちで苦情を申し立てているクスフリのことだ。
「何考えてるんすか？！　したっ　いやその、買い物に行くって言ってたのに！」
「ああ、アレはウソだ」

「そんなあっさり?！」
「ちょうど良くたちの悪そうなのが見えたから喧嘩を売ろうと思ってな。　クスフリがいたら相手が逃げるかもしれんだろ」
「自分から喧嘩売ってどうするんすかぁぁぁ！！」
もはや悲鳴に近い声を上げるクスフリ。
そんな悲痛な叫びも、計斗には届かない。
転がっているチンピラに細かく蹴りを入れて行動不能状態を保ちながら、どこか遠い目で語りだす。
「ちょうど良い感じに歩いてきたからな。　私は肩をぶつけてこういってやったんだ。　貴様の目は腐っているのかこの屑野朗。と」
「ムチャクチャだぁ！　そりゃ怒りますよ?！」
「屋台の人やらに因縁をつけていたこいつらが悪い」
「男前な理由っすけどぉー！」
一応計斗なりに絡んだ理由が合ったらしい。
しかし、男三人に絡んで行ってぼこ殴りにする女子高生というのはどうなのだろう。
「大体自分だって殴られてたじゃないっすか！　怪我してるでしょう！」
「拳に芯が無い。　あんなものでは私はどうにも出来ん」
何故か自慢げに言う計斗に、もはや言葉も無くむなしく口を開閉するクスフリ。
そんなクスフリの後ろからやってきたのは、コップを持ったカロルコだった。
いかにも酔っ払いな笑い声を上げながら、クスフリにがっちりと腕をかける。
「うをぅ?！」
「よーう、もりあがってるねぇー」
コップに入った酒を掲げてみせるカロルコ。
突然現れた酔っ払い上官にクスフリがビビッているが、お構い無しだ。

コップを掲げて見せるカロルコに、計斗はコクリと頷く。
「人質までとってー。　やる気満々だねぇー？」
「人質とは心外な。　せめてまき餌と言ってもらいたい」
「同じじゃないっすか？！」
律儀に突っ込みを入れるクスフリだが、計斗はまったく意に介さない。
「あの鼻血が人を呼んでこなかったら次はこの転がっている奴を逃がす。　それでも駄目ならそこの気絶している奴をたたき起こして仲間のところに案内させる。数が多いと少し面倒だが、背に腹は変えられんからな」
「変えて良い背と腹っすよそこは！　ていうか早くこの人たち解放していきましょうよ！　でもって逃げましょう！　ここにいたらほんとに仲間とかつれてきますよ！」
兵士であるだけに腕には覚えのあるクスフリだが、多勢に無勢と言う言葉もある。
複数人で囲まれれば、何がどうなるか分からない。
なにより、国賓として丁重に扱えといわれている計斗が怪我をするかもしれない。
さっさとこの場から離れたいというのが本音だろう。
「あー、でも無理みたいよ？」
へらへらを笑いながら、カロルコは大通りのほうを指差した。
見れば、鼻血を出した男が先頭に立って、複数の男をこちらに案内している。
クスフリの顔がびくりと引きつった。
「ヤバイじゃないっすかっ！」
それとは対照的に、計斗は楽しげに目を細める。
計斗の表情を見てカロルコは口の端を吊り上げると、クスフリの首から腕を放しす。
クスフリの肩を叩き、コップの中身を一気に飲み干した。
「じゃ、他の兵隊呼んで来てよ」

「はっ！　兵隊ですかっ？」
「そっそ。　俺が少し話して時間稼ぐからさ」
クスフリにとって上官の命令は恐ろしく重い。
具体的に言うと富士山とためを張れるぐらいだ。
元より、逆らうという選択肢は存在しない。
何より、カロルコが話を付けるというのは大きい。
実際に戦場をともにした事があるわけでは無いが、クスフリもカロルコの噂は嫌というほど聞いていた。
文字通り戦場を焼け野原に変える騎士。
“炎帝”カロルコ・ザルドフェルド。
カロルコがいてくれるのであれば、自分は人を呼びに行った方が良い。
そう考えたクスフリのその後の行動は早かった。
「分かりました、すぐに戻ります！」
言うが早いか、クスフリは敬礼を残し走りだす。
「おー。相当鍛えてるねぇー」
その後姿を見ながら、カロルコは声を出して笑う。
クスフリを見送り、ゆっくりと振り向く。
なんと切り出したらいいのかと頭をかくカロルコに、先に声をかけたのは計斗だった。
「本当に異世界なのだな」
「ん？」
計斗の口から出た言葉に、カロルコは首をかしげる。
「いや。市場に来れば物が見れると思ってな。　食用の植物も動物も、道具も何も。見たことの無いものが多い。　存在しない物が多いといった方が正確なんだろうな。　思ったよりもこれは難儀そうだ」
肩をすくめる計斗。
だが、と続けながら、計斗は楽しげな笑顔を見せた。
「面白そうで何よりだ」

その顔を見て、カロルコは思わず噴出して笑ってしまう。
ひとしきり笑うと、空になったコップを気絶した男に向かってぽいっと投げ捨てた。
「そっか。　じゃあ、何よりだね」
そういうと、ガルド老人達の方に向かって歩き始める。
計斗に背中を見せたまま、手を振る。
「じゃー、くっすぃーが来るまであんまし時間ないと思うけどさ。
がーんばってねぇー。　おうえんしてるよー」
どうやらカロルコもクスフリにうそをついたらしい。
計斗は軽く肩をすくめると、思わず笑い声を漏らした。
「ああ。そうさせてもらう」
自分に向かって怒鳴り声を上げて駆け寄ってくる男達を見ながら、
計斗は軽く首を鳴らした。

十五話

クスフリが兵士達を連れてきたとき、その場所はたくさんの人だかりで囲まれていた。
異様に盛り上がった野次馬達は、口々に「やっちまえ！」だの「いいぞねーちゃん！」などと叫んでいる。
クスフリの脳裏に、恐ろしく嫌な予感が過ぎった。
兎に角来てくれとクスフリにせかされて出動してきた兵士達は、困惑した様子で立ち尽くしていた。
いくらにぎわう市の日とは言え、一箇所にこんなに人だかりが出来ることは珍しいからだ。
「な、何が起きてるんだ・・・？」
クスフリに問うのは、兵士達の隊長らしい人物だ。
「・・・恐らく最悪の事態が起きていると思います」
苦虫を噛み潰したような顔で答えながら、クスフリはあたりに視線をめぐらす。
目的のものは案外早く見つかった。
屋台の出しているテーブルに着いた三人の男。
くりくりでふわふわな少年と、真っ白い髭のじいさんに、不良中年エルフだ。
「いーぞぉー！　もっとやれぇー！　ぶっつぶしてやるんじゃぁー！」
「よっ！　ケイトちゃん！　つよい！　しびれるあこがれるぅー！」
「け、けんかはとめないといけないんですよぉ？」
何かを観戦しているような声を上げながら、人だかりの方を向いて酒をあおっている大人2人とおびえてる子供一人。
頭で考えるよりも早く、クスフリの足は動いていた。
一気に駆け寄り、テーブルに両手を振り下ろす。
「なにかんがえてるんすかぁー！」

「お、くっすぃーだ。おかえりー」
「はやかったのぉー」
クスフリの突然の行動に驚いたのは、ラロだけだった。
「おかえりじゃないっすよ！　これってケイトさんがなんかやってるから出来てるさわぎっすよね？！」
「うん、そーよ」
あっさりと答えるカロルコ。
完全に酔っ払っているらしいガルドは、酒を飲むのと計斗を応援するので忙しいようだ。
「時間稼ぐって行ったじゃないっすかぁ！！」
「ああ、うん、あれ嘘」
「そんなあっさり？！　ってこれ前にもやったっすよ！　どういうことっすかこれ？！」
あまりのことに口調が素に戻っていることに気が付いているのかいないのか。
噛み付くように詰め寄ってくるクスフリにも、カロルコはへらへらとした表情を崩さない。
「まーまー、落ち着きなって。　あれ見てみなよ、あれ」
カロルコが指差したのは、人だかりの方向。
つまり、計斗がいるだろうところだ。
不満そうな表情をしながらも、クスフリは視線をそちらに向ける。
目に飛び込んできたのは、チンピラたちが計斗を囲んでいると言う壮絶なシーンだった。
テーブルがあるせいで人が立てない場所があるようで、この位置からだと計斗たちの様子か人に邪魔されずに良く見えるようだ。
等間隔で計斗を取り囲んだチンピラたちは、怯えている様な凄んでいる様な、微妙な表情のまま殆ど動けずにいる。
一方の計斗は、多少眉間に皺を寄せながらも至って堂々と仁王立ちしていた。
計斗を囲むチンピラの一人が、痺れを切らしたように叫び襲い掛か

っていく。
身体を掴もうとしているのだろう。
体勢を低くしたまま突っ込むチンピラを一瞥し、計斗は無造作にも見える動作で下から上に腕を振るった。
僅かに体を横に倒しただけの体勢から繰り出された其れは、ものの見事にチンピラの顎先を捕らえている。
恐らくチンピラの意識は、一瞬ブラックアウトしただろう。
顎を跳ね上げられ体勢を崩された身体は、殴られた勢いそのまま後ろに数歩たたらを踏み倒れこむ。
脳震盪でも起こしたのだろう。
ばったりと倒れたまま、チンピラは身体をぴくぴくと痙攣させている。
「なんだあれ・・・妙にナチュラルに打ってたけど、当たった時点で意識飛んでるじゃないっすか・・・」
愕然とするクスフリの様子を見て、カロルコは目を細めて酒をあおった。
「相当喧嘩馴れしてるよねぇー。　うん。強いよ、彼女」
そういっている間にも、また一人チンピラが倒されていく。
今度は、計斗を囲んでいる距離から、不用意に近づきすぎたものが餌食となった。
ほんの一歩、踏み出したその瞬間。
狙い澄ましたかのように突然跳躍した計斗の拳が、チンピラの顔面に突き刺さる。
チンピラは悲鳴を上げる暇も無く崩れ落ち、計斗は拳が当たったのとほぼ同時に飛び退き、元の位置に戻っていた。
動いたものから潰す。
これ以上の無言の威圧も無いだろう。
実際、チンピラたちはうかつに近づくことも、離れることも出来なくなっている。
その様子を間近に見て、あっけにとられるクスフリ。

最初に会ったときの威圧感。
王城でのガーランドとの一件。
けっしてか弱い少女ではないだろうとは思っていたが、これはどういうことだろう。
かなり腕の立つ戦士でも、この人数をまともに、しかも素手で相手することは難しいはずだ。
だが、計斗はどうだ。
いとも簡単に2人のチンピラを殴り倒してしまった。
良く見れば、地面にはその2人以外にも4人が転がっていた。
最初に絡んでいた三人とは、明らかに別人が4人だ。
最初の3人に、いまの2人。そして、既に転がっていた4人。
あわせて9人の人間を既に気絶させていることになる。
「これは・・・」
表情を引きつらせるクスフリ。
彼が連れてきた兵隊達の一人が、カロルコたちのテーブルに近づいてきた。
「失礼します。　ザルドフェルド中将閣下とお見受けします」
右拳を左肩に当てる礼をとる兵士に、カロルコは片手を上げて応える。
「そ。　皆呼んで来て貰ったのは俺なんだよね。　あそこにいる彼女がチンピラ片付けるからさ、終わったら人の整理と転がってるのの捕縛、よろしく頼めるかな？」
兵士は計斗の方に目を向けると、驚いたように目を丸くした。
あっけにとられた表情を見せたのも、数秒のこと。
兵士はすぐさま表情を引き締めると、再び敬礼をして他の兵士達のところに走っていった。
「で、くっすぃーはどうみる？」
走り去る兵士の背中に手を振りながら問うカロルコ。
計斗に釘付けになっているクスフリは、表情を徐々に険しくしていく。

「集団相手の戦い、素手での戦いに慣れているように見えます。
ですが、拳法や格闘技に長けていると言う感じはしません。　街の喧嘩自慢と言ってしまえばそれまでしょうが、それにしてはレベルが高すぎる。　あえて言うならその・・・」
なんとも言い辛い。
と言うよりも、認めたくないように言葉に詰まるクスフリ。
数瞬迷いながらも、搾り出すように吐き出す。
「獣、の、ような・・・」
「くっすぃーもそう思う？」
うれしそうに言いながら、カロルコは酒をあおる。
まるでそれが合図だったかのように、計斗を囲んだチンピラの一人が苛立った様に声を上げた。
周りの声が大きいせいもあってか、クスフリの耳には詳しくは聞こえない。
断片的に聞こえた声から察するに、一斉にかかる等と言った内容だろう。
計斗はクスフリにとって、守るべき存在だ。
危険が迫っているならば助けなくてはいけない。
だが。
今のクスフリは計斗に襲い掛かるであろうチンピラを止める気にならなかった。
疲れたとか呆れたとか、そんな理由ではない。
たとえそれがどんなに下らないと思える仕事でも、命令であれば全力で当たるのがクスフリと言う男の特徴だ。
そんな彼が止めに入らない理由はただ一つ。
危険だと思わないからだ。
兵士として実戦も経験してきたクスフリだ。
戦い方を見れば、力量がある程度は分かる。
「かわいそうに・・・」
口をついてもれたのは、クスフリのチンピラ達への率直な感想だっ

た。
五人の男が、一斉に計斗に襲い掛かる。
計斗の対応は、淀みも無く実に素早かった。
チンピラ同士の間隔が一番広い場所に向かって滑るように走りこみながら、すれ違い様に鳩尾に拳を叩き込む。
慌てて方向転換しようとするチンピラの頭に一発。
勢いを殺さず突っ込んできていた真後ろの相手には、振り向き様に裏拳を入れる。
腕が邪魔で頭などの急所には入らなかったが、関係ない。
チンピラはまるで轢かれた様に地面に転がった。
鉢合わせになりそうだった二人は、たたらを踏みながらも体勢を立て直し再び計斗に向かう。
若干開いた間合い。
その距離は、チンピラたちにとっては不幸としかいえない間合いだった。
計斗はまるで絞り込むように拳を引き、身体を捻る。
よほど思い切り物を殴りつけるつもりの構え。
と言うより、ほとんど冗談のような大振りの構えだ。
子供のころやるようなそんなパンチを、計斗は実際に繰り出して見せた。
全身のばねを使って思い切り振りぬいた拳。
そして、全力で飛び出した脚力から生まれる推進力。
その二つが合わさったときのダメージは、相手よりも先に自分の手を壊してしまう。
だから誰もやらないのが普通だ。
そう。計斗以外は。
地面とほぼ平行に突っ込んできた計斗の拳をまともに胴体に喰らい、チンピラは冗談のように吹っ飛び人垣に直撃した。
白目をむいて泡を吹くチンピラを見て、野次馬達は悲鳴にも似た歓声を上げる。

残された最後の一人は、不思議でならなかっただろう。
あまりに早い計斗の動きは、チンピラの目にはかすんで見えていた。
気が付いたら隣の奴は吹き飛び、計斗は後ろの方に居る状態だ。
何とか足を止め、振り向こうとするチンピラ。
だが、結局其れは出来なかった。
態々向き直るのを待つほど、計斗は気が長くなかったようだ。
背骨もへし折れとばかりに繰り出された計斗の拳が、チンピラの背中に突き刺さる。
妙な悲鳴を上げて崩れ落ちたその男が、計斗を囲んでいた男達の最後の一人だった。
「すげぇぇぇ！！」「ばけもんだぁー！」「とんでもねぇねーちゃんだぜぇ！！」
口々に歓声を上げ、計斗を褒め称える野次馬達。
それが聞こえているのか居ないのか、計斗はきょろきょろとあたりを見渡し、落胆したようにため息をつく。
「ありゃまだ食い足りないって顔じゃな。　あれだけやって満足しとらんようじゃぞ」
呆れたように呟くガルド老人。
「まぁー、あれじゃ相手になんないだろうしねぇー」
楽しそうに笑い声を上げるカロルコ。
そんな二人乗りアクションと計斗の様子に、クスフリは脱力仕切ったようによろよろと椅子に座り込んだ。
「だ、大丈夫ですか・・・？」
心配するラロに、クスフリは「だいじょうぶっす」と力なく応える。
そして、何かを悟ったような表情で言う。
「ガルド殿・・・召喚実験は成功していたんですね・・・」
「ん？」
不思議そうに眉をひそめるガルド老人。
クスフリはゆっくりと顔を上げ、続けた。
「見事なまでに強力なのが来てるじゃないっすか。“召喚獣”」

『なるほど』
その言葉に、ガルド老人、ラロ、カロルコは異口同音に応えるのだった。

十六話

計斗がボコしたチンピラたちは、あたりでも札付きの連中だったらしい。
あれだけ派手に暴れたのに、結局誰からも苦情の声が上がらなかったというのがその証拠だろう。
まあ、なんにしても名目上カロルコの指示で殴ったことに成っているので、問題なかったりするのだが。
現場の後片付けを兵士達に任せ、計斗たち五人は場所を変えて飲みなおしていた。
カロルコの行き着けだと言うその店は、所謂バーのような店だった。
まだ日が沈む前と言うこともあってか、他に客の姿は無い。
テーブルには女性マスターが用意してくれたものと市で仕入れてきた料理が並び、さながら戦勝祝いのような有様だ。
「じゃあ、別に格闘技とか習ってたわけじゃないんだ？」
目を丸くして言うカロルコに、計斗はコクリと頷く。
手に持ったガラスグラスに注がれた琥珀色の汁は、勿論酒だ。
今年１８な計斗は、日本では酒は飲めない。
が、この異世界の国の法律では１５～６で酒が飲めるのだそうだ。
郷にいては郷に従え。
ガルド老人とラロに差し出された酒を、計斗は快く受け取ったのだった。
「道場などに通うのにも金がかかるからな。　おかげで型も何も無いただのケンカ流だ。　格闘家には歯がたたんだろうよ」
「絶対そんなこと無いとおもうっす・・・」
ぼそりと呟くクスフリの言葉は、誰の耳にも届かない。
ちなみに彼が飲んでいるのは、オレンジジュースだ。
本人曰く、仕事中に飲むわけには行かないし、元々下戸で飲めないのだそうだ。

「両親ともいなくてな。兄と二人暮らしだから経済的な余裕も無いし」
「ありゃりゃ。病気かなんかかのう？」
表情を曇らせるガルド老人に、計斗はあっけらかんと答える。
「いや。私も兄も捨て子だったらしくてな。　養護施設で育ったんだが、今は兄と私の収入で部屋を借りて生活している。　いや、いた、か」
「た、たいへん、なんですね」
今でも泣き出しそうな顔で言うラロ。
だが、当の計斗はあっけらかんとした様子だ。
「なに。別に両親が死ぬのを目の前で見てトラウマになったとかでもないしな。私も兄貴も見咎める物がいない分好き勝手やっていたよ。でも無ければ街場でケンカして金を稼いだりもできんだろう」
「ケンカして金稼いでたんす。　なんか納得いくような」
なんともいえない微妙な表情のクスフリ。
ガルド老人も空恐ろしいものを見るような顔で計斗を見ている。
「そういう意味では召喚事故に巻き込まれたのは私で正解だったのかも知れんな。　悲しむような身寄りも兄貴しか居らんし。その兄貴も私が召喚されるところを目撃しているわけだし」
「目撃？」
「ああ。　一瞬で召喚されたのではなくて、徐々にこう、空間に溶け込むように足の先からこっち側の世界に来たものでな。召喚されている間兄貴と会話してたんだ」
「それまた貴重な体験だねぇ」
おかしそうに笑っているのはカロルコだけだった。
ガルド老人とラロは召喚した当人であるせいか、そっぽを向いて同じように口笛を吹いている。
クスフリはやはり微妙な表情で顔を引きつらせていた。
「しかし。　何で私はこう好き勝手出来るんだ？　本来なら牢屋にでもぶち込んでおけばいいだろうに。小娘一人」

絶対に大人しく入って無さそうっすね。と言う言葉を何とか飲み込むのに、苦労するクスフリだった。
計斗の言葉を聴いカロルコは、おかしそうに笑いグラスの酒をあおる。
「まぁねぇ。　そういう国もあるだろうけどさ。　うちは騎士道国家だからねぇー。　礼節と義理ってのを大事にってね。　無事もとの世界に戻れるまで、なーんにも心配しないで大丈夫だよ」
カロルコの言葉に、ガルド老人も頷く。
「非はわしのほうにあるわけじゃしな。　一応わしは国王勅命で動いとる訳じゃからの。そのへんはきちんとしとるわい」
胸を張ってみせるガルド老人の様子を見て、計斗は眉間に深く皺を寄せた。
「その辺がますますもってわからん。　国ぐるみならもっと失態を隠そうとしてしかるべきだろうに。　こんな面倒なことせんでも良いと思うんだが」
「ケイトさん、それ自分をもっとひどく扱えって言ってる見たいっすよ・・・」
冷や汗を流しながら言うクスフリ。
計斗の疑問に答えたのは、以外にもそれまで黙ってジュースを飲んでいたラロだった。
「この国の人は、みんな実直で勤勉で・・・なんていうか、のんびりしてて、優しいんですよ。　ぼく、他の国で生まれ育ったんで。分かるんです。戦争で焼け出されて、みなしごになったぼくでも、こうやって暮らしていける国ですし」
そういうとラロは、少し気恥ずかしそうに笑って見せた。
そんなラロに、四人の視線が自然と集まる。
みんなの思いを代表するように口を開いたのは、計斗だった。
「お前そんな長台詞いえたんだな」
「ひ、ひどいっ・・・！」
心底感心して、素で言ってる分なお酷さに輪がかかっている。

「俺もけっこうラロくんとは付き合いあるっすけど、はじめてっすね」
クスフリも感心したように頷く。
「わしも」
ガルド老人も骨付き肉にかぶりつきながら呟いた。
「み、みんなしていわなくても・・・！」
泣きそうになるラロを見ながら、どこか悦に入った笑みを浮かべる計斗。
その様子を見て、さらにびびるラロ。
「なんかケイトちゃんって見ててあきないよねぇー」
「ほんとじゃのぉー」
さらにそんな二人を眺めながら、によによと笑うじいさんと中年。
クスフリはエビのような甲殻類の素揚げを口に運びながら、「こんな歳のとり方はしたくないな」と、思うのだった。

十七話

「やっぱあの子おもしろいなぁー」
計斗とクスフリが出て行ったドアを眺めながら、カロルコは肩を震わせてコップの酒をあおった。
別に寒いわけではない。
笑いをこらえるのに忙しいのだ。
「わからんのぉー。　普通は無事に帰れるのかーとか、もっとこー、ごねる所じゃとおもうんじゃけどのう」
肩をすくめながら、ガルド老人もカロルコに釣られたように苦笑を漏らす。
「あのケンカにしても不安を紛らす為にとかかとおもっとったんじゃが。　あの様子じゃマジでただ単に趣味でなぐっとった感じじゃったぞ」
「感じじゃなくて、実際そうなんじゃない？」
「あっけらかんとゆーとるがのう。　其れはそれで随分恐ろしいぞ」
嫌そうに顔をしかめるガルド老人。
そんな様子を見てカロルコは、ますます楽しそうに肩をすくめて見せる。
「グラムハドル大祭。　あれも出たいっていってたしね」
グラムハドル大祭。
召喚術師として名を馳せた英雄を称える為に、世界各国から召喚獣を持ち寄り競わせると言う祭りだ。
ある一定の規定に沿った召喚獣同士を戦わせ、選りすぐれた物を用意した者、つまり国の勝ちとなる。
たとえば。
同じ召喚獣でも、ドラゴンとフェアリーを召喚したとしよう。
個体差は勿論あるが、おおむねドラゴンが圧勝するのが普通だろう。
それではより巨大で強力な種を召喚したものが有利に決まっている。

ならば、一定のくくり。
たとえば妖精種であるなら妖精種のみ。
ドラゴンであるなら、竜種のみ。
人間を含める人類であるなら、人類のみ。
そういう大まかなくくりを設け、いかに強力な個体を召喚したかを競う。
それが、グラムハドル大祭の特徴だった。
「あれの人類種部門って、牛頭鬼とかセイレーンとか、出て精々リザードマンでしょう？」
「軽く言うがのう。　この国の騎士連中ならまだしもあの子は人間しか居らん世界の一般人じゃぞ。　一応。　あくまでも一応じゃが」
街での暴れっぷりを見ているだけに、ただの極普通の人間とはこれっぽっちも思っていないガルドだった。
それが分かっているカロルコも、「一応、一応」と面白そうに頷く。
「正直、アレだけの腕なら何とかなると思うよ。　ガルじぃも元々はそのつもりで召喚したんでしょ？」
カロルコの言葉に、ガルド老人は難しい顔をして腕を組む。
少し思案するように唸ると、大きなため息をついた。
「たしかにケイトちゃんにもそういったんじゃが、あの時は召喚に成功したことで興奮しとったしのう。大体、元々成功すると思っとらんかったし。召喚」
「は？　どゆこと？」
不思議そうに首を捻るカロルコ。
ガルド老人はコップの酒を飲み干すと、新しい酒を注ぎながら話し始める。
「元々あの召喚陣はこの国の書庫にのこっとったむっちゃくっちゃ虫食いのある魔道書から抜き取ったもんなんじゃが。　如何せん虫に食われまくっとってなんに使うもんかも最初はじぇーんじぇん解らんかったんじゃ。　なんとかこうとか召喚に使うもんだろうってことだけは当たりをつけて、製作して発動実験してみたんじゃよね」

「そんな何が出るかもわかんないものいきなり発動させたの？」
「いやもう当たりがついた時点で実験したくってしたくってもう」
まったく悪びれずに言うガルド老人。
科学者とか研究者と言う類は、後先をあまり考えない人種が多いのは万国共通らしい。
「とはいっても、一応一部の判読には成功しとっての。　アレはＡ地点にあるものをＢ地点に移す、いわばテレポーテーションみたいなもん、な、はずじゃったんじゃよ」
「実際には召喚陣だった。　ってことなわけ、か」
「いや。正確にはそれもちっとちがった」
「ん？」
興味深そうに首をかしげるカロルコ。
「あれは異世界のＡ地点にあるものと、コッチの世界のＢ地点にあるものを入れ替える・・・っつーか、なんつえばいいんじゃろ。ワームホールをあけるだけ、オンリー、片道切符的なもんらしくってのぉー」
「それって召喚とは違うの・・・ってまさか・・・」
カロルコの頭の中に、ある仮説が浮かぶ。
「送還の仕方がまったくわからん。　と言うかぶっちゃけるとじゃな。　そのＡ地点と言うのがほんとに地点なのか人物なのか空間なのかもまったくわからんのじゃよね。　もしかしたらケイトちゃんの右半分とか左足だけとかが召喚されとったかもしれんっちゅーことじゃな」
「でも、召喚陣なんでしょ？　解読すればそういう情報とかもとりだせるんじゃないの？　ていうか、そもそも位置の部分を逆転させればいいんじゃない？」
まともそうなカロルコの意見を、ガルドは「無理じゃろな」と一蹴した。
「もし太陽軸を基本にした位置設定だったりしたら、よしんば向こうにいけたとしても宇宙空間とかも有り得るんじゃぞ。　ていうか

城に行ってケイトちゃん達と別れた後わしもそれ考えて実験施設行ったんじゃよ。　そしたら魔方陣、ものの見事に消えとったわ」
「消えた？　って、まさかケイトちゃんがいた場所の地面ごと入れ替わったとかそういうこと？」
「いや。　召喚陣を刻んだ部分がさらっさらの砂になっとった。石が砕けたんじゃと思うんじゃけどのう・・・」
「紙とかに記録は？」
「石に直接刻んだんじゃぞ。　消えると思わんからとっとらんわい」
「本に書いてあったのは？」
「穴あきでずったぼろじゃって言ったろう。それをああじゃないこうじゃないいじりながら地面にほっとったんじゃ。この歳でもうろくしとるわしに記憶力はきたいするなよ？」
重い空気が二人の間に流れる。
ふと、カロルコはあることに思い当たった。
「その参考にした本って、もう無いの？」
「ん？　あれ自体は禁書の類らしいが、まだ書かれて二～三百年じゃからな。エルフとかその辺ならもっとるじゃろうが、国外じゃぞ。っと、まてよ・・・」
この世界において、国外旅行と言うのは実は難しいものだった。
大戦が終了して十数年。
未だに国家間の緊張は緩みきってはいない。
身分の不確かなものや、逆にカロルコのような身分のものが国境をまたぐと言うのは難しいことだった。
「それこそ、グラムハドル大祭か・・・」
四年から五年に一度行われるこの大祭の間は、戦争なども中断される。
この世界にとっては、それほど重大なイベントだった。
祭りの間ならば、ある程度の国家間移動は許されるのが通例だ。
「うちの国はずーっと召喚獣だしてないからねぇ。　出せなかったって言う方が正しいんだけどさ。　だから国境をまたぐ理由もあん

ましなかったからめだったけど。ケイトちゃんが参加するなら話は別だよ？　国中から観光客も流れるだろうし。　それに紛れてお使いを出したって、上手くやればばれないとおもうんだよねぇ」
「その手もある・・・のう・・・」
難しい顔で唸るガルド老人。
「ケイトちゃんもやりたいとはいっとったが・・・実力がわからん。魔物と戦うのはわかっとるといっとったが、戦えるかどうかが問題じゃぞ」
「ま、まだ時間もあるし。　ちょっとずつ見せてもらおうよ」
肩をすくめて見せるカロルコに、ガルド老人はため息を吐き出す。
「あの・・・ぼくおもうんですけど・・・」
ふと、それまで黙っていたラロが手を上げて発言する。
「ケイトさんのあの張り切り様だと、止めても行く気がするんです・・・」
ラロの言葉に、カロルコとガルド老人の脳内に「あの張り切り様」が浮かぶ。

「かまわん。トカゲだろうがエルフだろうが拳で粉砕してやろう」
「ちょ、なんで俺のことさんどばっくみｔ　ぎゃあああぁぁぁ！！！」

「あれ、なんかわしちょっといけそうな気がしてきた」
真顔で呟くガルド老人に、カロルコもやはり真顔で頷き返したのだった。

十八話

「いや？　別に帰る気はないが？」
自分の問いに帰ってきた予想外の答えに、クスフリは思わずもっていたフォークを取り落としてしまった。
「え、あの、自分、もといた世界に返りたいかって、きいたんすけど」
「ああ。だから別に帰る気はないといったんだ」
クラリッツが用意させたと言う夕食をもぐもぐしながら、計斗はけっこうなことを当たり前の言うに言い放った。
「せっかく面白そうな世界にこれたんだ。居つくつもりでいる。どうせ召喚事故だ。　戻ろうと思っても戻れまいよ」
「そ、そんな軽いかんじで・・・」
顔を引きつらせるクスフリ。
だが、当の計斗はまったく意に返していない様子だ。
「こうして飯が食えて雨露を凌ぐ屋根があるんだ。　どこかでどうにか成っていることも兄貴はわかっているだろうからな。第一がたがた騒ぐほどのことでもないだろうに。たかが異世界に飛ばされたぐらい・・・」
「騒ぐほどのことだとおもうんすけど」
やはり引きつった顔で呟くクスフリだったが、当の本人は本気でそう思っているらしいので、強く突っ込むのはやめておくことにした。
弱くは突っ込んだわけだが。
不安とかは無いのか。と、聞きたいところでもあったが、計斗が不安になるのだろうかという失礼なような的を得ているような考えが頭をよりったので、それもやめておく事にした。
ここにきて早くも色々諦め始めたクスフリだった。
二人がいるのは、王城の食堂だった。
アレだけ飲み食いしたにもかかわらず、計斗はまだ夕飯を食う気満

々で王城戻ったのだ。
本人曰く。夕飯は別腹、らしい。
流石にもう食えないと思っていたクスフリだったが、クラリッツ、上官が用意した食事を食べないわけにはいかないと、ゆっくりとながら口に運んでいた。
味が良いせいか、腹はいっぱいだったはずなのに食が進むクスフリだった。
「でも、リザードマンとかモスマンとかと戦うかもしれないんすよ？」
「人の形をしていて殴れるものだったらどうにか成るだろう。　なに。　きちんとこちらで実地訓練をしてみてから正式な判断はするさ」
「って、なんかそういう化け物類と戦うつもりなんじゃ・・・！」
実地訓練と言うからには、実際にそういう手合いと戦うつもりなのだろう。
計斗ならやりかねない。
そう思ったクスフリのから血の気が引いていく。
「失礼なことを言うな。　一応同じくくりになる人類種の方々だぞ」
真顔で言う計斗の言葉に、「そこっ？！」と突っ込みを入れつつも、青ざめるクスフリ。
この女性は、このうえまだ危険なことをするつもりらしい。
「何考えてるんすか？！　危険っすよそんなの！」
「クスフリはそういう類と戦ったことがあるのか？」
「へ？」
突然振られた質問に、クスフリは一瞬言いよどむ。
聞かれた意図が良く理解できないまま、「まあ、あるっすけど」と答える。
「じゃあ、何とか成るだろう」
「ならないっすよ？！　どうしてそうなるんすか？！」
「私は武器を持った人間と遣り合っても拳一つで何とかする自信が

あるからだ」
ジャキーン
何かそんな擬音がしそうな感じのきりっとした顔で言い放つ計斗。
街場での戦いっぷりを見ているだけに、完全否定も出来ず、なんともいえない表情を浮かべるクスフリだった。
「まあ、相手は火を吹こうが何しようが所詮人型なのだろう？　私は一応拳銃を持ったヤクザとも交戦経験があるからな。　どうにも成らんわけでもあるまいよ」
「銃持ってる相手にまで喧嘩吹っかけてるんすか？！」
全身で驚きのリアクションを見せるクスフリに、計斗は不思議そうに首を傾げる。
「なんだ。この世界には銃まであるのか。あの、火薬で鉄の玉を飛ばす奴だぞ？」
世界観の認識は、計斗にとっては死活問題でもある。
クスフリもそのことは察しているようで、不満そうではありながらもすぐに居住まいを正して答えを返す。
「ええ。　この国は魔法がないっすから。飛び道具と言えば、銃か弓、ボウガン。　大砲に、炸裂弾とかっすから」
「弓が現役と言うことは、リボルバー拳銃や自動小銃にガトリング砲とかは開発されとらんのか」
「りぼるばー？　ですか？」
「いや、いい。　わかった」
きょとんとした顔で小首を捻るリアクションを見て、良くわかったというように頷く計斗だった。
「そうか・・・そうなると兵器開発で多少役に立てるかも知れんな」
「へ？　なんでっすか？」
「趣味で色々調べたことがあってな。　私の世界ではそれこそ銃器が戦争の主役でな。　いろいろと技術が開発されているんだ」
「でもそんなの軍事機密なんじゃないんすか？　なんで一般人の計斗さんがそんなもの調べられるんすか」

「そういう世界だったんだ。　大体そういう類のものは知識として知っていても作れんだろう。それこそ一般人は」
「まあ、其れはそうっすけど・・・。　でも知識として持ってるだけでも危険なんじゃないっすか？」
「そう言われるとそうなんだが。　なんであんなものが分かるようになっとるんだろうな」
眉間に皺を寄せながら、なんともいえない表情で首を捻りながら食事を口に運ぶ計斗とクスフリ。
そんな考え事と言うか、悩み事をしながら食事する二人を見て、気が気ではない人物が二人いた。
クラリッツと、エリメラ王女だ。

「いーかおまえらぁー！　今回のお客人は異世界から来たお客人だぁー！　異世界から無理やり召喚されて不安も疲れもたまっているに違いない！　それを！　この王城が誇る最高のおもてなしの魂で癒していただく！！　あ、王城ってやっぱり違うな　そう思って頂けるよう、全力をつくすんだ！！」
『おー！』
計斗たちが待ちに出た後、王城の大広間で行われたクラリッツの演説はそんな言葉から始まった。
「まずは食事！　ただ寝泊りするところだと侮られるなぁー！　最高のご馳走とは机の脚が折れるほどの沢山の豪華メニューだけとは限らない！　素朴で身構えず食べることが出来、且つ身体に良い料理！　それもまた最高のおもてなしと心得ろ！　まずは今日の夕食で御客人の好みを調べろ！　然る後、食材を集め仕込みを開始するんだ！　異世界から来た故に味付けや味覚も俺達とはずれがあるかもしれない！　その辺に気をつけつつ食べ姿を見つめぬけぇー！」
なにやらどこぞの温泉旅館のようなことを熱く語るクラリッツ。

そんな彼の前に整列している部下達も、真面目な顔で聞き入っている。
「お姫の部屋に泊まるらしい！　ベットのマットレスを天日干しにしてもっふもふにしろ！　枕もそば殻、羽毛などなどありったけ物を各高さでご用意！　湯浴み場の掃除も徹底しろぉー！　もし黒かびでも生えていようものなら首が飛ぶと思え！　異世界に飛ばされてきた切なさや不安を少しでも和らげて差し上げることに全力を注げぇー！　俺の！　俺達の王城の！　底力を！！　見せてやるん、だぁー！！」
『だぁー！！！』
一斉に拳を天に突き上げる王城兵士達。
どうやら彼ら的には何も間違っていないらしかった。

計斗の前に出されているのは、そんな彼らの魂が篭った料理だ。
旬の魚と野菜を、じっくりと、丁寧に、それでいて気兼ねなく食べられるように工夫を凝らした一品。
けっして大仰でかしこまった料理に成らない様、短い時間の中で作り上げられたものだ。
だが。
それを口にしている計斗の表情が優れない。
専属付き人状態になっているクスフリのもだ。
「ま、まさか・・・口に合わなかったのか・・・！」
王城を守るものとして、それは許されない失態だ。
あくまでクラリッツ基準だが。
「しかしあれだな。　この国の料理は美味いな。　これの魚もうまいぞ。　煮つけか何かか？」
「っしゃぁあああ！！」
思わずガッツポーズで叫ぶクラリッツ。
幸い彼がいるのは、計斗たちの席から遠い厨房ののぞき窓の前だった。

両人がびっくりしてすっころんだ以外の被害は出なかった。

もう一方ののぞいてる人。
エリメラ王女は、食堂の出入り口から二人を覗いていた。
百人からが一斉に食事できる規模の食堂の奥のほうに入る計斗とクスフリを、出きり口から観察している。
しかも、律儀に地べたに座り込んで頭の先だけをちょこんと出すスタイルで。
計斗たちのいる場所からは、よほど気にしなければ発見できないだろう。
場所柄兵士達の行き来が激しかったが、エリメラ王女の地味スキルが発動していた為、誰も気にも留めなかった。
むしろ食堂の出入り口付近で立っているガーランドにびくっと成るものが殆どだったりした。
「すごい・・・ほんとに普通のおんなのこなんだ・・・」
計斗を眺めながら呟くエリメラ王女。
普通かどうかはさておき、まあ、女の子と言う部分だけは間違いないだろう。
「お友達になれるかな？」
王女であるエリメラには、友達と呼べる存在が殆どいない。
そもそも、世代との接触が少ないのだ。
侍女や高官の娘達、他国の王女などと接する機会は沢山ある。
しかし、彼女らはあくまでエリメラのことを王女として扱う。
まあ、当然のことではあるのだが。
ところが、計斗はどうだろう。
王女と分かっても特別臆するでもなく、扱いを変えるわけでもない。
最初会ったときの、侍女と接する態度となんら変わらず接してくれた。

王女相手に其れはどうなのかとも思われるが、エリメラにはそれがうれしかった。
そして、異世界に連れ去ってしまった自分を許してくれた。
別にエリメラが直接何かしたわけでもないのに、彼女本人はクラリッツの言葉のせいで自分のせいの様に感じでいた。
言われたことをそのまま信じる、素直な性格なのだ。
計斗は、自分に気を使って「面白いと思っている」とまでいってくれた。
実際計斗自身が思いっきり楽しんでいること、事実面白いと思っていることも、王女はまだ知らない。
エリメラ王女の目には、計斗の言動も態度も、何もかも好意や本人の優しさから来るものに思えたのだ。
それがただ単に態度がデカイ、物事を良く考えないところから来るものだとは、欠片も思わない。
「ねぇ、がーちゃん。　ケイトさん、おともだちになってくれるかな？」
地べたに這い蹲るように異世界からの客人を覗き込んでいる主人の質問に、ガーランドは常に崩れない無表情のまま、首をかしげた。
「直接お話しないと分からない、かぁー・・・そうだよね・・・今日は私のお部屋に来てくれるんだし。　がんばろう」
ぐっと握りこぶしを作るエリメラ王女。
そんなエリメラ王女を見て、ガーランドはコクリと首を縦に振ってみせる。
「うん、ありがとう」
なにやらうれしそうに微笑むエリメラ王女。
傍目には分からないが、エリメラ王女にはガーランドの首の動かし方だけで言いたい事がわかるらしい。
他人から見たら、奇妙な光景としか写らない、不思議な主従関係だった。

十九話

召喚獣召喚成功の一報は、翼竜便を使ってすぐさま国王のところに届けられた。
ちなみに翼竜とは、魔法が発達するこの世界において唯一計斗がいる国でだけ運用を可能にしたドラゴンの一種だ。
馬車一台を持ち上げるほどの輸送力と、その飛行速度は他の航空機上生物を圧倒していた。
とことん動物系には強い国だった。
兎も角。
王城からはるか北。
国境を含む山脈地帯を守るラナン城砦に知らせが届いたのは、夕方頃の事だった。

これまで、実戦使用に耐えうる魔法すらなかった国にとって、召喚成功の知らせは冗談と思われても仕方ないほど途方も無いものだった。
我々の世界に置き換えて言えば、いきなり「五百万人が暮らせるスペースコロニーが出来ました」くらいの衝撃だろうか。
北域を統括する大将、サリア・グラバトはこの事をどう国王へ報告したものかと頭を悩ませていた。
元来重騎士としての武勲と、その堅実な性格で将軍にまで上り詰めた彼は、戦事以外で頭を使うことが極端に苦手だった。
召喚成功、というか、召喚事故で異世界の少女を誤って呼び寄せてしまったことは分かった。
しかし、これをそのまま国王にお知らせした場合どうなるだろう。
心優しいこの国の王は、その事実に心をお痛めになるのではないか。
少しでも主君の心を痛ませない方法でこの事実を伝えつつ、早急にこれを解決する策を見つけなければならない。

「・・・だめだ。思いつかん」
手紙を受け取ってから一時間。
悩みぬいた末の結論だった。
サリア・グラバト大将２８歳独身。
彼はこういうこういう事に滅法弱い男だった。

結局、サリアは送られてきた手紙をそのまま国王に見せることにした。
国王のリアクションは、おおむねサリアの予測していた通り。
顔を真っ青にしてガクガク震えながら、波をためた黒目がちな目で不安そうに見上げてくる。
年齢こそ三十代後半の国王だったが、大人の体にならず成長が止まる種族の血が濃く、子供が二人もいる現代でも１５～６歳にしか見えない。
娘と並んでいると兄妹のようだともっぱらの評判だ。
「これって、誘拐幇助とかになるのかなぁ・・・？」
思考回路も比較的娘と似ているらしい。
正確には逆なのだろうが。
「誘拐ではなく、事故です」
険しい表情のまま言うサリア。
如何にも歴戦の騎士然としたサリアは、こういう突拍子も無い事件が苦手だった。
突然敵の大軍が攻めてきたとか、敵陣に一人取り残されたなどと言った問題ならば表情一つ変えず解決策を出す自信がある彼だったが、魔法や今にも泣き出しそうな国王の扱いは専門外だ。
「そうか・・・そうだよね、カロルコさんからの手紙にもそう書いてあるもんね。　そんなことよりも、この子をどうするか考えないとね」

何度も頷きながら涙を拭う国王。
健気な少年にしか見えないからだが、大戦当時は両手に剣を構え敵陣に切り込むその姿から“銀翼の”とあだ名されたつわものである。
「とりあえず、エリちゃんとカロルコさんにどうするか考えて手紙送らないとだね。　クラリッツさんはきっとお客様が着て張り切ってるだろうから大丈夫だろうけど・・・。早く王城に戻らないとね」
「ザルドフェルド殿は賢しい方ゆえ、一先ずの所心配は在りますまい。　まずは御公務を無事終わらせられますよう」
今にも仕事を投げ打って王城へ帰ってしまいそうな国王にそっと語りかけるサリア。
国王はその言葉にコクリと頷くと、執務机の上におかれたカレンダーを手に取った。
「予定通りなら三日後には帰れるもんね。　それまでの間に、この子も色々と準備を整えた方がいいだろうし。突然僕が会いに行っても混乱するだけかもしれないもんね」
国王は少し考えるように唸るり、サリアの後ろに控えていた兵に声をかける。
兵と言っても、百人長級の高官だ。
「ぼくが王城に戻る日にあわせて、このイノウ・ケイトさんの処遇を決める会議を開きます。　少将さんと、主だった千人長さんたちに召集を」
国王の言葉に、室内にいた十数人の顔色が変わった。
よほどのことでもない限り、定例会議以外で将軍全員と千人長が集まることは無い。
それこそ、開戦直前でもない限り。
サリアが読み、国王に渡った手紙。
それは、カロルコはガルド老人と計斗達が帰った後九割がた酔っ払った状態で書いた物だった。
計斗が帰れないであろう事。
グラムハドル大祭に参加したがっていることなども記されていた。

そんな異世界の少女の処遇を決めるために、国の主要人物を集める。
国王は少し頼りないところはあるが、決して愚かではない。
思慮深く、知略に富んだ側面もある。
そんな彼が無意味にそのような招集をかけるはずが無い。
その場に集まった誰もが、国王の考えを図りかねていた。
「あ、でも喧嘩好きな子なんだっけ・・・ぼく誘拐の共犯って事で、ゲンコツされたりするかな・・・？」
突然不安そうに瞳を潤ませる国王に、北域を統括する主要人物たちは一斉に膝からガクリとすっこけたのだった。

十九話（後書き）

この国の王族は基本こんなんです

二十話

「まさか異世界で温泉に入れるとはおもわなんだな」
頭に白いタオルを巻き、すたすたと王城の廊下を歩く計斗。
その後ろを、同じく頭にタオルを乗せたクスフリが歩いてる。
「うちの国は水資源が豊富なんすよね。　山も近いんで、温泉とかも多いんすよ」
「水が美味くて温泉も緑もある、か。　日本人の終の棲家に最高の土地だな」
じじくさい事を言いながら深く頷く計斗。
実際、日本人は水が美味しくて食べ物が美味しくて温泉があれば概ね幸せになれる人種であるといわざるを得まい。
「ところでクスフリ。　家に戻らんでいいのか？」
「自分、城敷地内の寮に住んでるっすけど、今日からケイトさんの御世話っすから。　今夜はとりあえず姫様の護衛官詰め所で、いっしょに護衛することになってるんすよ」
「護衛の詰め所？　寝ずの番とかするのか」
眉間に皺を寄せるケイトに、クスフリは苦笑交じりに首を振ってみせる。
「流石にずっと起きてるわけじゃないっすよ。自分以外にも兵士詰めてるんすし。　交代で寝ながら警備っすね。詰め所って言っても、普通の部屋見たいっすし」
一国のお姫様の警護ともなれば、常駐警備ぐらい当たり前なのだろう。
もしかしたら計斗がお姫様を襲わないかも見張るのかもしれない。
自分が闖入者で、不振人物だと言う自覚の在る計斗としては厳しい警備体制も納得できるものだった。
「私が姫を襲わんようにきちんと見張れよ」
「ぶっ！」

計斗なりの応援の仕方に、思わず引き出すクスフリだった。

警備兵の並んだ扉を潜り、階段を登り、また警備兵の並んだ扉を潜る。
兵が多いのは、その一体が王族が日常を送る為のスペースだからだろう。
王族、とは言っても、どうやらエリメラ王女とリューヴェンス王子。
そして、国王の三人だけなのだと言う。
人数が少ないのに、いや、少ないから尚更だろう。
警戒に割かれる人員は多いようだった。
「自分、この階層に入ったのはじめてっす」
緊張した面持ちで呟くクスフリ。
一介の兵士である彼がこういった場所に来ることはまず有り得ない。
本人もそれを良く知っているだけに、場違いなところに来てしまったようでそわそわしているようだ。
計斗の方はといえば、実に落ち着き払った様子だ。
風呂上りで熱いのか、赤ジャージを肩に引っ掛けてすたすたと歩いている。
ジャージの下にはTシャツと下着しか着ていなかったようで、計斗の胸にはTシャツに書かれている漢字一文字が大きく押し出されている形になっていた。
ちなみにその漢字一文字は「拳」だった。
どこぞの観光客相手の土産物屋でゲットした、計斗のお気に入りだったりする。
「階層、か。　今自分が何階にいるのか分からんな」
王族が暮らす一角に移動するには、いくつかの階段を上り下りする必要があった。
高低差の異なるそれらをいくたびか行き来することで、王族が正確

に城のどの位置にいるのかを悟られない為の仕掛けだ。
一度敵の侵入を許しても、逃げるための工夫が様々凝らしているのが良い城の特徴の一つと言える。
これもまた、その一つなのだろう。
「色々工夫しとるんだろうな」
「何せ王様達がいらっしゃるところっすから。警備も準備もばんたんっすよ」
「そのワリにはリューヴェンス王子は割りと頻繁に逃げ出しとるようだな」
ぼそりと呟く計斗の言葉に、警備の兵士達が一斉に顔をそらしたのを、クスフリは見逃さなかった。
「・・・どこも大変なんすね・・・」

所々に立っている兵士に行き先を指示されながら、ようやく目的のドアの前にたどり着く。
近くにあった窓から外の景色を見ると、少なくとも城のかなり高い位置に自分達がいるのだということは分かった。
「自分、入り口から自分ひとりでここにもう一度来いって言われても。　来る自信ないっす」
本来なら自分では入れない領域に来てしまったことに対する緊張だろう。
クスフリの表情は若干憔悴しているように見えた。
昼間からずーっと驚きっぱなしの叫びっぱなしだったのだ。
多少なりとも疲れはするだろう。
それでも。
「なんだ。疲れきっとる様な顔しとるぞ？」
という計斗の言葉に。
「大体計斗さんのせいっす」
と返すだけの気力はあるようだった。
「街で喧嘩しただけでえらいいわれ様だ」

「だけって。　けっこうなことっすよそれ」
顔をしかめるクスフリに、計斗はどこか遠い目をして言う。
「女は戦わなくては成らないときがあるんだ。　こう、イラッとしたときとか」
「なんすかその理由。どこのヤンキーっすか」
「誰がヤンキーだ。　私は品行正しい一般学生だぞ。　成績は悪いけどな」
「胸張っていうことじゃないっす」
微妙な表情のクスフリを無視して、計斗はずっと自分の頭に巻いていたタオルを外す。
黒髪がばさりと腰まで落ちる。
艶やかで美しい髪は計斗の鋭い凛とした容姿を引き立て、とても美しい。
が、鬼神もかくやという本性を知っているクスフリには悪魔の羽ぐらい危険なアイテムに見えた。
計斗は濡れたタオルをパンパンと叩くと、近くにあった窓に近づいていった。
「ん？　どうしたんすか？」
「いや。タオルを干しておこうと思ってな。　廊下の窓ガラスにベラッと」
「何でそんなところに・・・」
「日当たりが良さそうだろうが」
それ以上の理由はないらしい。
「しかし窓ガラスなんだな。　やはり一概にどの程度のレベルとは言えんな」
一人でぼそぼそ呟きながら、窓ガラスをあける計斗。
少し身を乗り出し、窓のふちにばさりとタオルをかける。
「そんなことしなくても、洗濯場にもっていけばいいじゃないっすか」
声をかけるクスフリだが、計斗はリアクションも無くじーっと窓の

外に顔を出したまま固まっていた。
「どうしたんすか・・・？」
なんとなく嫌な予感がするものの、何も言わないわけにはいかず声をかけるクスフリ。
計斗は下のほうをじーっと見ながら、バサリと窓のふちにタオルをかけ、続きを口にした。
「この国の赤ん坊は皆壁に張り付いて這いずり回ったりするのか？」
クスフリは真顔のまま、すっと計斗がのぞいている窓から顔を出した。
そこに居たのは、窓枠のすぐ下に張り付いて計斗とじーっとにらみ合っているリューヴェンス王子だった。
見つめ合っている、では無く。にらみ合っている、だ。
「またリューヴェンス王子が逃げ出してますよー！」
素早く顔を上げたクスフリの声に、視界に入る兵士数人が素早く反応する。
手に手に鍵爪のついたロープを持ち、げんなりとしたその様子を見て、クスフリは改めてどこも大変なんだな。と、思った。

二十一話

「にゃ。　にゃーにゃ！　っけーにゃー！」
でかめの猫の上にへばり付き、リューヴェンス王子はまるで戦場を駆ける若武者のように雄たけびを上げていた。
王子の掛け声らしきものに答えるように猫は間延びした鳴き声を上げ、さらに走る速度を上げる。
その後ろを必死の形相で追うのは、クスフリと近衛騎士団の皆さんだ。
壁に張り付いているリューヴェンス王子を発見した流で、捕縛を手伝うことに成ったのだ。
「すまん、バーンメル！　発見してもらって助かった！　俺達もあの方の脱走技術の高さには手を焼かされていてな！　早めに発見してもらって助かった！」
若干お疲れ気味な表情で言う近衛兵。
ちなみに覚えている人はいないかもしれないが、バーンメルと言うのはクスフリのファミリーネームだ。
「いえ、発見したのにお助けできずに不甲斐ない限りです！　昼間のこともありますが、しょっちゅうこういう事をなさるんですか？！」
全力で走りながらも、近衛騎士から借りた虫取り網を振るい、なんとか王子を捕まえようとするクスフリ。
ちなみに今はお仕事モードだから「〜っす」口調ではない。
「ああ！　ハイハイが出来るようになられてからは富に酷い！　ああして野生の動物を使役なさって、そこらじゅうお逃げに成られる！」
「ある意味頼もしくもありますが・・・！」
表情を引きつらせるクスフリ。
魔法を増えてとするこの国の軍事力は、魔獣と呼ばれる動植物に頼

るところが大きかった。
それだけに、赤ん坊の頃から動物を自由に操れると言うのはリューヴェンス王子が凄まじく優秀である証拠でもあるわけだ。
「でもこの場合は厄介以外何者でもありません！　それ以前になぜ王子はお逃げになっているんですか！」
「分からん！　それ以前にわれわれから逃げているのか、偶々そうなっているかの判断もつかん！」
リューヴェンス王子は猫にしがみついたまま、ちらりと後ろを振り向いた。
クスフリたちが追ってきているのを確認するようにねめつけると、くるりと前を向き直り声を張り上げる。
「にゃんにゃー！　っけー！　っけーよー！」
その声に呼応するように、猫は間延びした鳴き声をあげた。
「・・・どうやらわれわれから逃げているようだ！」
「なんでっすかぁー！！」
ビシーッと突っ込みを入れるクスフリ。
思わず素に戻ってしまったのはご愛嬌だ。
リューヴェンス王子の声でさらに加速した猫に追いつこうと、必死で足を動かすクスフリと近衛兵達。
「くっそ！　埒が明かん！　翼竜を出せ！　上から捕縛する！」
「はっ！」
上官らしい近衛兵の声に、後続の数人が声を上げ竜舎へと方向転換する。
兵士だけあって、こういう連携は早い。
しかし、この声に反応したのは兵士だけではなかった。
「あい。　にゃ、ぴゅーくー。　じゅー、ぎょ！」
幼児語。と言うか赤子語で飛ばされる指示に、猫は了承の意味らしい鳴き声をあげる。
大人では理解できないその指示に従い、猫は九十度方向転換した。
四足歩行動物の方向転換能力は伊達ではない。

「曲がったっ？！」
減速して曲がろうとするクスフリたちとの距離が若干広がった。
だが、魔法使いと剣や槍だけでまともに戦うこの国の兵士達の脚力もまた尋常ではなかった。
素早く体勢を立て直し、すぐさま猫の速度に追いつく。
そこで、近衛兵の一人があることに気が付き叫ぶ。
「この先は池です！」
池、つまりどん詰まりだ。
「左右展開！　追い込むぞ！」
『はっ！』
数人の兵が素早く左右に広がったのを確認すると、中央付近の兵達は進行速度を少しだけ落とす。
ちょうどVの字になるような編隊を瞬く間に作り出した。
この状態なら、池間近に追い込んでしまえば逃げ道を塞ぐことができる。
「捉えた！」
確信したようにいう近衛兵の一人。
殆どのものがそう思う中、クスフリのすぐ後ろの弓を背負った近衛兵だけが表情を険しくしていた。
「おかしい」
「なに？」
「猫は水を嫌うもんだ。　アイツはやっぱり王子の指示で動いてる。
それこそ自分の庭のどこに何があるかあの王子が知らないはずが無い」
その言葉に、クスフリの表情が歪む。
「まさか、じゃあわざと？！」
その間にも、王子を乗せた猫は池に向かって一直線に走っていく。
速度を緩めずに、だ。
「ばかなっ！　突っ込むつもりか？！」
池のほとりまであとわずか。

このまま行けば池に突っ込みそうな勢いだ。
それでも、猫は速度を緩めない。
猫の前足が池の淵にかかった、次の瞬間。
「跳んだ？！」
ここまで走ってきた速度を乗せて、猫は大きく跳躍したのだ。
慌てて減速をかける近衛兵達をよそに、王子を乗せた猫は華麗に夜空を舞う。
人の背丈を越えるほどの高さを飛び上がる猫。
その猫にしがみついていた王子が、猫の背から離れた。
離れる瞬間、握っていた猫の身体を押したのだろう。
王子の身体は猫よりも前に飛び出す。
オムツを装着したオシリを、猫は突き出した後ろ足でびしりと蹴りだす。
その勢いで王子はさらに加速し、猫はなんと池の淵までUターンする。
「うをあぁぁぁ！！！」
目の前で起こるあまりの出来事に、すっころびながら叫ぶクスフリ。
ごろごろと転がりながらも何とか手足を突っ張って急制動をかけ、立ち上がる。
こちらもやはり唖然とするこの近衛兵達だったが、さらに驚きの光景が目に飛び込んでくる。
「ぎょー！」
空中で叫ぶリューヴェンス王子。
その声にこたえるように、水面から何かが跳ね上がった。
「こ、鯉だぁっ！！」
全長１．５ｍは在ろうかと言う巨大な鯉が、月夜の空に躍り出る。
その位置は、空中を進む王子の進路上だ。
王子は両手両足を前に投げ出した体勢のまま宙を舞っている。
まるで計算されつくしたかのような美しい動きで、王子は空中の鯉の背中にしっかりとしがみ付いた。

クスフリと近衛兵達にはスローモーションに見えた一連の動きは、僅か数秒の出来事だ。
鯉は優雅に着水すると、王子を水面に出した状態で池の中を泳ぎ始める。
「ぎょ、ぎょーじょ！　ぎょ！」
鯉の背中を撫でる王子を、呆然と見つめる近衛兵達。
「ぎょ・・・？　ぎょって、魚？」
「王子、難しいことしってんな・・・」
呆れると言うか、もはや感心してしまっている近衛兵達だったが、すぐに我に返ると各々動き始める。
「私も翼竜で上から捜索します！　明かりがあれば見えやすいでしょう！」
「池の下流を塞げ！　城に行って人手を集めろ！」
ボートが無い池である上、水深はかなり深い。
今は鯉に乗っているからいいが、いつ落ちるとも限らないのだ。
手早く指示を伝達する近衛兵達を横目に、それまでじっと王子の姿を見ていたクスフリが突然上着を脱ぎ始めた。
「おい、お前まさかっ！」
「自分は泳いで追います！」
言うが早いか、クスフリは勢いをつけて池に飛び込む。
「おい、まて！　相手は魚だぞ？！」
止めようとするが、クスフリはかまわず泳ぎでリューヴェンス王子を追い始めた。
「何考えてるんだ・・・？」
「いや、案外当たりかもしれない」
眉をひそめる近衛兵に、さっきの弓を背負った兵士が言う。
「王子をおぼれさせないように水面を泳いでる。それに、王子の重さで思うように進めないみたいだぞ」
彼の言うように、鯉の速度は妙にゆっくりだった。
それこそ、必死に泳ぐクスフリに追いつかれそうなほど。

「ほんとだ・・・」
「バーンメル殿は気が付いてたんだろう。　どうせ今から翼竜を呼んだところでそれまでに別の岸に着かれてまた逃げられるのがオチだ」
「そうか・・・。　ならばバーンメルを援護するまでだ！　俺も水に入る！　三人着いて来い！　残りは翼竜と連携して、池に動物を近づけるな！　特にさっきの猫には気をつけろよ！　まだ王子と合流する気かもしれん！」
『はっ！』
方針を決めるやいなや、すぐさま行動を開始する近衛兵達。
そんな彼らの動きを背中に感じながら、クスフリは何とかリューヴェンス王子に追いつこうと必死に手足を動かしていた。
「王子ー！　そろそろカンベンしてくださいぃぃぃ！！」
ただでさえ疲労困憊な身体に鞭打つクスフリ。
そんな彼を鯉の背中で眺めながら、リューヴェンス王子はコクコクと頷いていた。
「くしゅふぅぃー、しゅおいあー」
きらりと煌く王子の瞳が、まるで新しいオモチャを手に入れた子供のそれだったことに気が付くものは。
残念ながら周りには誰もいなかったのだった。

二十一話（後書き）

なんとリューヴェンス王子でした
何やってるのかしらこの子は

二十二話

クスフリに近衛兵に発見を伝えられたリューヴェンス王子は、追っ手が迫っているのを察知したのかとてつもない勢いで壁を下り始めた。
近衛兵達もそれは予測の内だったのだろう。
持って来ていた鉤縄を窓の淵にかけると、ためらうことなく垂直降下していった。
良く訓練された近衛兵たちの手際に、感心する計斗。
一方のクスフリは、それを見て下っ端魂に火がついたらしい。
「自分も手伝ってくるっす！」
言うが早いか、クスフリは窓から飛び出し、ロープを伝って壁面を駆け下りていったのだ。
「おお。頑張って来いよ」
テキトウな応援の言葉を投げる計斗。
窓から外をのぞいてみると、リューヴェンス王子が草むらに隠れていたでっかい猫に乗っかって走り回っているのが目に飛び込んできた。
猫は子供一人を乗せているとは思えないほどのスピードで駆け回り、近衛兵達を右往左往させている。
ただでさえ逃げる相手を捕まえると言うのは容易なことではない。
相手が野生動物となれば尚更だろう。
捕まえようと迫ってくる兵士達を踏み台にして華麗に跳躍すると、王子を乗せた猫は城から離れるように走り始めた。
それを追う様に、城の中から複数の兵士が飛び出してきた。
どうやら彼らの足音を聞きつけて逃げ出したらしい。
なかなか賢い猫のようだ。
「いや。もしかしたら王子が猫に指示を出しとるのかもしれんな」
だとしたら、まだまだ捕まえるには時間がかかるだろうな、と、計

斗は思った。
昼間も城壁の上にまで逃げ切った王子のことだ。
恐らくは逃走経路やら手段やらを整えているのだろう。
と成ると、ネタは猫だけではないはずだ。
池に追い詰められたかに見えたリューヴェンス王子は、今度は鯉に乗り換えて逃走を図り始めた。
「おー・・・」
感心したように声を上げる計斗。
流石に予想以上の出来事だったらしい。
「ぎょ、か。　あんなものまで居ると成ると時間がかかるな」
最初はクスフリが来るまで纏うかと思っていた計斗だったが、ほっぽってさっさとエリメラ王女の部屋に行くことにした。
計斗は大方の見た目通り、気が短いのだ。

大きなドアを開けて、最初に目に飛び込んできたのは立派な執務机だった。
エリメラ王女の部屋の前室だ。
廊下からすぐに王女の部屋、と言うのを嫌ってのことだろう。
社長室とかの前に、秘書の人が居る部屋があるあの感じだ。
こういうところはどこの世界も同じなのだな、などと思いながら、計斗はぐるりと部屋の中を見渡した。
板張り床の部屋には窓が一つだけあり、その近くには先ほどの執務机がある。
奥に見える大きな扉が、恐らくはエリメラ王女の部屋につながるものだろう。
そのほかにもう一つドアがあるが、こちらはシンプルなつくりだった。
執務机以外に家具らしいものは一切無い。
それに反比例するように、壁には所狭しと武器がかけられていた。
槍、剣、銃にクロスボウ。

果ては鎖鉄球やら大鎌までと節操の無いラインナップだ。
万が一ここまで敵が侵入してきた際に使う武器なのかもしれないが、あからさまにそれと分かる爆弾っぽいものまで掛かっているのには流石の計斗も若干表情を引きつらせた。
それにしても王女の部屋の前にこんなものを並べておいていいものなのだろうか。
計斗がなんともいえない表情で小首を捻っていると、ドアの開く音が耳に飛び込んできた。
シンプルなつくりのドアから出てきたのは、無表情な青年、ガーランドだ。
計斗の眉尻が、ぐっと吊りあがる。
足音に気が付いて扉を開けたのだろう。
ガーランドは計斗から目を離さないまま後ろ手にドアを閉めると、ゆっくりと立派な扉の方へと歩き始める。
鋭くにらみつける計斗に対して、ガーランドの表情は一切変わらない。
一見何を考えているか分からないが、目線を外さないところから見て計斗を警戒しているのは確かだろう。
そんなガーランドの様子を見ながら、計斗は目を細める。
昼間の出来事が、頭を過ぎった。
ガーランドが振るった剣を交わし、拳を振るったあの瞬間の映像が蘇ってくる。
剣を振りぬいた後を狙った拳だ。
並や普通の相手にならば、確実に捕らえられるはずだった。
それが、紙一重で受けられてしまった。
金属製の盾に思い切り拳を突きたててしまった事による、僅かな痛みが戻ってくる。
もっとも計斗でもなければ、手の骨が折れてもおかしくなかった訳だが。
無意識に握っていた拳に、ちらりと視線を向ける。

もういちど、確かめてみよう。
そう頭の中で思いながら、計斗はガーランドに視線を向けなおす。
瞬間、ガーランドの歩みがぴたりと止まった。
殺気でも感じたのか？
だとしたら、面白い。
我知らず笑顔を作りながら、計斗は後ろ手にドアを押し閉めた。

ドアが閉まる音が背中越しに聞こえた瞬間、計斗は一気にガーランドとの距離を詰にかかる。
わき腹にひきつけていた拳を振り上げ、打ち下ろすようにガーランドの顔面に向け繰り出す。
あまりの速度で肩にかけていた赤ジャージが宙に舞った。
突然の攻撃にも、ガーランドの表情は一切変化しない。
計斗から視線を話さないまま、僅かに後ろに身を引く。
上から叩きつけるような拳はガーランドの身体を捉えることができず、空を切った。
大上段から足元へと拳が抜ければ、当然計斗の体勢も崩れる。
屈んだ様な姿勢になった計斗だったが、間髪居れずに次の攻撃へと移っていた。
視線だけを上げガーランドの位置を確認すると、先ほどとは反対の拳に力を込める。
後ろに下がろうと脚が浮いた瞬間を見定めながら、今度は顎先を狙って拳を繰り出す。
大振りなアッパーのような打撃。
今度は上半身だけをそらして回避する。
顎先を掠める拳を見ながらも、ガーランドの表情はまるで変わらない。
拳を振るいながら体勢を立て直した計斗は、三度目の打撃へと思考を切り替えていた。
飛び込んで言った勢いは、未だに生きている。

コンパクトに繰り出したアッパー気味の拳の勢いで身体を大きく捻り、初撃に使った拳を再び握りなおす。
後ろに下がるだけでかわせる攻撃を何発打ち、本命の一直線の拳を叩き込む。
計斗が得意とする素早い相手対策の連撃だ。
アッパーが頭上まで上がり、勢いが止まる。
三発目を繰り出そうと脚に力を込めた、その刹那。
ガーランドの体が、計斗の目の前から掻き消えた。
一瞬混乱する計斗だったが、すぐにその理由を探り当てる。
消えたように見えたガーランドは、身を屈めるように地面に転がっていたのだ。
「ちっ」
短く舌打ちをし、計斗はすぐに腰を落とし脚に力を込めた。
未だに、最初の勢いが死んでいない。
ここが室内である以上、あまり勢いをつければ壁に激突する羽目になる。
自分の体ごと拳でガーランドを壁に縫い付けるつもりだったが、一人で突っ込めばただの間抜けだ。
脚を突っ張り、地面に手を付いて身体を止める。
靴がガリガリと老化を削る嫌な音がするが、気にしている場合ではないだろう。
どうやら前転していたらしいガーランドは、今は計斗の後ろへと回っていた。
立ち上がろうとするその動きに気が付き、計斗も何とか体勢を立て直す。
背中を向けたまま立ち上がるガーランドを、防御にも攻撃にも移れる構えで睨む計斗。
すぐに何らかの行動を見せると思われたガーランドだったが、計斗のその予測は裏切られる形となった。
ガーランドは背中を計斗に向けたまま、動かなかったのだ。

眉をしかめる計斗を後ろ目にちらりと見ると、そのままスタスタと歩き出した。
「やりかえさんのか？」
構えをとき、腕組みをする計斗。
ガーランドは足を止めると、肩越しに計斗に目を向けた。
コクリ
僅かに首を縦に振る。
「そうか」
思わず苦笑を漏らす計斗。
警戒のされ方から見て、別に実力が無いと思われているわけで無いらしい。
どうやら、本気で攻撃しているわけではないのがばれた様だ。
場所が場所だけに、少し攻めて見せればすぐにその気になってくれると思った計斗だったが、当ては外れたようだ。
「存外喰えない奴だな」
肩をすくめる計斗。
そんな計斗をまるで居に返さないように、一直線にドアへと歩くガーランド。
少しじゃれて、計斗の気が済んだことを察したようだった。
部屋の一番奥の扉に手をかけたところで、ふと、ガーランドは何かを思い出したように振り返った。
「ん？」
その様子に、計斗は不思議そうに視線を向ける。
少し思い出すようなそぶりで上に目をやると、ガーランドはゆっくりと数回口を開け閉めしてから言った。
「エリメラがお前と友達になりたいそうだ」
「・・・お前それ、今しがた襲い掛かってきた相手に言うことか？」
引きつった表情で返す計斗。
しかし、ガーランドは全く意に返さない。
むしろ久しぶりに話した言葉が相手に通じたことに喜び、満足そう

に頷いているのだった。

二十三話

僅かに灯った明りを頼りに、少し破れたスカートにツギを当てていく。
掃除をしている途中、引っ掛けて破いてしまったのだ。
針仕事が得意なエリメラ王女にとってみれば、この程度はあっという間だった。
似た色の布切れを探しては、少しずつ縫い合わせる。
少し大きく破けてしまったので、布が一枚では足りないのだ。
城の中で拾ったものや、着れなくなった服から切り取った布切れをあれこれ並べながら、合うものを選んでいく。
スカートと同じ布が一番いいのだが、なかなか合うものは見つからない。
服から切り取ったものは薄くなっていたり、解れていたりする。
お城で見つけてみたものは、スカートよりも幾分か上等な布だった。
「んー・・・やっぱりこれだと派手かな・・・」
綺麗な赤い布を宝物のように手に取ると、王女はスカートの破れた箇所にそっと当ててみた。
使い込んでところどころ解れたスカートが、ぱっと華やいだように見える。
「うわぁ」
普段地味な色の服ばかり着ている彼女には、その僅かな華やかさも眩しく見えた。
ここにこの布を縫い付けたら、きっときれいになるんだろうな。
そう思いつつも、頭の中のもう一人の自分がささやく。
自分になんか、こんなにきれいな色は似合わない。
こんな上等な布をこんなところに使うなんて、勿体無いし不釣合いだ。
エリメラ王女の表情が曇っていく。

やっぱり、別の布にしよう。
「りゅーちゃんなら、こういうのも似合うのかな・・・？」
弟のリューヴェンス王子は、赤ん坊にもかかわらずエリメラ王女よりもずっと華やかで堂々としている。
姉の欲目を抜きにしても、王族の風格が確かに備わっていた。
何よりも、赤ん坊でもそうと分かるほどにかっこいい顔立ちなのだ。
せめて自分も、もう少しマシな外見で、もっとしっかりとしていれば。
「こういうのも似合うのかなぁ・・・」
もう一度破れたスカートに、赤い布を当ててみる。
ゆっくりと持ち上げて、より近くで眺めてみた。
「えへへ」
それだけで少し幸せな気持ちになって、エリメラは思わず笑みをこぼした。

「なにやっとるんだ一体」
王女の部屋。
の、クローゼットの中で座っているエリメラ王女の姿を見て、計斗は引きつった表情で呟いた。
「いやぁっ！　まぶしいっ！」
扉が開けられて差し込んできた光に目がくらんだのか、まるで借金取りに怯える江戸時代の農家の娘のようなリアクションでクローゼットの奥へと逃げ込むエリメラ王女。
ぶるぶると震えるその姿は、世間一般の方々が王女に持つイメージの片鱗も見られない。
「眩しいとか眩しくないとかじゃなくてだな。　何でそんなところに居るんだ？」
「え？　だ、だってその、なんだか眩しくって。　きれいなお部屋だから、汚したらいけない気がして」
呆れたようにいう計斗に、エリメラ王女はおどおどとした様子で応

える。
「・・・王女はいつもこうなのか？」
なんともいえない複雑な表情でたずねる計斗に、ガーランドはクローゼットの取っ手を持ったまま頷いて見せた。
「と言うかこれどういうことなんだ。　豪華な部屋の中にもう一個ごっそり悲壮感漂う部屋があるぞ」
眉間に皺を寄せながら、計斗は部屋の中とクローゼットの中を見比べた。
王女の部屋はかなり広く取られていて、大きなガラス扉からベランダへと出られるつくりになっていた。
高い天井から吊るされた照明は、どういう原理か分からないが部屋を明るく照らしている。
ソファーやテーブル、そのほかの家具も一目で高価だと分かるような並んでいた。
シンプルな作りながら仕事の丁寧さが伝わってくる類の品々は、使うのをためらわれるほど素晴らしい物ばかりだ。
お姫様と言えばお決まりともいえるような、天蓋付きのベッドもその存在感を放っていた。
そんな部屋の壁面にあるクローゼット。
その中に、エリメラ王女は入っているのだった。
流石王族、とでも言えばいいのだろうか。
クローゼットも一つではなく、大小いくつか設置されている。
一番大きいものは六畳ほどある大きいものらしいのだが、エリメラ王女が居るのは二畳ほど広さのものだった。
そこに掛けられているはずの豪華な服は一着も無く、代わりに古めかしい油式のランプが一つ掛かっていた。
床、と言うか内部には、裁縫箱とちゃぶ台が置いてある。
テーブルなどと言うしゃれた物ではない。
頑固親父のマストアイテム、ちゃぶ台である。
「色々突っ込みたいことはあるが。　何でちゃぶ台だ一体。　剣と

魔法の世界でちゃぶ台があっていいのか」
「ちゃぶ台？　ですか？　これはその、お城のゴミ捨て場にあったのをがーちゃんに持ってきてもらって・・・」
エリメラ王女の言葉に、こくこくと頷くガーランド。
どうやらそうだといいたいらしい。
「拾ってくるな。　拾ってくるな王女として。　もっと良い物があるだろうが部屋の中にいくらでも」
確かに王女の部屋の中には、立派な家具が沢山置いてあった。
クローゼットの中においてあるちゃぶ台よりも数段立派な、似た様なサイズのテーブルもある。
「でも、そんな立派なの、私が使うのはおこがましい気がして・・・！」
「王女がおこがましかったら私は見ることも許されんぞ」
繕っていたスカートを盾のように構える王女に、苦笑交じりで呟く計斗。
あきれを通り越して笑えて来たらしい。
軽く肩をすくめて見せると、身を屈めてクローゼットの中に入っていった。
「へ？！　あ、あの、な、なんっ・・・！」
突然隣に座り込んだ計斗に驚き、頬を真っ赤にして慌て始めるエリメラ王女。
そんな王女の姿が面白いのか、計斗は少しだけ声を出して笑う。
「部屋に招かれたからな」
「いえ、わ、私が言ったのはその、あっちのお部屋のほうで・・・！」
しどろもどろに成りながら、身体を隠すようにスカートを盾にするエリメラ王女。
勿論全身が隠れるわけも無く、真っ赤になった顔を計斗から隠すのが精々だ。
そんな王女を意にも返さず、計斗は自分のジャージの上着を枕にご

ろりと寝転がった。
「ガーランド。　すまん、ドアを閉めてくれ。まぶしい」
ひらひらと手を振りながらの計斗の言葉に、ガーランドをコクリと首を縦に振る。
「ちょ、がーちゃん！　しめないで！　しめないでぇー！」
悲痛な感じの声を出すエリメラ王女。
そんな姿を見ても、ガーランドはまったく表情を変えない。
あけたときと同じようにガチャリ、っと、扉を閉めた。
「が、がーちゃんっ・・・！」
捨てられた子犬のように瞳を潤ませるエリメラ王女。
犬だったらくーんくーんとか鳴く場面だ。
「安心しろ。別に襲ってくやせんからな。　それに、ここの方が話しやすいんだろう？」
かけられた声に、計斗のほうに振り向くエリメラ王女。
怯えの色だけがにじんでいた彼女の顔が、少しずつ落ち着いていく。
計斗が浮かべていた優しげな微笑に釣られて、王女の緊張が徐々に解けてきたのだった。

閉まったクローゼットの扉をじーっと眺めるガーランド。
一切変化しないその表情からは伺えないが、その心中は少しざわついていた。
彼が仕えるエリメラ王女は、恐ろしく人見知りが激しい。
ちょっとした物音ですぐにびびって涙目になる。
貧乏くさい。
それは彼女の欠点でもあるが、美徳でもあるとガーランドは思っていた。
誰にでも本当に分け隔てなく接する王女。
優しく、純朴な彼女を慕う国民はとても多い。

だが、彼女と親しく付き合うものは殆ど居ない。
地位の低いものは恐れ多いと身を引いてしまい、地位が高いものには王女がびびって近づかない。
エリメラ王女の身分も気にせず、王女がびびらない友人が必要だ。
そう、ガーランドは常々思っていた。
思っては居たが、ガーランドは思っていることを表面に出すのが苦手だった。
どのぐらい苦手か具体的に言うと、一年間の発言文字数が原稿用紙一枚に収まるレベルで苦手だった。
苦手とか苦手じゃないとかそれ以前の問題な気もするが。
そんな彼の願いが、今現実になるかもしれない。
あのケイトとか言う奴は妙な奴だが、決して悪いものではない。
きっとエリメラと上手くいくだろう。
そう、ガーランドは確信していた。
自分の手で閉めた扉を、表面上はまったく分からないが、満足そうに眺めるガーランド。
そんな彼の頭には、ある疑問がこびりついていた。

ケイトはなんという動物なのだろう？

どうやら、ケイトを人間として認識していない様子のガーランドだった。

二十四話

「死ぬかと思った・・・」
一人で廊下をとぼとぼと歩きながら、クスフリはため息混じりに呟いた。
壁に張り付いたリューヴェンス王子を見つけてから、約一時間。
何とか王子を捕まえることに成功し、今度こそエリメラ王女の部屋に向かっているところだった。
「まさか、魚から鳥に行くとは・・・」
池の魚に乗り換えたリューヴェンス王子は、その後　鳥・草竜・蛇、そして最後に再び猫に乗り換えて逃げ回った。
捕まりそうに成る度に動物を乗り換え逃亡を図るその姿は、まるで追われるのを楽しんでいるかのようだった。
実際楽しんでいたのだろうが。
ひとしきり遊び終わって満足したらしい王子は、クスフリの手によって捕まった。
捕まったと言うか、正確には王子の方から抱っこしろと言って来た訳なのだが。

大きな木の上にまで追い詰められた王子は、猫の背から空に浮かんだ月を眺めていた。
そのあまりの渋い表情に、その場に居た兵士達があっけにとられていたところ、満足したように頷き自分から木を降りてきたのだ。
こんなに月のきれいな夜にゃ、散歩の一つもしたくなるってもんよ。
とか、そんな感じの妙な幻聴を聞いた気がしたクスフリだった。

何とか王子を部屋に戻し、王子担当の近衛兵達に別れを告げたのが今現在。
昼間からのあれこれとあいまってか、クスフリは凄まじい疲労感に

襲われていた。
久々に泳いだせいか、足首とか腰とかに鈍痛が来ている。
普段から鍛えているクスフリだったが、普段使っていない筋肉をいきなり酷使するのはやはり辛いものがあるらしい。
ずるずると身体を引きずりながらも、ようやく王女の部屋の前にたどり着いた。
痛む身体に鞭打ち居住まいを正すと、ゆっくりとドアをノックする。
中から返事があるのを待とうと、半歩後ろに下がった。
どうぞ、などと声があるかと思っていたが、予想に反して返事は扉が開かれることで返された。
ドアを開いた主は、クスフリをまね居いれるでもなく開けてすぐに背中を向けて部屋の中に戻っていっている。
一瞬動きが止まるクスフリだったが、すぐに気を取り直してドアノブに手をかけた。
「失礼します」
ケイトとは違い、クスフリは王女の部屋の前室のことを知っていた。
侍女やらが控えていると予想していたクスフリだったが、実際はかなりイメージと違うものだった。
室内にある家具らしきものは、執務机が一つのみ。
あと目に入るものはと言えば、壁一面にかけられた武器だけだ。
「うわぁ・・・」
思わず表情を引きつらせるクスフリ。
部屋の異様さもさることながら、それ以上にクスフリを緊張させたのは、ガーランドの存在そのものだった。
城勤めの兵士であるだけに、ガーランドの話は良く耳にしていた。
第一王女に唯一一人だけつけられた専属護衛重騎士ガーランド。
家名を持たない彼は、ただ只管に王女を守ることだけを己の存在意義としているらしい。
実戦を経験する為と言う理由で幼くして前大戦にも参加した彼は、コレまでに其れだけで百人長に出世できるだけの武勲を上げてきた

そうだ。
だが、自分はあくまでエリメラ王女の護衛官であるからと、そういった話はすべて拒否したらしい。
ふと興味がわき、クスフリは壁にかけられた武器の一つに顔を寄せてみる。
一瞬で表情が強張り、よくよく品物を確かめるように目を細めるクスフリ。
「やっぱり・・・」
少し震えた声で、呟く。
クスフリは自分の目の前にあるのが重騎士用の武具であることに気が付き、感動していた。
重騎士とは。
魔法使いの居ないこの国で、唯一単身で複数の敵を殲滅しうる兵種の事を指す。
特殊な加工を施された装甲と武器を携え、飛び交う魔法をものともせず敵陣に切り込み、引き裂く。
己の技量と肉体を頼りに戦うその姿は、まさにクスフリの、いや、この国の兵士達の理想像だ。
壁にかけられている黒みがかった剣は、切れ味は余り良くは無いが岩をも砕く強度がある。
大振りな長弓は、並みの弓兵なら六人がかりでやっと引けるほど強い。
砲身の長い銃は、もはや大砲と言っても差し支えない程大きい。
これらを扱うには、相当の技術を求められる。
そして何より、圧倒的な腕力を要求される。
「本物だ・・・やっぱりガーランド殿は本物の・・・」
武器から顔を離し、改めてガーランドのほうを向き直るクスフリ。
王女の部屋の横で直立不動の体勢のガーランドは、その視線に気が付き首を傾げてみせる。
先ほどまでと変わらない無表情さなのだが、クスフリの目には後光

がさして見えた。
クスフリの真剣なまなざしを受けながら、ガーランドはくりっと首をかしげる。
表情が変わらない分、若干不思議な光景だ。
少しの間そうしていたガーランドだったが、何か思いついたのかクスフリに手招きをして見せた。
「は。なんでしょうか」
慌てて小走りに近寄ってくるクスフリに、ガーランドは身振り手振りでドアに耳を近づけるようにと知らせる。
不思議そうな顔をしながらも、クスフリは言われる？　まま、ドアにぺっとりと耳を押し付けてみた。

「兄貴なんぞいいものじゃないぞ？　五月蝿くてかなわん」
「えー？　でも、ケイトさんのおにいさんなら、きっとかっこいいんですよね？」
「何故私の兄貴ならかっこいいんだ」
「い、いえ！　その、ケイトさんがかっこいいとか、そういうんじゃなくて、ケイトさんはすっごくすてきで、その！」
「まあ、確かに私に可愛いとかは似合わんよな」
「そ、そんなことありませんよっ！　ケイトさんはすっごくかわいいとおもいますっ！」
「お前の方がかわいいぞ？」
「え、ええっ？！」

「・・・あの・・・」
内部から聞こえてきたのは、エリメラ王女と計斗の会話だ。
まさに女の子っぽい会話と言えるだろう。
自分の視線に何か思うことがあって、内部の声を聞かせたのだろう。
そう、クスフリは思っていた。
では、なぜこんな女子な会話を？

困惑気味なクスフリを見て、ガーランドゆっくりと口を開閉させ始める。
何度か確かめるように口を動かしてから、ぼそりと一言を発した。
「ガールズトーク」
「？！」
凍りつくクスフリ。
まあ、確かに内部の会話はガールズトークと言えなくも無い。
しかし、何故自分の視線がそこに行き着くのか、まるで分からなかった。
もしかして内部を聞きたそうにしているように見えたのだろうか。
クスフリ的には尊敬のまなざしを向けたつもりだったのだが。
苦悩するクスフリ。
そんなクスフリの表情を見て、ガーランドは無表情の内心、大変満足していた。
ガーランドはクスフリの視線を、「二人の様子が心配ですね」と読み取ったのだ。
だから、クスフリに内部の音を聞くように促したのである。
ガーランドには理解不能な内容だったが、表情の変化を見る限りクスフリには分かったようだ。
と、ガーランドは思っていた。
ガーランドの意図が分からず悩むクスフリと、クスフリの期待に沿えたと満足するガーランド。
二人の意思疎通はその後も結局かみ合わず、ガーランドだけが一方的に納得する形で続いた。
そんなガーランドの行動に頭を悩ませ、クスフリは結局眠れぬ一晩を過ごしたのだった。

二十五話

深夜の森を、一人の男が大きな背荷物を背負い歩いていた。
後ろに荷物を背負った馬を一頭従えたその男は、月明かりだけを頼り足場の悪い獣道を進む。
背負っている籠や白尽くめの特殊ないでたちから、一目で男が薬師と分かった。
各地を回り、薬になる動植物を仕入売り歩く。
そんな家業であるだけに、人気の無い森を歩くのは消して珍しいことではない。
とは言え、こんな夜更けとなれば話は別だ。
夜の森には危険が多い。
森に親しく、森の中ですごす時間が長い人間ならばこそ、夜の森は避けるのが普通だろう。
ただでさえ歩きにくい獣道を、男は足元も確かめずに歩く。
そもそも、真夜中の森の中ではほんの数センチ先も見えないのが当たり前だ。
にもかかわらず、男は淀みなく森の中を進んでいる。
まるで整備された道を歩くように、それが当たり前だと言うような足取りで歩く男。
まさに一寸先は闇と言った森の中に少し視線を走らせると、男はごくごく小さな声で呟いた。
「囲まれた」
その言葉に僅かに反応を見せたのは、男の後ろを歩く馬だった。
屈むように首を下げ、そっと男との距離をつめる。
「探知には何も映りませぬが」
男以外の人間の声。
馬の口元から発せられたその声は、ごく小さく男の耳にしか届かないものだ。

「おぬしの索敵を誤魔化す程の使い手と言うことよ。　元より某も今しがた気が付いた」
「いかようにして」
「恐らくは己の匂いも足音も魔術で消して居るのだろうが、踏みしめた土にまでは気を取られなんだようだ。　足跡の残らぬ下足を履こうとも、踏みしめて地面から立ち上る物までは消せぬのよ。　微量ゆえ気がつくのに時を労したが。　何。知ると知らぬとでは僅かとて違いが生まれよう」
古めかしい喋り方に反し、男の声は若く、力強さのあるものだった。
薬師というよりも、それはまるで武人のそれのようだ。
「並みのものならばそれにも気が付かぬでしょう。　森の民とはよく言うたものです」
「皮肉を言うな」
苦笑にゆがむ顔を下に向ける薬師の出で立ちの男。
そのときだ。
先ほどの声での警告が、男の耳に入って来た。
「前に三。　術師かと」
その言葉に、男の歩みが止まる。
あわせて、馬もゆっくりと前に進む脚を止めた。
「包囲を終えて隠し立てする意味もなくなったか」
「囲んだ後であるならば、陽動でしょうか」
「ならば・・・」
男の口の端がぐっと吊りあがる。
素早い動作で自分の肩口を掴むと、一気に前に引き抜いた。
「食い破るまでっ！！」
白い薬師の衣服の下から現れたのは、真っ赤な軽鎧に身を包んだ若い武将の姿だった。
恐ろしく古典的ではあるが、変装をといたのだ。
それに呼応するように、馬の姿にも変化が起こる。
ぐにゃりとその輪郭がゆがんだように見えた次の瞬間、その姿は馬

から人へと変化していた。
目元だけを残し、頭から口元まですべてを黒い布で覆い隠し、ゆったりとしたローブのようなものを纏っていた。
その衣服には様々な文字のようなものの羅列が施されている。
見るものが見れば一目で分かるそれは、高度な魔法を発動させるために必要な魔方陣だった。
突然変装を説いた二人の男に、周りを取り囲んでいたものたちに動揺が走る。
周りを取り囲んでいるのは悟られないはず。
まずは少人数をわざと気が付かせて出方を伺おう。
そう考えていた。
進むのを止め警戒をはじめるだろう程度に思っていたにもかかわらず、いきなりの臨戦態勢だ。
周りを囲んだ術氏達の指揮官の脳裏に、ある恐れが浮かぶ。
まさか、気が付かれたのか。
しかし、自分達の隠密技術への自信が、それを否定する。
指揮官は男達への対処に、一瞬の迷いを見せた。
その迷いを、男達は見逃さしてはくれない。
「若、上へ！　焼き払います！」
「応よ！」
若と呼ばれた軽鎧の男は、背中に大荷物を背負ったまま一気に跳躍。
自らの身長の倍以上の高さを助走もつけずに跳ね上がると、そのまま近くの木に足をかけてさらに上へ上へと登っていった。
それを確かめる暇も有らばこそ。
ローブに身を包んだ男は大きく両足を開き足場を固めると、目の前で両手を打ち合わせる。
「合獣放波」
刹那、男の両腕と頭の輪郭がぐにゃりと歪んだ。
瞬く間に腕と頭はその姿を変えていき、まったく別の生物の“頭”になった。

蛇。
獅子。
山羊。
両腕と頭が変化して出来た三種類別々の動物の頭は、それぞれ別々の方向を睨みつけている。
異形。
まさにそうとしかたとえようの無いその姿を見たとき取り囲んでいた魔術師の一人は隠れているのも忘れて悲鳴を上げた。
恐ろしさで、では無い。
その異形の意味する物のせいで、だ。
みっつの頭はそれぞれの口を割けんばかりに開くと、一斉に鳴き声をあげ始めた。
だが、その喉の奥から迸ったのは、声ではなく、破壊力を持った強力な魔法だった。
蛇の口から放たれたのは、黒い霧のような強力な衝撃波。
獅子の口から放たれたのは、膨大な熱量の篭った、複数の火球。
山羊の口から放たれたのは、青白く輝く魔力で出来た矢。
ばら撒かれた強力なそれたの魔法は、四方八方を見境なく破壊していった。
悲鳴を上げる暇があればマシなほうで、中には何が起こったのか理解する前に絶命するものさえ居る。
物の数秒で、周囲十数メートルを消し飛ばした異形の主は、膝からがくりと地面に崩れ落ちた。
苦しむような荒い吐息を吐き出す獅子の頭は、いつの間にか人間のそれへと変わっている。
両手のほうの変化も解け、今は完全に人の姿へと代わっていた。
巻き上がる熱風にあおられながらも、男は息を整えながら立ち上がる。
その横に上空から落下してきたのは、先ほど木の上へと駆け上っていった軽鎧の男だ。

「三種の魔獣の頭を再生しての全方位魔道！　いつもながら見事の一言だな！」
「恐悦至極。　成れどコレで暫くは大魔法は使えませなんだ」
「なぁに！　ここから先は俺の出番よ！　残ったものは全てこの槍で叩き伏せて押しとおるのみ！」
そういいながら、軽鎧の男は手にした槍を旋回させる。
朱に塗られた柄に重々しい鎖の巻きついたそれをまるでバトンのように振り回しながら、軽鎧の男は地面を蹴る。
「前は俺が切り開く！　逸れぬように急いて駆けよ！」
「御意に！」
まるで自分達を鼓舞するように声をあげ、駆け始める二人の男。
それは、計斗が召喚された国の、国境間近での出来事だった。

二十六話

砂だらけに成った研究室を眺め、ガルド老人は深い深いため息を吐き出した。
計斗を召喚したときは舞い上がっていたのと暗かったので気が付かなかったが、砂は４～５ミリ程度の厚さに積もっている。
こんなじゃりじゃりした空間ではまともに研究も出来ない。
と、言うわけで。
ガルド老人は老人特有のスキル、早起きを発動して日も上がりきらないうちから研究室内の掃き掃除にいそしんでいた。
室内は窓が無いため、暗いことこの上ない。
そのままではろくすっぽ掃除もできないということで、屋根代わりの鉄板板は引っぺがされている。
ガルド老人一人ではとても無理だったので、近くを通りがかった翼竜乗りに手伝ってもらった。
メンドイからやだ、と、断られそうに成ったが。
「老い先短い老人の頼みを断るだなんて、なんて非人道的な兵士なんじゃ・・・！　こうやってわしは社会の片隅で誰にも相手にされずに孤独死して行くに違いない・・・！　いいんじゃいいんじゃ皆わしをかまってくれない若者が悪いんじゃ。　人としての良識が最近の若者には欠如しとるんじゃ・・・！」
とか何とかそんなことを適当に言って泣き落として手伝ってもらった。
普段はまだ若いとかいってるくせに、突然か弱い老人に成ることにかけては定評のあるガルド老人だった。
部屋の中も明るくなり、早速履き掃除を始めたガルド老人。
そこそこの広さのある部屋な分、砂の量も膨大だ。
いくらほうきを動かしても、一向に減っている実感がわかない。
スコップで掻き出そうともおもったが、そんな事をしたら腰をやっ

てしまうだろう。
老人の体と言うのはとても繊細なのだ。
「まー、きながにいくしかないかのぉー」
ほうきに手を付いて、ため息を吐き出すガルド老人。
そんな彼に、声をかけるものが居た。
「せんせー！」
大きなスコップを担いで森の中を抜けてくる、ラロだ。
歩きにくそうなローブ姿にもかかわらず、上手く足場を選びながら元気に研究室に向かって歩いてくる。
「おー。　なんじゃー、はやいのぉー。　若いんじゃからいっくら寝ても寝たりんじゃろに。　昼ごろえっちらおっちら来ていいっていっとるのに」
「そんなわけに行きませんよ！　先生はこんなに朝早くからがんばってるのに！」
「わしゃ歳のせいで寝てられんからおきとるだけなんじゃけどねぇー」
なぜか胸を張って笑うガルド老人。
そんなリアクションに慣れっこなのか、ラロは特に何も気にした様子もなく研究室の中に入っていく。
砂を取り払う為にドアも取り払ったので、研究室と言う言葉には似つかわしくないほど開放的な空間になっている。
「スコップでかきだすのかのう。　わしゃ肉体的なアレでパスじゃけど」
「ええ。コッチの方が早いと思いますから。　でも、本当にものの見事に砂だらけですね」
「砂っつーか、石畳が削れて出来たカスっぽいんじゃけどね」
言いながら、ガルド老人は床に散らばる砂を手で掴み上げた。
床の石材と同じ色合いの砂は、一見してかなり粒子が細かいことが分かる。
「何がどうしてこんなことに成ったんでしょうね？」

「さっぱりまるっきしわからんのぉー。　なんなんじゃうね。　もう今あの本図書館においたやつとか超殴りたいもん。わし」
要するにこうなったのは自分のせいではなく、穴だらけの本を置いておいた奴のせいだといいたいらしい。
恐ろしい責任転嫁だ。
「ほんとに砂まみれですよねー・・・」
ガルド老人が訳の分からないことを言い出すのはある程度いつものことなので、もうラロ的には流す方向で行くらしい。
地面に膝を付き、ラロは手で砂を掻き分けてみた。
どの程度砂が積もっているのか、確認してみるためだ。
意外に深い砂を払い、なんとか床面を露出させてみる。
「うわ。なんだこれ」
「ん？　どうしたんじゃね？」
思わずといった感じで呟いたラロの声に、ガルド老人はその手元を覗き込んだ。
ラロが露出させた石畳の表面はまるで磨きぬいたかのようにつるつるとしている。
「あー。　これのぉー。　なんでこんなきれいなんじゃろーなぁー」
「削られたって言うよりも、磨かれたって感じですね」
言いながらも、ラロはさらに範囲を広げて砂を？き分けていく。
すると、その端になにやらへこんだ部分を見つけることが出来た。
ガルド老人とラロは顔を見合わせると、二人で地面にしゃがみこんでせっせと砂を掻き分け始めた。
範囲を広げて行くうち、地面のへこみの正体が徐々に分かってきた。
人の手によって削られたように鋭角に、人工物としか思えない曲線を描いて削られた大きなへこみ。
その形状は間違いなく、円の一部と、文字の羅列だった。
「これ、あの魔方陣の一部ですよ・・・！」
「みたいじゃのう・・・消えたわけじゃなくて、はっきりとした形状になって現れたって事なんじゃろか」

ガルド老人の表情が険しくなっていく。
どうやら砂になって消えたとおもわれていた魔方陣は、石の表面を削り取ることでより明確な形で実体化したようだったのだ。
かなり砂の量が多かったのと、周りが暗かったのでよく認識できなかったらしい。
今は屋根を取り払っているので、それが上手いこと見て取れるようになったと言うことなのだろう。
「コレが本当に魔方陣なのか確かめてみる必要があるのう」
「そうときまったら、早く砂をかい出さないとですね！」
「そのとーりじゃ！　よっしゃー！　なんかこー、きあいがはいってきたのう！」
俄然張り切りだすガルド老人。
ラロが地面においていたスコップを手に取ると、ぶんぶんと凄まじい勢いで振り回し始める。
「昔取った杵柄じゃぁー！　わしのステキな体力を見せ付けてくれるわぁー！　まだまだわしはわかいんじゃくらぁー！」
都合のいいときだけか弱い老人になる男、ガルド老人。
彼の実際の体力は、まだまだ若いものには負けていなかったりするのだった。

二十七話

クロスボウから放たれた訓練用のゴム矢は、クスフリの頬を掠めながら後方に飛んでいった。
いくら非致死性のゴム矢とは言え、破壊力は十分。
まともに喰らえばヘビー級のボクサーのパンチ並の威力がある。
そんなものをにやにや笑いながら顔を狙ってぶっ放してくるクラリッツに恐ろしさを感じながらも、クスフリはためらわず間合いを詰めにかかった。
クロスボウは打つ技術や筋力、発射体勢を問わない代わりに、装填に時間が掛かる武器だ。
威力自体は脅威だが、矢が装填されていなければ怖いことは無い。
クラリッツの懐に飛び込んだクスフリは、短槍を構えた両手に力を込めた。
石突きと槍頭近くを握り、体の中心を狙って突き出す。
後ろに飛び退きながらそれを回避したクラリッツに、クスフリはさらに踏み込みながらの槍撃を仕掛ける。
普通ならば小回りの効かない槍だが、短い槍の両先端を握っていることでその欠点を補っていた。
リーチの長さは生かせなくなるが、今はそれよりも手数と正確さを選んだのだ。
突き出した槍を、今度は顎先を狙って振り上げる。
頭を後ろに仰け反らせることで、クラリッツはコレを避けた。
このまま一気に押し切ろうと槍をもつ手を握りなおすクスフリっだったが、背筋に走った悪寒に思わず後ろに飛び退く。
数瞬後、クスフリの胴体があったであろう場所を、クラリッツが手に握った矢先が通り過ぎる。
矢とはいっても、その先端についているのは立派な刃物だ。
素手で扱っても立派な凶器に成りうる。

無理やり飛び退いたので体勢が崩れ、クスフリはたたらを踏む。
普通ならばこのスキに攻撃に移るところだが、クラリッツの武装はクロスボウのみ。
矢を片手に攻撃するのは難しいようで、クスフリに追撃をかけることはなかった。
代わりに、その数秒の間に弦を引き上げ矢をセットする。
普通なら両手で引くハリの強い弦なのだが、クラリッツはそれを片手でやってのけた。
その尋常ではない腕力に、クスフリの表情が引きつる。
バックステップを踏みながら、片手でクロスボウを構えるクラリッツ。
未だに体勢の整わないクスフリに向け、クラリッツは躊躇なく引き金を引く。
それを確認する間も無く、クスフリは思い切り横に飛び退いた。
足場も固まっておらず重心も崩れていたせいで、飛び退くと言うより頭から地面に突っ込んでいくような状態だ。
どこに矢を放たれるかも分からないなか殆どカンだけでの行動だったが、クロスボウ相手にはそのぐらい素早く動かなければ回避は不可能だろう。
槍を持って地面を転がるのは普通なら難しいだろうが、クスフリの短槍は自身の身長よりも短いもので、さして障害にはならない。
クラリッツの並外れた速射が、クスフリには幸いした。
クスフリの身体を掠めた矢は、そのまま地面に突き刺さる。
必死に手足を突っ張って地面に這い蹲り、膝を突いて立ち上がるクスフリ。
受身を仕損じたのか、頬には軽い擦り傷が出来ている。
なんとか顔を持ち上げ、クラリッツのほうに顔を向けるクスフリ。
目に飛び込んできたのは、再び弦を引こうとしているクラリッツの姿だった。
二人の距離は、ちょうど一歩間合い。

踏み込みながら槍を突き出せば一瞬で届く間合いだ。
地面に膝まづいた今の状態からではほんの数瞬遅れが出るだろう。
クラリッツの矢をつがえる速度を考えると、今から攻撃に転じてもぎりぎりのタイミングだ。
博打に近いこういう展開のとき、クスフリは意外にも大胆に行動してみるタイプの人間だった。
片手を地面につき、一気に飛び出そうと脚に力を込めるクスフリ。
その様子を見たクラリッツは、すぐにクスフリの考えを察したのだろう。
口の端がぐっと吊りあがる。

「きゃー。　わたしのためにあらそわないでー」

突然響いた気の無い声に、クスフリとクラリッツの体の力が一気にすっぽ抜けた。
クスフリは顔面から地面にスライディングし、クラリッツは弦を引っ掛け損ねてクロスボウを自分のスネに強打。
「のあぁぁぁあああ！！！」
「ひぎゃぁぁぁあああ！！」
それぞれに悲痛な声をあげ、裂傷箇所と強打箇所を抱えて地面をのた打ち回る。
全身で痛さを表現する二人をまじまじと眺めながら、気の抜けた声の主、計斗は不満そうに鼻を鳴らした。
「何しとるんだ二人して」
「ケイトさんが突然意味不明なこというからっすよっ？！」
「乙女なら一度は言ってみたい台詞だろうが」
「客人にゃー似あわねぇーからなぁー。　ビジュアル的に」
のろのろと緩慢な動きで立ち上がるクスフリとクラリッツ。
計斗はそんな二人を尻目に斜め四十五度の方向に顔を向け、乙女と言うよりはむしろ男らしい表情で何事か納得したようにうなづいて

いた。
三人が居るのは、王城内の中庭に作られた兵士の訓練施設だった。
目覚めに身体を動かそうとここにやってきたクスフリと計斗は、どういうわけか待ち構えていたクラリッツと遭遇。
「俺をたおしてからこのさきにいけぇー！」
と言う意味不明な組み手稽古の誘いに、クスフリが乗ることになったのだ。
「大体なんで朝っぱらから組み手なんだ？」
「いやぁー！　くっすぃーってなかなかつえるって聞いてよぉー！　試してみたくなったわけよぉー！」
スネをさすりながら豪快に笑うクラリッツ。
「一応俺らも兵隊だからよぉー！　訓練は大事なんだよなぁー！」
「日々これ訓練か。　大変だな」
感心したように頷く計斗。
そんな計斗に、クスフリは驚いたような顔を向ける。
「あれ？　計斗さんも訓練とかしないんすか？　アレだけ動けるのに」
「私は夜行性でな。喧嘩もロードワークももっぱら夜だ。　朝は昼過ぎまで大体寝ている」
「・・・不健康っすね」
なぜか自信満々な様子で言う計斗に、なんとなく脱力するクスフリ。
こうして、計斗の異世界での二日目の朝が幕を開けたのだった。

二十八話

エリメラ王女の部屋の前室で、クスフリと計斗は地図を挟んで向かい合って座っていた。
可愛らしいデフォルメされた挿絵などが入れられているその地図は、王城を中心とした王都の観光地図だ。
二頭身のイメージキャラクターらしき生き物と共に描かれた様々な土地の絵を、計斗は至極真剣なまなざしで見つめていた。
胡坐をかいて腕を組み、眼光鋭く地図を睨みつけるその姿は、さながら戦国武将のようだ。
「ていうかどこ襲うきなんすか。ムチャクチャ目ぇーこわいんすけど」
「襲わん。　この世界のことを知っておかねばならんだろ。　情報は宝だからな。　そもそも襲うってなんだ。野生動物か私は」
似たようなもんだとおもうんすけど。
その言葉を住んでのところで飲み込んだクスフリは、始めて自分で自分をほめてあげたくなったと言う。
「しかし、言葉は分かるけど文字は読めないとか言うパターンのアレかと思っていたんだが。しっかり読めるな文字も。地図を見るのにもまったく不自由せんぞ」
「ああ。言語が違うんでしたっけ？　いいじゃないっすか。便利で」
「言葉が分かるのに文字が読めないなんてなんて不便なんだ、覚え直しじゃないかアクションができんだろうが」
「なんすかその無意味なアクション」
真顔でいう計斗に、本気なのか冗談なのか図りかねるクスフリ。
実際、この国で使われている文字は発音ごとに文字があてがわれているパターンで、言葉が話せて一音ごとに当てはまる文字が分かれば文章も問題なく読めた。
言葉と同時に文字表も頭に入っていたらしく、計斗は用意してもら

った地図を難なく読むことが出来る。
「まさかこの歳で社会化見学を自分で計画することにあるとはおもわなんだ。　とりあえずアレか。兵器工場でも見に行くか」
「なんでいきなりそこに行くんすか・・・！」
顔を引きつらせるクスフリに、計斗は至極真面目そうな表情で顔を向ける。
「技術レベルが分かればいろいろ分かることもあるだろうが。幸いこの国は私の世界と同じような技術で栄えとる様だしな。　私の知識が役に立つこともあるかもしれんだろ。そういうのは早いうちにやったほうがいい」
「はぁ。そんなもんなんすかね？」
よく分からないと言った様子で首をかしげるクスフリ。
計斗は顎に手をやると、言葉を選ぶようにしながら言う。
「この世界の技術レベルが分からなければ、私の世界の知識がどの程度仕えるか分からんからな。　たとえば、そうだな。ガルド老に魔法先進国の最新の魔法陣などを見せても多分理解できないのと同じ感じだろうな」
「基礎がないと応用は出来ないってことっすね」
ガルド老人には失礼かもしれないが、分かりやすいたとえに納得のクスフリだった。
「そんなわけで今日は兵器工場に行く。案内してもらえるか？」
「大丈夫っすよ。　自分、工場とかの警備にも回されることありましたし」
「・・・お前色々まわっとるんだな」
「下っ端なんで」
なんとなく可愛そうなものを見る目を向けられ、苦笑いするクスフリ。
「どうでもいいんだが。なんでその座り方なんだ・・・？」
ついでと言った感じでたずねる計斗。
「へ？　なにがっすか？」

不思議そうな顔をするクスフリ。
彼は今、両膝を抱え込んで座る、所謂「体育座り」状態だった。
大の男が体育座りをしている絵というのは、それはそれでなかなかクルものがある。
「いや。別にクスフリがそれでいいならいいんだが」
「へ？」
妙にきっちりとした体育座り姿のクスフリに、まともに視線を向けられなくなった計斗だった。

城を出て、街中を歩くことしばし。
レンガ製の大きな煙突が計斗とクスフリの視界に入って来た。
黒っぽい煙が立ち上るそこが、二人の目的地だ。
「兵器工場というか、試作武器を作るトコロなんすよ。　工場長が変わった人で、年がら年中色んな武器作っちゃ壊してるんすよね」
「試作武器か。　なんか厄介そうだな。　どんな人物なんだ工場長と言うのは」
歩きながらの計斗の質問に、クスフリは思い出すように両腕を組んで唸り声を上げる。
「なんか、ガルドさんと大体同年代なんすけど。　タイプがまた違うって言うか」
「ご老体と同じ則のが何人も居たら大変だろう。　色々爆破しそうだぞ」
二人の頭に、魔法ではなく武器とかの実験に精を出すガルド老の想像図が浮かび上がった。
「コレとコレ混ぜたら爆発とかするんじゃろーなぁー。　大爆発じゃろーなぁー。　・・・いってみるか・・・！」

「・・・だめっすね」
「駄目だな」
二人とも至極真剣な顔で確認しあう。
いつもなら面白がるところなのだが、計斗も刹那的な行動の被害者であるだけに洒落にならない。
出来るからやってみたい。
作れるなら作ってみたい。
ああいうタイプがとんでもない生物兵器とか破壊兵器とかを作るんだろうな、と、おもう計斗だった。
「で、その工場長と言うのはどんな人物なんだ？」
「えーっと、そうっすねぇー。　こう、職人気質な人で。　どっちかって言うと、町工場の親方みたいな人なんすけど・・・ん？」

パーン

突然響いた破裂音に、クスフリと計斗は顔を見合わせた。
続けざま響いてきたのは、若い男のものらしき怒鳴り声だ。
「てめぇくそじじぃ！！　死ぬぞ！　ぜってぇ死ぬぞそれ！」
「当たり前だ！　あたったら死ぬに決まってんだろボケカス！　こいつぁ重騎士用の大筒だぞ！」
「あほかぁぁぁ！！　じゃあそんなもん人に向かって撃つんじゃねぇよ！　何考えてんだ！　モウロクしてんじゃねぇ！」
「新装備のテストしとるんじゃ！　いいから黙って頭にりんごのせとけ！」
「なにそれ？！　俺今頭にりんごのせてるの？！　りんごのせてるの俺？！」
声の感じからして、離れたところでの言い合いなのは間違いないだろう。
それでも一語一句掻ける事無く耳に届くと言うことは、よほど大きな声で叫んでいるに違いない。

言葉の内容に小首を傾げつつも、計斗はクスフリのほうに顔を向けた。
「・・・あー・・・」
クスフリは表情をゆがめ、低い唸り声を上げていた。
「アレか」
「多分そうっす」
ものすごく言いにくそうにゆっくり言葉を吐き出すクスフリ。
計斗は軽く肩をすくめると、声のするほうにすたすたと歩き始めた。
勿論、声の主達の惨状を確認するためだ。
「ウイリアム・テル状態なんだろうなやはり」
「なんすかそれ」
世界が違うだけに、歴史的なエピソードに基づく単語は通じにくいらしい。
計斗が身振り手振りでどういうものなのか言おうとしたところで、声の主達を発見できた。
２m程度の生垣の向こうに、なにやら動くものを確認できたのだ。
よく手入れされているらしい四角いそれに顔を突っ込み、向こう側を確認しようとする計斗。
「ちょっ、すぐそこに門みえるじゃないっすか！」
「そこまで行くのが面倒くさい」
慌てるクスフリを一言でぶったぎる計斗。
そんな計斗の目に飛び込んできた光景は、予想とは少し違っていた。
「なんだこれ！　うごけねぇぞ！　どうなってんだコレ！！」
丸太にロープでがんじがらめに固定されて、叫びまくっている少女。
少女が縛られている丸太の上に立ち、中腰で丁度少女の頭上あたりで大きな盾を構える青年。
そんな彼らに、身の丈ほどもありそうな巨大な銃を向ける筋肉隆々の白髪の老人。
縛られている少女が暴れるたびに丸太が揺れるらしく、盾を構えている青年の体がぐらぐらと揺れる。

「動くな！　狙いが定まらんじゃろがい！」
「定まらせてたまるかあほ！！　中止だ中止！！　早く解け！」
やいのやいのと言い合う少女と老人。
そんな二人もどこ吹く風と、丸太の上で真剣にバランスをとる青年。
「どうっすか？　ウイリアム・テルとか言うのの感じっすか？」
「・・・いや。　予想の斜め上を行った感じだな」
顔を引き抜いてすぐのクスフリの質問に、なんとも言いようの無い微妙に引きつった表情で答える計斗だった。

二十八話（後書き）

久々の投稿です
人の名前を相変わらず覚えてませんでした
表つくらないと・・・

二十九話

「ひぃぃぃめぇぇぇさぁぁぁむあぁぁぁ！！」
計斗が居る国と隣の国の境界線あたりの森で、そんな声が響き渡った。
声の主は真っ赤な軽鎧を着込んだ若い武者だ。
手に持って揺さぶっているのは、旅の薬売り等が担いでいそうな薬箱だった。
小さな鍵の付いている引き出しが沢山付いた、背負えるサイズのたんすだと思っていいだろう。
周りは深い森の中といった感じで、人が通りやすいような道は一切無い。
朽ちて倒れた木や草が地面を覆い、背に高い木がうっそうと生い茂っていた。
そんな中、見た目的には武将っぽい男性が薬箱を抱えて、
「姫様ぁぁぁ！！！　お気を！　おきをたしかにぃぃぃ！！」
と、叫んでいる。
奇妙極まりない。
「若。落ち着いてください」
幸い、近くにツッコミを入れてくれる人物が居た。
真っ黒な布とローブで全身を覆ったその人物は、唯一露出した目を若武者に向けている。
声色から男性だろうと推測は出来るが、目以外の身体的特徴がまったくつかめない為それも確かとはいえない。
「落ち着けだと？！　声をお掛けしても姫様がお答えになられぬのだぞ！」
「背負子の蓋が閉まったままに御座いますれば。若の大声で姫様の声も掻き消えているのかと」
噛み付かんばかりの勢いの若武者に、ローブの男は落ち着いた様子

で返す。
若武者は一瞬怪訝な表情を見せるが、すぐに薬箱に目を戻し頷く。
「それもそうよな。　そもそも身を隠すため気配も消すよう作っておるのだしな」
「御意に」
若武者は掴み上げていた薬箱を地面に下ろすと、表面についている鍵をいくつか外し始めた。
一番下の引き出しと、一番上の引き出しの取っ手に手をかけ、ぐいっと引っ張る。
どうやら引き出しに見えたのは、見せ掛けだけだったらしい。
薬箱の表面全てが、カタリと音を立てて外れる。
中身は仕切りの無い空洞になっていて、一人の少女が納まっていた。
簡素だが、見て分かるほどに高級な生地で仕立てた衣服。
白く透き通るような白い肌に、細く華奢な指。
まだ5～6歳の少女ではあったが、美しいと言って差し支えない容姿。
姫様、と言う言葉がコレほどしっくりと来る少女も珍しいだろう。
若武者に姫様と呼ばれたその少女は、気分が悪いのか少し顔をしかめて口元を押さえていた。
その様子に血相を変えたのは、勿論若武者だ。
「ひ、姫様ぁぁぁ！！　お加減が優れぬのですか？！　よもや毒！　毒で御座いまするかぁぁぁ！！　解毒！　薬と魔術の用意をいそげぇぇぇ！！」
わたわたと足踏みをする若武者。
なぜか手に槍を持って四方八方に向けているが、恐らくは混乱している為だろう。
「大丈夫です。　すこし気分が悪くなっただけですから」
箱から手を伸ばした少女に裾をつかまれ、動きが止まる若武者。
声を駆けられた落ち着いたのか、はっとした顔で少女の方を振り返る。

「恐らく箱の中で揺られてお酔いになられたのでしょう。　暫しお休みになられれば落ち着かれるかと」
ローブの男の言葉に納得したのか、若武者はコクコクと首を縦に振った。
「そ、そうか！　いや、さもあらん、か。　ここまで急いて駆けて来たからな」
若武者は苦虫を噛み潰したような表情になり、少女の前に片膝をついて頭を下げる。
「申し訳御座いませぬ。　某が不甲斐無いばかりに姫様には要らぬご苦労を・・・。　城を出て早五日。　襲撃を受けては逃げての繰り返し。　知恵のある者であれば戦わずして逃げ遂せる術を思いつくのでしょうが、某は戦うことしか知らぬ無骨者。　不甲斐無い・・・！　情けない限りに御座います！」
歯を食いしばり肩を震わせる若武者。
少し気分が落ち着いたのだろう。
少女は箱から出て若武者に近づくと、その肩にそっと手を置いた。
「顔を上げてください。　貴方方の武が無ければ、私は今頃牢の中。　いえ、首を跳ねられていたやもしれません」
実際、若武者とローブの男が居なければ、ここまで無事来られなかっただろう。
「私にはまだしなければならない事があります。　まだ死ぬわけにも行きません。　今暫し貴方達の力、私に貸してください」
顔を上げた若武者に、少女はそっと微笑みかける。
その様子に感極まったのか、若武者は肩を震わせ滝のように涙を流す。
少女の手をそっと自分の肩から離すと、傍らに突き刺していた槍を引き抜く。
「分かり申した・・・！　主君に必要とされるは武人の誉れ！　この“一本角”ハインケル・クライマス、この身引き裂け焼けつき様とも！　必ずや御本懐を遂げられるまで我が武振るいてみせましょ

うぞぉぉぉ！！！」
獣の咆哮にも似たその声に、大気が揺れ木々が揺れる。
裂帛の気合とはまさにこの事だろう。
槍を構えて声を張る若武者に、ローブの男は静かに声をかける。
「若、お気持ちは分かりますがあまり声を上げられては我らの位置を悟られますゆえに」
「お、おお！　そうであった！　気づかれたか？！」
焦って槍を構える若武者、ハインケル。
「いえ。　感知には何も。　周囲にも警戒網を敷いておりますれば」
ゆっくりと上げられたローブの男の腕からは、いくつもの細い糸が四方八方へと伸びていた。
木々の間を縫うように伸びたそれは、辺り一体をくもの巣のように張り巡らされた魔法で作られた糸だ。
「幾重にも感知は重ねておりますれば。　今の所は安全かと」
ローブの男の言葉に、ハインケルはほっとした表情で槍を下ろす。
「そうであったな。　いかんいかん、どうにも気が立っているようだ。　今は姫様にお休み頂くのが第一！　まだまだ先は長いのだからな！　さあ、姫様！　ご存分にお休みくだされ！！」
握りこぶしを作って叫ぶハインケル。
「若、そう力まれては逆にお休みになりにくいかと」
「お、おう！　それもそうだな！」
ハインケルとローブの男のやり取りに、少女はなんとも言えない表情で苦笑を漏らした。

「ラックギッシの貴族が反乱起こしたわけじゃよ。　で、王様をぬっころしたと」
屋根の空いた研究室でお茶をしばきながら、ガルド老人は、まあ要するに、と続けた。

「お家騒動って奴じゃな」
「へー」
やはりお茶をしばきながら、ラロはガルド老人の言葉にこくこくと頷いた。
ちなみに、ラックギッシとは隣国、今問題が起きている国の名前だ。
「もともとこの貴族ってのが王族の血筋なんだそうでの。　王様と王位争奪でさんざ争って負けたそうなんじゃよね」
「それで今回、反乱を起こして王様を殺して、国を奪おうとしたんですね？」
「そうそう。つっても所詮反逆者じゃからね。　王族が戦力を立て直してきたらやばいんじゃよ。　大体うちの国でも王族側が手伝ってくれって言ってきたら幾らでも兵隊出すんじゃろうし」
隣国で反逆があったなどの場合、反逆者サイドによほどの理由が無い限り王族サイドに肩入れするのが一般的だ。
よそはよそ、うちはウチなどといいたいところではあるが、国が荒れれば難民などの問題が出てくる。
戦争を仕掛けたのでもないのに難民がわんさと押し寄せてくれば国費を圧迫するし、何よりも真横でどんぱちやられれば交易などにも支障が出てくる。
治安維持だって大変だ。
お隣には元気で居てもらうのが一番、と言うわけだ。
「お隣のお姫様って、いまうちの国に向かってるんですよね？」
「そうそう。　お供連れて亡命中じゃねぇー」
お姫様。
ハインケルとローブの男に守られた、あの少女のことだ。
「とりあえずこっちに逃げ込んで臨時政府作って、兵隊整えて国を取り戻す形になるんじゃろーなぁー」
「そうなる前に、お姫様を捕まえて殺しちゃいたいって言うのか、貴族側の思惑なんでしょうね」
「そりゃそーじゃろーねぇー。　よっぽど王族が悪くて反乱が起こ

ったとかじゃないし、今回。　各国も王族びいきじゃし」
逆に言えば、姫が捕まって殺されてしまえば、反逆者サイドを討ち取ろうとするものは殆ど居なくなると言うことだ。
隣が反逆者政権だろうが、戦争起こしてまで倒す必要は無いというのが一般的だろう。
相手が盗人だろうが、コッチに累が及ばなければ交易も隣人関係も成立するのが世の中だ。
「無事にこの国に来られるといいですねー」
「そーじゃねぇー」
気のない感じで話しながら、二人はずずーっとお茶を啜った。
「それよりも早くこの部屋の砂どうにかしましょうよ」
「もうワシもお年寄りなんじゃし体力続かんのじゃよね・・・くっすぃーにでも押し付けようかのう」
まだまだ砂に埋もれる床に目を落とし、ガルド老人は疲れきった様なため息を吐くのだった。

第三十話

「おー。　お前さんが異世界から来たって言うお嬢さんか。　えらい目にあったのぉー。　っつか、合ってるっつったほうがいいのか」
傍らの地面に固定された巨大な銃に肘を付き、白髪の老人は顔をしかめながら言った。
計斗たちが今いるのは、兵器工場の実験場だった。
さっき計斗が顔を突っ込んでいた生垣の向こう側に当たるこの場所は、剣や盾などの耐久実験などをする場所らしい。
少し歩いたところにある生垣の切れ目から中に入り、計斗とクスフリは白髪の老人、工場長の前に立っていた。
どうも計斗の話は至る所に知れ渡っているらしく、すんなりと状況を受け入れてもらえた。
「貴重な経験が出来ていると思っているがな。　実際したくて出来るものでもなかなか無いだろう」
深刻そうな表情の工場長に対し、計斗はけろっとした様子で応える。
何しろ計斗はこの状況を楽しんでさえいるのだから。
「確かにそうかもしれんがのう。　まあ、ガルドのくそじじぃとカロルコ中将が後見につくようじゃしのぉ」
一応二人とも国の要人だったりする。
カロルコに至っては、王様の側近の一人なのだ。
「当面の心配は無いんじゃろうが」
そういいながらも、工場長の表情はいまださえない。
「それよりも工場長。さっきから気になっていることがあるんだが」
「ん？　なんじゃね？」
計斗は軽く身を捻ると、丁度背中側になっている方向を指差した。
「アレはどういう状況なんだ？」
アレといって指差した先には、一人の少女だった。
計斗と同年代ぐらいだろう。

活発そうで、計斗とはまた違った方向で気の強そうなその少女は。
地面に垂直に刺さった丸太にロープでがんじがらめにされていた。
「ああ。アレのう。あんまり仕事せんもんだからちっと懲らしめてやっとるんじゃ」
「誰が仕事しねぇだ！　たまに休んだっていいだろうがこのモウロクじじぃ！！」
工場長の言葉が癇に障ったのか、少女は何とか呪縛から抜け出そうとぐねんぐねん身体を揺らす。
しかし、足の先から肩口辺りまで巻かれたロープからは、そう簡単に抜け出せるものではない。
「だれがモウロクじじぃじゃボケこら！　半人前がいっちょまえに休もうなんて思うな！」
コメカミに青筋を立てて怒鳴り返す工場長。
計斗は二人の様子を見比べて、小首を捻る。
「もしかしてとは思うが、孫娘とかだったりするのか？」
その言葉に、工場長の顔が驚きの表情に変わる。
「おお。そうじゃけど。似とるかのぅ？」
「輪郭とか目の辺りとかな」
あとおもに言動が。
と言いたいところだったが、いったら二人の口喧嘩がエスカレートしそうだったのでやめた。
計斗にしては珍しい、良識のある行動だった。
「だめだ！　コレ全然ほどけないっすよ！」
少女の方からした声に、計斗と老人は再びそちらに注目を戻す。
丸太の影から額をぬぐいながら現れたのは、クスフリだった。
どうやらロープを解こうとしていたらしい。
指先に相当力を込めていたのか、痛そうに手を振っている。
「どんな結びかたしたんすか工場長！」
「カタ結び的な？」
「的な？　じゃないっすよ！　解くときのこと考えてなかったんす

か？！」
「カッとなっとったからのぉー」
あっはっはっは、と笑う工場長。
あっけらかんとしたその様子に、クスフリはがっくりとうなだれる。
「てめぇじじぃ！　何考えてやがる！」
「やかましいわ！　お前がさぼるからわるいんじゃろが！」
噛み付かんばかりの勢いで言い合いをはじめる二人をよそに、クスフリは計斗のほうに向かって歩いてくる。
「どうにもならないっすねアレ。　なんかで切った方がはやいっすよ」
「みたいだな。　ナイフか何かあればいいんだろうが」
目の前で死なれるのも目覚めが悪るかったので、とりあえず孫娘を救出しようと試みた計斗とクスフリだった。
もっとも、動いているのはクスフリだけなのだが。
「でも工場長、いっくら冗談でもやりすぎっすよ。　自分の孫に銃向けるって」
顔をしかめるクスフリ。
「なにいっとるんじゃ。　アンなんでも一応肉親じゃぞ。銃なんぞ向けんわい」
「思いっきり向けてたじゃなっすか！」
「頭の上ねらっとるったろうが」
「それにしたって、もし弾道が曲がったりしたら・・・」
「アホぬかせ！　このわしが作った銃じゃぞ！　こんな距離で的外すか！」
職人としてのプライドらしい。
傍らの銃を叩く工場長のドヤ顔に、クスフリは顔を引きつらせた。
「それはいいんだが。　あの丸太の上に立ってるのは誰なんだ？」
クスフリの肩を突っつき、孫娘が縛られている丸太を指差す計斗。
正確には、丸太の上に立っている青年だ。
計斗が生垣から顔を出してのぞいて居た時から、ずーっと同じ姿勢

で盾を構えている。
「ああ。ありゃうちの試し役じゃよ。　武器やらなんやらの性能テストしとる」
「成る程。　まあ、最終的には人間が持って試さんといかんのだろうしな。　で、なんでまだ盾構えてるんだ？」
クスフリと計斗、工場長の注目が丸太の上の青年に集まる。
「それもそうじゃな。　おーい、なにしとるんじゃー。　お客人が来たからテストは中止じゃっていったじゃろーがー」
工場長の声に、青年は構えたままの盾から僅かに顔を出した。
眉間には皺が寄り、額には脂汗が浮かんでいる。
「いえ。降りたいんですが。　とりあえず銃口どけて貰えると・・・」
青年が指差したのは、工場長の横に鎮座している巨大な銃だった。
その照準は、青年に向けられたまま固定されている。
「・・・あー」
「下手に動くのも怖いっすもんね」
納得する工場長とクスフリ。
「横に飛び降りればいいだろうに」
「それでもいいんですけど。　なんかそういうタイミングに打たれたらアウトかなって」
バランスを崩した瞬間に撃たれるのが怖いらしい。
「それなら盾持ってても同じような気がするんすけど」
「あほぬかせ。　ありゃ新式の盾じゃぞ。　この銃でも防げるようにつくっとるんじゃい」
「盾のテストだったんすか？！」
「耐久テストはしたからの。　貫通はせんのじゃが、如何せん持っとる人間が耐えられるかどうかのテストがまだな訳じゃな」
ダクダクと冷や汗を掻いて叫ぶクスフリに対し、工場長は涼しい顔だ。
流石の計斗も若干引いているのか、表情が強張っている。

「つまりその耐久テストの真っ最中だった訳だな」
「そういうことじゃな」
計斗の言葉に頷いたところで、工場長の表情が変わる。
しまったと言うように額に手を上げると、銃に向かってしゃがみ込んだ。
「ん？　どうしたんすか？」
「いやなに。コレ火薬入れちまったんじゃけど。　抜くの面倒なんじゃよ。火薬って粉だから。　撃っちまったほうが楽なんじゃよ」
その言葉に、クスフリの顔からサーッと血の気が引いた。
自分の命にかかわることだけに少女も感知したらしく、表情が目に見えて引きつる。
「じゃあ、撃つぞー」
かるーい感じでそういうと、工場長はトリガーに手をかけた。
「ちょっ　と！　タメとかそういうの無しなんすか？！　って、早っ！」
その場から離れようと後ろを振り向くクスフリ。
目に飛び込んできたのは、既にかなり離れたところに非難して耳を押さえてしゃがみこんでいる計斗の姿だ。
「マジか？！　マジで撃つのかよ！」
少女はますますじたばたと暴れるが、やっぱり縄はビクともしない。
「これってあの、今気がついたんですけど、ここ踏ん張り効かないから弾喰らったら吹っ飛びませんか？」
重要っぽいことに今更ながらに気が付き、冷や汗を流す青年。
そうこうしている間に、工場長は片手で自分の耳を塞ぎ発射体勢に入る。
「そーれっと」
かるーい感じでそう言うと、工場長は巨大な銃のトリガーを引いた。
ズドン

破裂音と言うより、爆発音に近い音が響き渡く。
「ぎゃぁぁぁ！　げぶっ」
銃の隣に居たクスフリは衝撃波で吹っ飛ばされ、顔面から地面に突っ込んだ。
顔が地面にめり込んだまま体が水平線と垂直になってるだけに首が心配だが、とりあえず叫んでいるので生きてはいるようだ。
問題は、銃の直撃を食らった青年の方だろう。
人間の拳ほどもある弾丸は、音速で青年の構えた盾に直撃していた。
工場長の自信通り、弾丸や盾のど真ん中を捉えている。
「ぐっ」
思わず苦悶の声を漏らす青年。
盾は衝撃の殆どを吸収したらしく、弾丸は弾かれてどこかに飛んでいくことすらなかった。
暫くは盾の表面に張り付いていた弾丸だったが、ぶすぶすと煙を上げ下に落ちる。
落ちた弾丸は、そのまま吸い込まれるように、縛られていた少女の頭に直撃した。

ゴン

「ぐわっ？！」
間近で轟音を食らったせいでくらくらしていたトコロに、人間の拳大の鉄塊の直撃だ。
少女は白目を剥くと、がっくりと頭を垂れた。
どうやら気絶したらしい。
「お、お嬢？！　しっかりしてください！」
それに気が付き、盾を構えていた青年は慌てて丸太から飛び降りる。
助け出そうとロープを解こうとするが。
「うわっ！　硬っ！　なんだこれ全然解けない！」
やっぱりロープが解けないらしい。

「クスフリさんも手伝ってくだｓ　って、こっちもだめっぽいか？！」
助けを借りようとクスフリのほうを振り返る青年。
だが、クスフリは顔面を地面にめり込ませたまま、身体を小刻みに震わせている。
「え、なにこれ、ど、どっちから助ければ・・・！」
二人の間でうろうろしだす青年。
あまりのことに正常な判断が麻痺しているらしい。
そんな様子を満足げに眺めていたのは、工場長だ。
腕組して何事か納得したように2～3度頷くと、計斗のほうに顔を向ける。
「さってと。　テストも終わったし、お茶でもどうじゃね？」
「・・・鬼だな」
その何事も無かったかのような工場長の笑顔に、思わず呟いた計斗だった。

第三十話（後書き）

なんかえらく難産でした
なんでだろう

次はもっと読みやすく出来るようにがんばらにゃ・・・

三十一話

「オーギュスト・バルカ。　まあ、みんな敬意と尊敬を込めて工場長と呼んどる」
改めて自己紹介をすると、工場長はお茶を啜った。
計斗が案内されたのは、工場内の休憩室のようなところだった。
椅子とテーブルが並べられた部屋の奥には、給湯室のようなものも見える。
「じゃあ、私も工場長と呼ばせてもらっていいか？」
「おお、そのほうがコッチとしても楽じゃしの」
工場長の応えに「そうさせて貰う」と答え、計斗は出されたお茶を啜った。
色も香りもにおいも日本の緑茶と同じようなこのお茶は、どうも同じような植物から出来ているようだ。
ネコが居たことから考えても、一部動植物は地球とかぶっているのかも知れない。
「えらい目にあった・・・」
計斗がそんなことを考えていると、ドアが開き人が入って来た。
強打した顔をさする、クスフリだ。
「ほっといていくことないじゃないですか」
クスフリに恨みがましそうな目を向けられる計斗。
だが、当の本人は涼しい顔だ。
「兵士は怪我をするのも商売だろう」
「こんな事故で怪我をするのは仕事じゃないっす・・・！」
擦りむいたらしい額やら頬やらをさすり涙ぐむクスフリ。
幾ら危ない商売をしていて怪我に慣れているとは言え、顔面強打は痛い。
「うちの孫とリンゴはどうしたかの？」
「レウさんなら、薬箱取りに行ってますよ。　リンゴさんはくいを

抜くとかなんとか」
いいながら、計斗の隣の椅子に腰掛けるクスフリ。
警備で何度か来たことがあるといっていたし、恐らくここにも何度も来た事があるのだろう。
妙に慣れた様子なのはそのせいらしい。
「そうか。　あの縛られていた少女はレウと言うんだな」
「あれ、あ、そうか。　さっきはドサクサで名前までは紹介してなかったんすよね」
「あの状況で紹介されても困るけどな」
少女が丸太に縛り付けられ、その上に盾を持った男が立ち。
それらを巨大な銃で老人が狙っている。
確かにそんな状況で落ち着いて紹介でもなかった。
「じゃー、まあ、改めて」
湯飲みをテーブルに置くと、工場長は腕組をする。
「あの縛られとったのがレウ。わしの孫娘で、ここの職人の一人じゃ」
工場長の言葉に、計斗は片眉を上げた。
「まだ若そうに見えたが」
「今年で１６になる。　まだハイハイしてる頃からここで遊んどったからの。道具の扱いもそこいらのモンよりゃ知っとるわい。　なにせわしが仕込んだんじゃからな。」
「ほー」
感心したように呟く計斗。
そんな計斗を見て工場長は肩をすくめ、「まあ、しかし」と続ける。
「誰に似たんだかサボり癖があっての。　今日は仕事休むとか言い腐ってからに」
「さぼりじゃねぇ！　てかここ暫く全然休んでなかっただろうが！
少しぐらい休ませろ！」
背後からの声に計斗とクスフリが振り返る。
声の主は、ドアから入って来た縛られていた少女、レウだった。

手には金属製の箱が提げられている。
良く見ればなにやら黒い文字で乱暴に「くすり」と書きなぐってあった。
どう控えめに見ても年季の入ったハンマーや鋸辺りしか入って居なさそうなそれが、どうやら薬箱らしい。
「少しもこないだやすみとったばっかしじゃろがい！」
「最後に休みとったの三十日前だぞ！」
レウの言葉に、眉間に皺を寄せる工場長。
「なんじゃお前、そんなに働いとったのか。　休めばいいじゃろに」
不思議そうな顔で言い放つ工場長。
暫し、時間が止まる。
「だから休みとるっつってたんだろうがぁぁぁ！！」
それまでで最大音量の絶叫だった。

レウも計斗の話は耳にしていたらしく、名乗る必要もなくフルネームを把握していた。
この工場とガルド老人の実験室はそう離れていないのもあってか、情報は早いらしい。
「しっかしあのじいさん、マジで魔法やってたんだなぁ」
なにやら感心したようにしげしげと計斗を眺めるレウ。
普通こういう場合は居心地悪そうにするのが定番のリアクションなのだろうが、計斗にはその手の常識は通用しない。
至って堂々とお茶を啜るり、
「私が召喚されたんだからマジなんだろうな」
などと返す。
計斗の妙に落ち着いた様子に、レウはなんともいえない表情を作る。
「なんか。妙に落ち着いてるな。　ほんとに異世界人なのかよ」
「実証するものはないが。　異世界のアイテムとを持って来ていた

ら分かりやすいんだろうが、着の身着のままだからな」
肩をすくめる計斗。
「それに関しては間違いないと思うよ。　俺、召喚されたところ見てるし」
非常に残念なことに、と言う言葉を飲み込むクスフリ。
昨日のことを思い出しているのだろう。
若干ふるふる震えている。
三人のやり取りを黙って聞いていた工場長が、突然立ち上がった。
「うむ。　ケイトさん、ちっとそこ歩いてみてもらえるかの？」
「ん？　ああ、わかった」
特に理由も聞かず立ち上がると、計斗は工場長に言われたとおりすたすたと歩く。
何事かとレウとクスフリが首を捻る中、工場長はじっと計斗の歩く姿を見ている。
暫く眺めると、「もうええぞ。すまんかったの」と、計斗に椅子を勧めた。
「何がしたかったんだよ」
首をかしげるレウ。
「いやの。骨格を確かめようと思ったんじゃよ。歩く姿見れば体のつくりが分かるじゃろ？」
「わかんないっす」
当然のように言う工場長に、首を振るクスフリ。
「ばかじゃねぇの？」と言わんばかりの表情なレウも、恐らく分からないのだろう。
「良い職人ってのは立ち居姿で使い手のことが手に取るように分かるもんなんじゃボケが！」
不機嫌そうに言うと、工場長は椅子に腰を下ろして眉間に皺を寄せた。
何か考えるように顎に指を当てると、確かめるように話し始める。
「まずかかとの骨の構造がこの世界のほかの人族とは若干異なる。

次に背骨、脊柱の数もケイトさんのほうが少ない。個人差の出るところでもあるまい？　何よりびっくりしたが、尻尾の名残の骨がのこっとるようじゃのう」
「尾骨のことか？」
「多分それじゃ。　この世界のケイトさんと同じ外見の種族には無い特徴じゃよ。　エルフや獣人系等の連中にならあるんじゃが」
「多少進化の方向が異なったのかもしれんな。　踵と言うと、踵骨か。　実物を見ないとワカラン差なのだろうな」
「ご推察。　普通は気にも止めんだろうて」
「いやいやいや、まじっすか・・・？」
工場長と計斗の間でナチュラルに交わされる会話に戸惑うクスフリ。
「つかケイトさん、妙に骨に詳しすぎないっすか？」
「モノを壊すにはまず対象物を良く知る必要がある」
つまり、人間を壊すには人間を良く知る必要があるのだ。
割りとデンジャラスな発言に、思わず身を引くクスフリとレウだった。
「つか、じじぃが外見見ただけだろ。信用できんのかよそれ」
訝しげに言うレウに、工場長は腕組をして怒鳴る。
「わしをどこの誰だとおもっとるんじゃこのダボハゼが！　生物学者が解剖した並の正確さじゃぼけ！」
「それはそれで気持ち悪いわ！」
「でも、それが本当ならケイトさんってやっぱり異世界人なんすね」
しみじみとそう言うと、クスフリはしみじみと計斗を見た。
その視線に気が付き、計斗もクスフリの方に顔を向ける。
「異世界の生物がこちらとまったく同じだったら逆に薄気味悪いだろうが」
「そういうもんすか？」
「そういうものだ」
計斗に言い切られ、首を傾げて考え込むクスフリ。
体育会系な彼は、どうもこの手のことが苦手だった。

もっとも、頭を使うこと全般が苦手ではあったのだが。
「時に工場長。　さっきの銃を見ていて思ったんだが。　あれは火薬と弾を別々に込める方式だよな？」
レウと口喧嘩をしていた工場長は、計斗の声に驚いたよう表情になる。
「なんじゃ。銃に興味があるんかの？」
「いや。興味と言うかな。　私の世界の戦場での花形は銃なもんでな」
「ほう、銃がか！」
「あんな打つのに時間掛かるのにか？」
感心の表情を見せる工場長に対し、レウは露骨に顔をしかめた。
「根本的な構造の革新があってな。まず銃弾を薬莢と言う・・・」
「ん、口だけじゃ説明しづらいじゃろ。　今、紙とペン持ってくるからのちっとまっとってくれの」
「おお、頼む」
工場長が立ち上がるのを見て、クスフリは思い出したように立ち上がった。
レウの近くに行くと、手を伸ばした。
「縄で擦り傷出来たでしょう？　薬、塗りますよ」
微笑みかけてくるクスフリに、レウは急に顔を赤くしてそっぽを向く。
不思議に思ったクスフリが顔を覗き込もうとするが、腹部に薬箱を叩き込まれた。
「ごぶっふっ？！」
「お前だって顔怪我してるだろ！　おら、こっちこい！」
「ちょっと、コレ結構痛いんですけど」
ずんずん歩いていくレウの後を、涙目で付いて行くクスフリ。
そんな二人の後姿を眺めながら、計斗はしみじみと呟く。
「・・・青春しとるなぁ」
台詞と同様、表情もどこかおっさんくさかった。

三十二話

屋外にある井戸の近くに座らされたクスフリは、かなり乱暴な治療を受けていた。
「いたっ！　痛いですって！　傷口に染みるっ！」
「じたばたするな！　傷に砂とかくっ付いてるんだから取らないといけないだろうが！」
顔のすぐ下にタライを抱えたクスフリに、レウは容赦なく桶の水をかけていた。
顔面の傷に付いた砂などの汚れを、水で洗い流す為だ。
やったことがある人なら分かると思うが、傷口に水をかけるというのは割りとしみて痛い。
バケツの水をひっくり返されると、傷口が刺激されてもっと痛いのだ。
「大の男がぎゃいぎゃい騒ぐんじゃねぇ！　恥ずかしくねぇのか！」
「いまさらそんなこと言う仲じゃないじゃないですか」
口を尖らせて言うクスフリの言葉に、レウの顔がボッと赤くなる。
「へ、へんな言い方すんなバカコノヤロウ！」
「いったっ？！」
スネを蹴られてタライを取り落とすクスフリに背を向けて、がちゃがちゃと薬箱を漁るレウ。
工場と言う場所柄、危険な道具を扱うことも多い。
そのため、薬箱には様々な怪我に対応できる医療用具がそろっている。
一番効くけど一番しみて痛いと評判の薬を選ぶと、強引に引っ張り出す。
「しかし、相変わらずですね。　工場長」
タライを傍らに置くと、クスフリは濡れた髪の毛をタオルで拭く。
苦笑交じりのその表情からは、どこか楽しそうでもあった。

「ったく。　歳なんだからもう少し落ちつけってんだよな。　おかげでこっちも体が痛ぇっての」
眉根を寄せて、擦りむいた腕をさするレウ。
暴れすぎたせいだろう。
腕には擦り傷と縄の跡が残っている。
「情熱的と言うかなんというか・・・」
「ああいうのはイカレてるってんだよ」
「厳しいですね」
面白そうに微笑むクスフリの顔を見て、レウは思わず顔を背けてしまう。
それがばれないように慌てて薬箱を漁るふりをしながら、赤くなっている顔をもとに戻そうとぱたぱたと手で扇ぐ。

クスフリとレウがはじめてあったのは、実は１０年以上前だったりする。
クスフリは騎士である父に連れられて、時折この工場に来ていた。
当時から工場を遊び場にしていたレウは、二つ年上のクスフリと良く遊んでいたのだ
おてんばなレウに、面倒見のいいクスフリはいっつも振り回されていた。
そんな関係は今でもあまり変わらない。
昔からなぜか敬語を使うクスフリに、気を使わず接するレウ。
ただ、レウの気持ちだけが微妙に変化していることに、クスフリはまったく気がついていない。

薬を塗られてのた打ち回るクスフリをヘッドロックで押さえ込み薬を塗り終え、レウは満足げにため息を吐いた。
さっき妙にドキドキさせられたお返しだ。
「なんかこの薬、妙にしみないですか？　余計痛くなった気がするんですけど」

「気のせいだろ」
しかめっ面のクスフリに、せれっと言い放つレウ。
小首をかしげながらも、クスフリは救急箱に手を伸ばした。
「ん？　まだどっか怪我あるのか？」
不思議そうな顔をするレウに、クスフリは首を振ってみせる。
「俺じゃなくてレウさんですよ。　脚とか腕とか、ほっといたら跡になっちゃいますよ？」
「ああ？　このぐらいどうってことねぇだろ？」
腕を持ち上げ、覗き込むレウ。
確かに深い傷はなく、擦り傷にはもうかさぶたが出来始めている。
「唾付けとけば治るっての」
「そういうわけに行かないでしょう？」
塗り薬を取り出すと、クスフリはレウの後ろに回り自分が座っていた椅子の方へと押しやる。
「なっ、ちょ、何すんだバカ！　どうでもいいだろそんなの！」
抵抗するレウだが、体格的に勝るクスフリには勝てない。
久しぶりに触れたクスフリの手が思いのほか暖かくて、反発しようにも力が入らない。
「どうでも良かったら手当なんてしようとしません。　レウさんだから、心配なんです」
「ぼぶっ？！」
急に力が抜けて、レウはすとんと座らされてしまう。
「せっかく綺麗なんですから。　大事にしないと」
クスフリはレウの前にしゃがみこむと、塗り薬の蓋をはずす。
レウの手を取ると、指ですくった薬を塗っていく。
薬が傷にしみて痛むが、今のレウはそれ所ではない。
自然な感じに手を握られ、体が硬直しているのだ。
「あ、うえあ、そ、おまっ」
顔を真っ赤にしてどもるレウ。
そんな彼女に気がつき、クスフリは不思議そうに顔を覗き込んだ。

「どうしたんです？」
「な、なんでもねぇばかやろう！　早く薬、塗れよ！　ほら！」
慌ててそっぽを向くレウ。
そんなレウの様子に、クスフリは思わず笑みをこぼしてしまう。
おてんばな幼馴染の態度が、彼の目には拗ねているように見えたのだ。
妹のように大事に思っている少女のそんな態度が、かわいくてしょうがないのだろう。
クスフリのそんな思いにうすうす気がつきながらも、レウは顔を背けずにはいられない。
彼女の乙女心は、とても繊細なようだ。

第三十三話

クスフリが外で傷の治療をして戻ってくると、テーブルの上にはかなりの数の紙が散らばっていた。
図形らしきものが書き込まれたそれは、どうやら計斗の世界式の銃の構造図らしい。
険しい表情で腕組して固まっている工場長と計斗を前に、クスフリはぽかんとした顔で立ち尽くしていた。
「えーっと。　どうしたんすか一体」
「いやーのー」
眉間に皺を寄せるクスフリの言葉に工場長はため息混じりに呟くと、計斗が描いたものたらしい紙を一枚手に取った。
「銃の破壊力や射程距離は確かにずば抜けたものがあるとは思っていたんじゃが。こんな構造は考えもしなかったもんじゃからのぉー」
「まあ、私の世界でも相当に苦心して作られたものらしいからな。魔法という飛び道具があるこの世界でなら余計に発展もせんだろうし」
「この国以外で積極的に銃を使うところも少ないじゃろうしのぉー」
何か考え込むように唸り始める工場長を横目に、クスフリは散らばっている紙の一枚を拾い上げた。
興味本位で描いてあるものに目を落とし、クスフリはそっと紙を机に戻した。
なんか図形と難しい単語が沢山並んでいたからだ。
肉体労働が専門で、頭を使うことはとことん苦手なクスフリだった。
「で、実際に作ることは可能なんすか？」
「わしを誰だとおもっとるんじゃ。　可能も可能、三日もあれば試作品あげてやるわい」
ぼへっとした顔で言うクスフリを、工場長はキッと睨む。
「かなり複雑な構造の部分もあると思うんだが。　どうにかなるも

のなのか？」
「量産するって話ならまた別じゃけどな。　一丁だけ作る分なら問題ないわい。　金型やらなんやら複雑なことせんで、削りだしたり即席の形成型つくるだけじゃしの」
どうやら工場長の頭の中では、既に制作方法が固まっているらしい。
手に取った紙を見ながら、工場長はなにやらぶつぶつと呟いている。
「完成したら城に連絡するからの。　試射に付き合ってくれんか？」
「無論、そのつもりだ。　製作中に問題が起きても、知らせてくれれば役に立てるかもしれん。　伝えきれていない部分もあるかもしれんしな」
自分でそういって気になったのか、計斗は散らばった紙を拾い集め始めた。
「いくつか道具を見せてもらったが、かなり加工技術も高いようだからな。　リボルバーは作れそうな気配だが」
「何いっとるんじゃ。　マシンガンだって作ってやるわい」
ぶつぶつと呟きあう二人に黒いものを感じ、思わず後ずさりするクスフリだった。
「む。　そうだ。　すっかり忘れていた。　工場長、一つ二つ頼みがあるんだが」
急に思い出したように顔を上げていう計斗。
その言葉に、クスフリと工場長の視線が集まった。
「なんじゃい？」
「防刃性の高い布なんかは無いだろうか。　出来るだけ軽い奴がいいんだが」
計斗の要望に、工場長は首を捻る。
「ないこともないが。　なんに使うんじゃねそんな物」
「まあ、何に使うと言うか、服にしようと思ってな」
「服っすか？」
怪訝そうな顔をする工場長とクスフリ。
計斗は眉根を寄せて頭をかくと、自分のTシャツをつまんで見せた。

「魔獣を戦わせる大会とやらに出る時に着る服を作ろうと思ってな。
ただの布よりはずっと頼りになるだろう？　そういうものの方が」
「魔獣と戦う？」
工場長は手にしていた紙を机に置くと、不思議そうに眉を眉間に寄せた。
「召喚獣同士を戦わせる、グラムハルド大祭とかいうのがあるだろう。　召喚されたからには出てみようと思ってな」
「出てみたいって。　そりゃケイトさんは召喚されとる訳だし出場条件はクリアしとるじゃろうけど」
大祭の名前はそれなりに有名らしい。
驚いた顔になる工場長に、ケイトは軽く肩をすくめて見せる。
「相手が人の形でサイズも同じ程度なら、まあ試してみる価値はあるさ。　格闘技術であれば少しは自信もあるしな」
「格闘技術？　格闘家なのかのぅ？」
「そんな行儀のいいものじゃないがな。　独学という奴だ」
「ふむ」
工場長は腕を組むと、視線をクスフリのほうに向けた。
それに気がつき、クスフリはなんともいえない苦い表情になる。
「街中でチンピラ複数人を傷一つ負わずに鉄拳制裁してましたね。
かなり戦いなれてる上に腕も立ちますよ。　俺から見ても」
本職兵士であるクスフリの言葉は、かなり説得力があるらしい。
感心したように唸ると、工場長はまじまじと計斗の事を眺めた。
「まあ、確かに筋肉やらのつき方はなかなかよかったようじゃしのう。　歩き方を見る限り」
「骨格分かるぐらいっすもんね」
「職人の力というのは恐ろしいな」
褒められたと思ったのだろう。
無言でドヤ顔を決める工場長。
なんとなくイラっときたクスフリと計斗だったが、触れると面倒くさそうだったので放置することにした。

既に妙なところで以心伝心が出来ている二人だった。
「防具に使うっていうか、鎧とか着た方がいいんじゃないんすか？　相手は武器も魔法も使うかもなんすし。　いえ、出ないのが一番なんすけど」
「そんなもの着ていたら重いだろうが。　私の戦い方は速度重視だぞ。　動けなければ逆に危険なんだ」
「とはいっても・・・って、ケイトさん素手で出るつもりなんですか？！」
「そうだが」
「そんなムチャクチャな」
当たり前のように言い放つ計斗に、クスフリは表情を引きつらせる。
「ケイトさんは魔獣とかそういうの見たことないから危険度がいまいちピンと来てないかもしれないっすけど」
「かもしれんな。　まあ、一応一通り熊や猪は素手で倒したことはあるんだが」
「クマ？　イノシシ？　って、あの、一応同じ名前の動物がコッチにもいるんすけど」
「猛獣指定されとる２ｍ弱の二本足で立つやつと、ブタの祖先だな」
一瞬冗談かとも思ったクスフリだったが、計斗の目はあまりにも真剣だ。
ドン引きしているクスフリと計斗を見比べながら、工場長は「よし」と声を出す。
「わしがケイトさん用の防具作ってやろう」
「防具っすか？」
嫌な予感でもするのだろう。
露骨に嫌な顔をするクスフリだったが、工場長は一切意にかえさない。
「作れるのか？」
「わしを誰だとおもっとるんじゃ。　武器でも防具でも作ってやるわい！　ただその前に、ケイトさんの戦い方を見ないといけないが

のぅ」
「意味がわからないんすけど」
引きつった表情でいうクスフリ。
「聞いたまんまじゃろがい。　戦い方を見なければ身体に合わせて作らにゃならん防具なんぞつくれんじゃろが！」
「そういうものなのか？」
ケイトは顔をしかめ、首を捻る。
いまいちイメージがわかないらしい。
「そういうもんじゃ。　どこをどう守るか、どこを省けば動きやすいか。　それを見極める必要があるじゃろが。　動きやすく戦いやすい防具は勝つ為の基本じゃからな」
「まあ、確かにそうだろうが」
もっともらしく語る工場長の言葉に、計斗は眉をひそめながらも頷く。
工場長はそんな計斗の様子を確認して満足そうに頷くと、すっくと立ち上がった。
「そんな訳で。　ケイトさんの戦い方を見せてもらうべく。　場所を用意しようかのう」
にやりと笑い、親指を立てる工場長。
「・・・嫌な予感しかしないっす・・・」
げっそりとした表情で呟くクスフリ。
「私もそうだな」
そんなクスフリに、珍しく同意する計斗だった。

三十四話

寝るのが趣味の人間というのは、世の中に結構いたりする。
どこででも眠れると公言する人間も、結構いたりする。
ただ、地面に突き刺さった丸太の上で眠れる人間となると、かなり限られてくるだろう。
工場長の撃った銃弾を立てて受け止めていた青年、林護　七郎次は、そんな限られた人間の一人だった。

「も、もろこし。　もろこしりきっど」
腹ばいで棒の上で寝ながら、妙な寝言を呟く七郎次。
棒の上で腹ばいになるという状況はつまり、腹のへその辺りだけを突き刺されたような状態で手足をだらんと放り出している状態になる。
普通ならとても寝ていられる状態ではないだろうが、七郎次は至極幸せそうな寝顔をしていた。
そんな彼を前に、クスフリはなんともいえない表情で首を捻る。
「・・・どうやってこの状態で熟睡を・・・」
呆れるとか驚くを通り越して、感心しているらしい。
クスフリはため息を一つ吐き出すと、七郎次の脚に手をかけた
暫く悩んだ末、掴んだ足を横にスライドさせる。
腹部から横方向にずりずりと身体を引きずらせて、七郎次は棒から落下した。
「うをっ？！」
地面に追突する前に、何とか受け止める。
丁度お姫様抱っこ状態だ。
当の七郎次は落下の衝撃も何のその、気持ちよさそうに眠ったままだ。
「・・・」

激しく地面にたたきつけたい衝動に駆られるものの、何とか思いとどまる。
さっさと連れて行かなければならない場所があるのだ。
寝たままでさくっと連れて来い。
工場長の指示を守り、クスフリはものすごく嫌そうな顔で、七郎次を抱えたまま歩き出した。

「男同士のお姫様抱っことかちょーきもいのう」
「もう少し何かなかったのか」
引き顔でいう工場長と計斗に若干の殺意を抱きながらも何とかそれを押さえ込み、クスフリは七郎字を地面に転がした。
「工場長が早くつれて来いって言うからこういう状況になったんじゃないっすか！　ていうかなんであんなところで寝てて今も起きないんすかリンゴさん！」
結構乱暴に芝生の上に放り出された七郎次だったが、未だに幸せそうな顔で眠っている。
かなり腰とかねじれた体勢で、なんとなく関節とかが曲がっちゃいけない方向に曲がってる感だ。
「盾を構えていた奴だよな。　盾だけの力であの弾丸を止められるとは思えんのだが」
「おお。　コイツはうちの武器試役でのぉー。　林護・七郎次。他国の出なんじゃがの」
「りんご、しちろうじ？」
眉をひそめ、しゃがんで七郎字の顔を覗き込む計斗。
わしっと髪の毛を掴むと、頭を掴みあげる。
「なんじゃい」
「いや、私の世界の人間に顔つきが似ていると思ってな。　名前も近いものを感じる」

「あー。　まあ、方向性は似とるようなきがするのぉー」
工場長もしゃがみこむと、じーっと七郎次の顔を覗き込んだ。
つられるように、クスフリも身を屈める。
「前にリンゴさん言ってたんすよね、そういえば。　自分は異世界から来た人が作った国の出だって」
思い出したというように口に出すクスフリ。
工場長も「あー」と声を出して手を叩く。
「そういえばそんなこといっとったのぉー。　家名は国作りのときに王が考えてずーっとそのまんまだとかなんとか」
「成る程。　私と同じ世界から来た奴だったのかも知れんな。　詳しく聞いてみたいが、まあ、今度の機会にするとしよう」
計斗はそういうと、ぱっと髪の毛を掴んでいた手を離した。
支えを失った七郎字は、そのまま顔面を地面に強打する。
ゴスリと結構痛そうな音が響く。
が、一向に起きる気配はない。
クスフリが表情を引きつらせるが、計斗と工場長はどこ吹く風だ。
「さて、リンゴも連れてきたし。　さっそく戦ってもらおうかのう」
「戦うのはいいが。　寝とるぞ」
「起きそうにないっすしね」
七郎次の頬をつっつきまくって追い討ちをかける計斗だが、やはり反応はなかった。
寝息を立てているのでかろうじて生きていると分かるが、それ以外はまったくといって動いていない。
「ダイジョブじゃって。　起して説明するのもメンドイしのぅ。いきなり殴りかかればＯＫじゃよ」
「そんな無茶な」
眉間に皺を寄せるクスフリ。
「寝とる人間を殴っても何の足しにも成らんぞ」
「真顔で何言ってるんすか！？」
「コイツは寝てても攻撃を感知すると素早く回避行動をとる不思議

ナマモノなんじゃよ。」
「それは面白いな。　試してみるか」
そういうと、計斗はすっくりと立ち上がり距離をとるように歩き始めた。
間合いを取っているのだろう。
計斗の行動の意味を察して、そそくさとその場から離れる工場長。
クスフリも納得いかなそうな顔をしながら、工場長のあとを追いかける。
「ん。　そうだ」
何か思いついたように言うと、計斗はぴたりと足を止めた。
「工場長。　ひとつ頼みがあるんだが」
「ん？　なんじゃい？」
声を駆けられ、振り返る工場長。
頭を過ぎる嫌な予感に、クスフリの表情は見る見る雲って行く。
クスフリの不安どおり。
計斗は口の端を吊り上げた、肉食獣じみた悪い顔で言う。
「ギャラリーがもう少し欲しいんだが」

三十五話

「ん？　・・・うをぉ？！」
何かの気配に目を覚ますと、拳がものすごい速度で接近してきていた。
七郎次は反射的に頭を持ち上げ、跳ね起きた。

ぶうん

数瞬前まで自分の頭があった場所を、拳が風切り音を上げて通り過ぎていく。
額に脂汗が浮かぶのを感じながら、七郎次はそのまま後ろに飛びのいた。
予想通り、すぐさま追撃の拳が迫ってきていたからだ。
素早く立ち上がった七郎次に対応したのだろう、二発目もはやり顔を狙った打撃。
眉間を正確に狙った拳を身体をのけぞらせて避けると、そのまま後ろに跳んで距離を取る。
まだきちんと目で相手の全体像をとらえたわけではないが、相手との距離、人数は気配だけでわかる。
周りに人はたくさんいるが、襲ってきているのは一人だ。
とりあえず、その一人との間合いを取ればいい。
起き抜けでまだかすむ目をこすり、相手の姿をとらえようと目を凝らす。
「んん？」
おぼろげな輪郭がはっきりして、ようやく相手をとらえたと同時にうめく七郎次。
目の前で構えを取っているのは、さっきクスフリと一緒に来た少女だ。

確かケイトとかいう名前はず。
しかし、なぜいきなり殴りかかってくるのか。
疑問に眉を寄せる七郎次。
「シチロージ！　ケイトちゃんとちっとやりやってみろぉー！」
横合いからかけられた聞きなれた声に、ぎょっとして振り向く七郎次。
そこにいたのは、楽しそうにこっちを見る工場長だ。
「何がどうなってるんだ・・・？」
額に脂汗を浮かべながら、顔をしかめて呟く七郎次だった。

「本当に何がどうなってるんですか」
七郎次と計斗を取り囲む作業着とツナギの集団の中に紛れながら、クスフリはげっそりした顔でつぶやいた。
作業着とツナギの集団は、工場長の呼びかけで集まった工場の従業員たちだ。
この工場は国営なので、彼らは皆日本で言えば公務員になるわけだが、どう見てもガラはよろしくない。
一応兵士扱いである彼らは身体も鍛えているのか、妙に体格がいい。
擬音にするとムキムキとかそんな感じだろう。
そんな連中が向かい合う二人を取り囲み、やいのやいのと声をかけている。
「ぶん殴れー！」
「有り金全部かけてんだぞー！」
など、さまざまな声が飛び交っている。
何やら既に賭け事も始まっているようだ。
ストリートファイターである計斗は、周りにギャラリーがいたほうが戦いやすいらしい。
だからギャラリーを集めろ、と言うのが計斗の要請だった。

そんなことを言い出す計斗も計斗だが、ほいほい従業員を集める工場長も大概だ。
そしてそんな呼びかけに答える、従業員たちも。
どうもこの国の人間は乗りが良すぎる。
頭痛に眉間を抑えながら、苦虫をかみつぶしたような顔でうめくクスフリ。
そんなクスフリを見て、工場長は「はっはっは！」とわざとらしく笑いながら肩をたたく。
「まーまー、イベントってことでいーじゃろぉー。　おもしろいしのう！」
「おもしろくないです・・・」
げっそりとした顔で言うクスフリ。
「工場長？！　工場長ー！　なんですかこれ！　お客人に襲われているんですけど！」
工場長を見つけた七郎次が、焦った顔で声を張り上げた。
計斗を警戒しているのだろう、視線は計斗から外していない。
当の計斗はといえば、何やらにやりと笑いながら構えを取っている。
楽しくてしょうがないのだろう、すこぶる機嫌よさげな笑顔だ。
工場長はそんな七郎次に、至極真面目そうな表情で返す。
「やかましいこのボケ！　黙って戦やぁーえーんじゃ！」
「ええ？！」
状況説明一切なし。
あまりの物言いに、クスフリを含めた周りの人間がびくっと工場長を振り返る。
が、何とも言えない表情で中央の二人に目線を戻す。
まあ、工場長だしなぁ・・・。
そんな心の声が聞こえてきそうな表情だった。

起きたらいきなり客人の少女と戦わされました。
人生って深いな。
そんなことを考えながら、七郎次は計斗に向き直った。
工場長の性格からして、これ以上説明を求めるのは不可能だろう。
と、なると、おとなしく組手か何かに付き合うしかなさそうだ。
何より、目の前にいる計斗も待ってくれそうにない。
目とかものすごいランランと輝いてるし。
「組手すればいいんですね？！」
「そういっとるじゃーがー！」
聞いた覚えはないが、やはり組手をすればいいらしい。
何が何だかよくわからないが、一方的に殴られてはたまらない。
さっき避けた拳を見る限り、当たったら痛いでは済まないだろう。
七郎次は腰の後ろに手を伸ばすと、括り付けてあったものを外す。
茶色く長細い形状のそれは、皮の小手に金属製の小盾を組み合わせたものだった。
いざというときのために常に隠してあるそれを腕に装着すると、半身を計斗に向けて構える。
「うちかえって寝たい・・・」
願望を口に出しながら、七郎次は深い深いため息を吐き出した。

半身の構え、わき腹を籠手で守る。
足は軽く開いているだけで、いつでも動けるようにしているようだ。
どこか見たことがあるようなかその構えを眺めながら、計斗は拳を握りなおした。
空手か何かに似たような構えがあった気がしたが、あれは腰をもっと落としていたはずだ。
ボクシングのような軽いステップワークを使うのだろうか。
まあなんにしても、殴りかかってみればわかる。

計斗は思い切り腰を落として身体を後ろに引くと、それに合わせて拳も後ろ回した。
腰を限界までひねり、骨がぎしぎしときしむ音が聞こえるまで引き絞る。
マンガか何かの必殺パンチの様なこの体勢が、計斗の構えだ。
ストリートでこの構えを取った時にリアクションはだいたい二つに分かれる。
馬鹿にした目で見るか、妙に警戒するか。
計斗としては前者の反応が正しいと思っている。
格闘技にある構えは、何世代にもわたって先達が磨いてきた技術の結晶だ。
それの常識から極端に逸脱した構えは、異質で使い物にならないと思ってしかるべきだろう。
問題は後者だ。
そんなバカ丸出しな構えを見て警戒するのは、これまただいたい二つしかない。
格闘の常識がないのか、こちらの意図を理解しているか。
拳のにぎりを確かめながら、計斗は七郎次の様子をうかがう。
ひとまず落ち着いたらしく、混乱している様子はない。
表情も動きも特に変化はない。
ポーカーフェイスというやつだろうか。
表情や動きからは特に何もうかがえない。
この手の反応を見ることは、ストリートではほとんどなかった。
だいたいそういうところにいる奴は、自己主張の激しい奴だからだ。
まったくのノンリアクションというのは珍しい。
出方をうかがいながら様子を見るつもりだった計斗だが、作戦を変えることにする。
とりあえず思いきり殴りかかって見てから考える。
計斗の好きなやり方だ。
異世界の人間と初めてまともに戦えることが、計斗はうれしくて仕

方がなかった。
昨日の様なチンピラとは、きっと比べ物にならないほど強いだろう。
我知らず口の端を吊り上げながら、計斗は地面を踏みなおした。

計斗と自分の間合いを計りながら、七郎次は頭の中で状況を整理しようとしていた。
確か自分は杭を抜こうとしていたはずだ。
日差しが気持ちよくて、思わずうとうとしてしまったところまでは覚えている。
やはりあの後眠ってしまったようだ。
そして、寝ている間に、ここに連れてこられたらしい。
周りを囲んではやし立てているのは、工場の職人連中だ。
観客ということだろうか。
そういえば、以前にも似たようなことがあったことを思い出した。
確か武器を作るのに使い手の力量を見るから戦えとかなんとか言われて、無理やり兵士と戦わされたのだ。
そんなよくわからない理由で戦わされるのは嫌だと散々ごねたのだが、結局は強制的に手合せさせられた。
その時に工場長がぼそりと「今度は寝てる時に襲うかんじでいくかのう」とか言っていた。
「あれか・・・！！」
原因に思い至り、思わず声を漏らす七郎次。
普通の人間ならしないようなことを、鼻歌交じりにやってのけるのが工場長だ。
それにしても本当に寝ている人間を襲うとは。
やらせたのは工場長だろうが、実際にそれを実行するほうも大概だ。
やっぱり類は友を呼ぶというやつだろうか。
こわばった表情で計斗を見る七郎次だった。

「ん？」
計斗の動きの変化に気が付き、七郎次は拳に眉を寄せた。
足で地面を踏みなおしている。
一気に間合いを詰めるつもりだろうか。
それにしては、距離がありすぎる気がする。
普通攻撃を仕掛けるには、一歩で踏み込める距離でと相場が決まっている。
的確に、且つ素早く攻撃を仕掛けられるのがその程度の間合いだからだ。
離れすぎれば速さが失われ、逆に隙を作る羽目になる。
距離を詰めてくるつもりだろうか。
まだ動かず様子をうかがおうと決めた、その直後だった。
計斗が地面を蹴り、一気に七郎次へと向かって跳躍する。
流石にこの距離では届かないだろう。
そう思った七郎次だったが、その考えは一瞬後に否定される。
眼前に計斗の拳が迫っていたのだ。
「はっやっ？！」
言いながら、咄嗟に体を横倒しにして打撃を避ける七郎次、
地面に転がりそう勢いで体を投げ出したが、それでも避けきれない。
計斗の拳が七郎次の頬をかすめる。
かなり速度が出ていたためだろう。
計斗は加速のしすぎで減速しきれず、そのまま七郎次の横を通り過ぎていく。
足で地面をがりがり削りながら減速をかけるが、それでもかなり距離が離れてしまう。
あまりにも速すぎた弊害らしい。
計斗もそれは予想のうちらしく、表情一つ変えない。
相手が転んでいるという好機に追撃できないのだから、悔しがってもよさそうなものだが。
表情をゆがめているのは、七郎次のほうだった。

身体を無理やりそらせたせいで、背中から地面に転がる羽目になっていた。
すぐさま身を起こし構えを取り直すが、表情は驚きにひきつったままだ。
ひりひりとした感覚に、七郎次は頬に指を這わせる。
ぬるりとした生暖かい感触に指先に目線を向ければ、案の定出血していた。
遠い間合いを一瞬で詰めてくる俊足と、かすっただけで出血するほどの鋭い拳。
つまり、それが計斗の武器ということだろう。
「なんなんだ一体」
苦虫をかみつぶしたような顔で計斗を見る七郎次。
考え事をしながら手合せできる相手でもないらしい。
ひとまず状況の整理やら工場長への苦情などを頭から追い出し、表情を引き締める。
そんな七郎次の変化に気が付いたのだろう。
計斗は再び口の端を吊り上げると、大降りに拳を振り被る独特の構えを取った。
「こえぇ・・・」
昔見た魔獣っぽい目をした計斗を前に、思わずつぶやく七郎次だった。

三十六話

計斗の攻撃を見て、工場長は感心したような声を上げた。
「はっやいのぉー。　一瞬でトップスピードにのるんじゃなぁー」
「あれぐらい大仰な構えじゃないとあんなでたらめな加速は出来ないんでしょう。　俺は一度見てはいますけど。　改めて尋常じゃないですね」
げっそりとした顔でつぶやくクスフリ。
ストレスでやれたのだろう、心なしか顔に死相が出ている気がする。
そんなクスフリとは対照的に、工場長は目をらんらんと輝かせていた。
「七郎次の奴は火が入るのが遅いからのう。　それでも今ので目も覚めたじゃろ。　ここからが面白いじゃろうて」
「俺としては計斗さんが怪我をしないで終わってくれるのが有難いんですけど」
「ひどい奴じゃのう。七郎次の心配はせんのか」
にやりと笑って言う工場長に、クスフリは苦虫をかみつぶしたような顔を向ける。
「七郎次さんの得手は俺も知ってますよ」
「ケイトちゃんとはある意味正反対じゃからのう。　あいつは防御技術だけはトンガっておるから」
「丁度いいかも知れませんね。　攻撃一辺倒なスタイルのケイトさんと、防御重視の七郎次さん。　収拾つかなさそうになったら止めてくださいよ？」
「うん、考えとく」
「考えとくって・・・」
軽い感じでいう工場長の言葉に、不安しか感じないクスフリだった。

戦うという点において、女は男に劣る面が非常に多い。
体格、体重、筋力、骨格。
覆しにくい差を、計斗は身をもって知っている。
純粋な腕力では劣るし、肉体的な強度も劣る。
それでも、女が男に真正面からの戦いで勝とうとするならどうすればいいか。
様々あるだろう答えの中から計斗が選んだのは、恐ろしくシンプルなものだった。

一撃で仕留める。

腕力だけで放つ拳で足りないなら全体重を。
それでも足りないなら、全速力も乗せた拳で殴りつける。
こちらが倒れる前に相手を倒してしまえば、打たれ弱さやスタミナの差も関係ない。
その考えを元に、計斗は自分の体を鍛え、戦い方を作り上げてきた。
無茶苦茶なのはやっている自分がよく知っている。
常識はずれなのも百も承知だ。
だが、この戦い方が一番計斗にはあっている。
身体能力的にも、なにより、性格的にも。

都合二回攻撃を見せたところで、計斗はこのあとどう攻めたものかと考えていた。
最初の一発は寝ているところを狙ったからアレだが、二回目の攻撃は真正面からだ。
相手の実力は測りかねるが、恐らくは恐らくはすでに見切られているだろう。
同じ攻撃を繰り出せば、今度はカウンターをもらうかもしれない。
全身全霊を傾けた計斗の技は、反面カウンターに弱かった。

全力疾走しているときに壁にぶつかったらものすごく痛いのと同じ原理で、それこそ足を引っ掛けらて地面に転がされただけでも大怪我をする。
ふと、ある考えた計斗の頭によぎる。
同じことをして、どういう反応をするか確かめてみるのも面白いんじゃないか。
カウンターを狙ってくるのか、完璧に受けきって見せるのか。
それとも予想もつかない、なにかこの世界特有の技を見せてくれるのか。
試してみたいという思いが計斗の頭の中を支配していく。
思い立ってしまったら、試して見ずにはいられないのが計斗の性分だ。
「試してみるか」
小さくそうつぶやくと、計斗は足元をぐりぐりと踏み固めた。

計斗の足先の動きに気がつき、七郎次はすっと目を細めた。
真正面から技を見て、計斗の癖は大まかにつかんでいた。
思いっきり大振りにこぶしを振り回し、力の限り拳を叩き付ける。
シンプルでは有るが、その速さが尋常ではない。
出だしから一気にトップスピードに乗るその様は、さながら銃弾だ。
その鉄砲玉の発射サインが、あの足を踏み固める動作らしい。
あれだけの加速を生むためには、相当に足場には気を使うのだろう。
計斗の重心が、ゆらりと後ろに傾く。
心を落ち着かせ、計斗の動きのみに集中する。
周りの景色が抜け落ちるように意識の外に離れていき、ありとあらゆる感覚が計斗だけに集中する。
地面を蹴り、まるで地面と水平に滑る様に計斗の体が向かってくる。
やはり早い。

よほど気をつけなければ、あっという間に一発を見舞われるだろう。
だが、今回は避けるだけにはならないですみそうだ。
足を斜め前へと出しながら、篭手を装備した腕を力を抜いて突き出す。
もちろん、たったそれだけで避けられない。
計斗の拳と目は確実に七郎次を追っている。
距離的にも速度的にも、このままいけば避けることはかなわない。
精々が腕で体をかばう程度だろう。
狙いは自分だけが動いて避けることではない。
計斗の拳に手の甲をあてがい、さらに歩を斜めへと進める。
横へと力をこめるが、計斗の拳は微動だにしない。
速度とこめられた力が半端ではないからだ。
この程度でどうにかなる相手だとは七郎次も思っていない。
本命はこれからだ。
体を滑らせ、腕の動きを見極める。
そして、腕の角度がある一転に来るのを待つ。
人体、人の形をしているものの腕は、ある角度でだけ急激に衝撃に弱くなる。
どれだけ鍛えようが、それだけ気をつけようがそれだけはどうしようもない一点だ。
その角度に計斗の腕が入った瞬間、腕に渾身の力をこめる。
背中を弓なりにそらせ、力を押し上げるように腕を伝わせて計斗の拳に叩き付けるイメージ。
衝撃の固まりは、狙いたがわず最高のポイントで計斗の拳へと叩き込まれる。
たしかな手ごたえと共に、拳の軌道がすれていく。
それでも、体の衝突は免れない。
肩口を向けている計斗と、胸を向けた七郎次がぶつかった場合、分は計斗にある。
ショルダータックルという技があるように、人間の胸と肩とでは、

肩のほうが丈夫なのだ。
だが、これは問題ない。
篭手をしていない、開いている手のひらを計斗の肩にあてがい、押す。
計斗を突き飛ばそうというのではない。
足だけではなく、手も使って計斗から自分を放すために押したのだ。
計斗の体の軌道がずれ、七郎次との間に差が開き始める。
勢いがついた計斗は、すぐさまの方向転換が利かない。
この隙に攻撃できれば一番いいのだろうが、流石にそこまでは手が回らなかった。

横にいなされ若干体制を崩しながらも、計斗は七郎次に視線を向けたまま離さない。
地面を足で削って何とか勢いを殺し、たたらを踏みながらも振り返る。
先ほどの場所からほとんど動いていない七郎次は、すでに構えを元に戻していた。

「ふっ。　はっはっはっは！」
噴出すと、計斗は大声を張り上げて笑った。
「やはりどうにかされるんだなぁ。　これでなくては面白くない」
にやりと笑いながらいう計斗に、七郎次は顔をしかめる。
「面白く無くていいよ。　こっちは今のだけで手がしびれてるんだ。
　もう勘弁してくれ・・・」
そういって広げて見せた手は、確かにわずかに震えているようにも見える。
やはりノーダメージでいなすという訳にはいかなかったらしい。
「そのぐらいですむのか。　こちらは一撃で戦闘不能にしようと思

って殴っていたんだがな」
「そりゃそうだろうけど」
苦虫を噛み潰したような顔をする七郎次を見て、計斗はますます楽しそうに笑う。
「なあ、工場長。　まだ続けねばだめか？」
突然声をかけられ、工場長は驚いたように声を出す。
「おお？　いや、まあケイトちゃんの動きは分かったから十分っちゃ十分じゃけど。　最後までやらんのかいの？」
最後までというのは要するにどっちかが倒れるまでという意味だ。
それを察したのだろう、七郎次は露骨に顔をしかめる。
計斗はにやりと笑った工場長のほうへと体を向けると、もうやる気が無いというように腕を組んで見せた。
「ああ、やらん。　今の私では七郎次を倒しきれんからな。　一番の得手を見切られた」
「ほう？」
不思議そうな顔をする工場長に、計斗は肩をすくめてにやりと口の端を吊り上げる。
「次までに仕留める方法を考えるさ」
その言葉に、今度は工場長が大声を上げて笑い始める。
「っとに面白い娘じゃのぉー！　オッケーオッケー！　防具武具はきちっとつくっとくからのぅ！　楽しみしとればええわい！」
それが合図だったように、七郎次もがっくりと全身の力を抜き、構えを解いた。
「しかし面白い男だなお前は。　また遊ぼう」
まるで小学生がドッチボールに友達を誘うかのようなケイトの良い笑顔に、思わず
「二度とイヤだ」
と答える七郎次だった。

工場長による終了宣言で、ケイトたちを囲んでいた従業員たちは凍り付いていた。
全員どっちかが倒れるまで戦いが続くと思っていたために、賭けが成立しなくなったのだ。
「・・・これは・・・払い戻しか・・・？」
「じゃない？」
全員が掛け金が払い戻しになると思った、そのときだった。
「あ、俺の勝ちになるんですかね？　これ」
願掛けの意味もあったのだろう。
ただ一人引き分け（両方外傷無し）という最高倍率の大穴にかけたクスフリが手に持っていたチケットを覗き込んだ。
『～～～～～～～～～？！』
工場を揺るがすほどの、声にならない叫びが響き渡る。
結局、掛け金総取りという工場市場最高金額を手にしたクスフリ。
とはいえ、その直後に半分近くを計斗によって巻き上げられたのはいうまでも無い。

三十六話（後書き）

次回はお城での話の予定
はやくつづきをかかねばっ！

三十七話（前書き）

計斗たちのいる場所から、少し離れた場所

三十七話

地下道というところは、大体にして真っ暗で通気が悪い。
設備が整った今も使われているところならばいざ知らず、石造りの古代の遺跡となればその窮屈さは計り知れない。
妙に空気が湿っていたり、逆に乾いていたり。
暗闇に適応したコケやら虫やらが徘徊していたり、イヤに静かだったり。
場合によっては、魔獣とかモンスターと呼ばれるやからと鉢合わせしたり。
あまり好き好んで入る場所ではない。
そんなところにわざわざ入っていくのは、そういった場所で手に入るモノ目当ての人間だけだろう。
遺跡の奥にあるであろう宝であるのか、もしくはモンスターの体の一部であるのか、モンスターそのものか。

今、古代遺跡の石造りの地下道を歩いている男二人は、一番前者の宝目当てだった。
一人はまだ子供で、身長は１２０ｃｍ程度。
こんな場所にもかかわらず、服装は紺のジャケットに揃いの半ズボン、バシッと締めた蝶ネクタイ。
背中には身の丈の半分はあろうかという金属ケースを背負っている。
その隣を歩くのは、妙にファンキーないでたちの男。
ポケットが大量についたカーゴパンツに、皮のジャケット。
金具と分厚い皮素材が複雑に組み合わされた手袋に、全身を覆うチェーンや指輪、ネックレスなどの装飾品。
歩くたびにそれらがこすれてジャラジャラと金属音を立てるその姿は、隣の少年とはある意味正反対だ。
外見こそかけ離れた二人だが、彼らは実の兄弟だった。

弟の名はジジ・ラインラック。
兄の名はバラート・ラインラック。
世界各国の魔法研究施設や古代遺跡に侵入し、魔法技術を奪う。
スパイやら盗賊やらと呼ばれる仕事を生業とする彼らは、今まさに仕事の真っ最中だ。

「真っ暗いとこってぼく苦手なんだよなー。なんかでそうで」
ライトを片手にぼやく弟の後ろを歩きながら、バラートは面白そうに口の端を吊り上げた。
「出てくれたほうがいいだろ？　レアなモンスターも出そうだしな」
「実体系ならいいよ？　でもお化けとか出たらいやじゃん」
その返事に、バラートは思わず噴出す。
「お化けってお前、怖がる歳じゃねぇーだろ？」
「だって非実体系のモンスターって怖いじゃーん！　聖水使うとお金掛かるし、魔法使って撃退するにしても魔力使うしー！」
顔をしかめて口を尖らせるジジ。
「金の心配かよ」
あきれたように笑うバラートに、ジジはむっとした顔を出振りかえる。
「ただでさえ古代遺跡って実入りが少ないじゃんかー。　あたりでも引けば兎も角さぁー」

古代文明が残した魔法というと、とてつもなく強力なものを想像する人が多いだろう。
が、この世界に限ってはそうでもない。
現実世界でもそうであるように、便利なものや使い勝手がいいもの

は大体後の世にも引き継がれていく。
発掘した魔法を解析したら、１２歳ぐらいで習う程度の魔法でしたなんてことはよくあること。
大昔に効率が悪くて使われなくなっていた魔法が、後生大事に暗号化までかけて出てくるなんてこともよくある。
とはいえ、もちろん例外もあった。
それが、戦場用の大規模魔法だ。
あたり一面に雷の雨を降らせる、隕石を召還する、津波を起こす。
今ではほとんど研究開発が無くなった大規模魔法。
なぜ、強力無比、切り札ともいえるそれらの研究がなされないのか。
理由は簡単。
そんなことをやったら周りの国から攻め込まれるからだ。
魔法の開発には、実験が欠かせない。
隣の国がそんなものを何度も何度も実験していたら、隣国はどう思うだろう。
こんなことをしている国をほうっておいたら、何時攻め込まれるか分からない。
それならいっそ、まだ完成していないだろう今のうちにつぶすしかない。
相手が一国だけならばともかく、ほかの国もそれに参加されたりしたら一溜りもない。

とはいっても、もちろん大規模魔法の威力はほしい。
地形を変えるほどの威力があるそれらは、決まれば一発で戦況をひっくり返すからだ。
戦争になればどこの国も大規模魔法は使うのだが、新しいものが作れない以上、ずっと使い続けてきたものを使うしかない。
いうなればお家芸と化しているそれらには、当然のように相手も対策を立ててくる。
ネタの割れている切り札ほど、悲しいものもない。

まして魔法は、ある程度効果が分かってさえいればそれを無効化することも可能なものが多い。
対抗策を講じるにももちろん時間はかかるが、いかんせん大規模魔法は往々にして発動までに時間がかかる。
相手が魔法を使う準備しているのを見て対策魔法を準備し始めたら間に合った。なんていうのも、実はよくある話だ。

そこで出てくるのが、古代文明がつくった大規模魔法だ。
今のように制約が少なかった時代につくられた古代の大規模魔法は、実は現在でも実用に耐えうることが多い。
ずーっと使い古されてきた準備段階で「ああ、あれだな」と分かる魔法と違い、いきなり古代大規模魔法を使われた日には、対応も何もあったものではない。
一体どんな効果があるのかおびえながら、必死に逃げるしかなくなる。

つまるところ、個人が使うような魔法は使い物にならないが、戦争用の大規模魔法を見つけることができれば一攫千金。
大当たりということだ。

「大体、いつも言ってるだろ？　最高の仕事をするためには金を惜しむな、って」
「にーちゃんの場合惜しまなさ過ぎなんだよ。　何でもかんでも高いもの買えばいいと思ってさー」
「職人が良い物使って手間暇かけて仕事すりゃ金かかるんだよ。これ見てみろ」
バラートは自分の左手の中指にはめていた指輪を外すと、自分の目の前にそれをかざす。

気配を察したのだろう、ジジは後ろを振り向くと、バラートが持っている指輪に目を向ける。
「純度９０％以上のプラチナ製リング。　掘り込んである魔法陣は俺がこいつを作るためだけに組上げた」
魔法のアイテムを作る工程にはいろいろある。
この指輪はあらかじめ魔法を発動させるロジック「魔法陣」を書くことで、魔力をこめるだけでそれが発動するタイプのものらしい。
「指輪の大きさ、はめる指まで考えて作った専門家が見ても複雑怪奇なその魔法陣を、０．０１ミリの狂いも無く完璧に掘り込んである。　こいつを仕上げられる職人を探すのにも、その職人に作ってもらえるように手を回すのにも、もちろんその職人に払う報酬にもかなりの金額をつぎ込んでる」
まるでお気に入りのおもちゃを眺めるように、心底うれしそうな目で指輪を眺めるバラート。
ジジはあきれたように肩をすくめると、「はぁー」とため息を吐いた。
バラートのマジックアイテム収集癖は今に始まったことではない。なにせ彼がジャラジャラと全身につけているアクセサリーのすべてがマジックアイテムなのだ。
バラートは目の前にかざしていた指輪を嵌め直すと、今度は着け心地を確かめるように手を開閉しながらそれを眺める。
「見ろ、この仕上がり。　飾り彫りと魔法陣が調和した完璧な機能美だ。　もちろん性能は最上級。　馬が何頭か買える額かけたからこその逸品だ」
「え、なにそれ。いくらぐらいかけたのさ」
ぴたっと足を止め、振り返るジジ。
バラートはうーんとうなると、何本か指を折り頭の中で計算し始める。
「んー。　大金貨４００枚ぐらい？」
ちなみに日本円にすると、大金貨一枚１０万円程度。

多少の誤差はあるが、金額にして大体四千万円ということだ。
相当に衝撃的だったのだろう。
ぐらっとひざから崩れ落ちそうになるのを、間一髪でこらえるジジ。
「馬っていうか家建つじゃんかぁぁぁ！！」
「家建たねぇよ。　どんなせせこましい家建てるつもりだよ」
牙をむいて声を荒げるジジに対し、バラートはごくごく落ち着いた様子で返す。
この兄弟の関係がよく分かる状況だ。
「金銭感覚ずれ過ぎだよ！　どんだけかけるのさ指輪一個に！」
「アクセサリーだと思うから高いと思うんだよ。　こいつは仕事道具。　金貨一枚で買った得物に命預けられるか？」
「工夫してどうにかするもんだよそう言うのは！　だいた・・・い？」
バラートに指を突きつけていたジジの動きが、ぴたりと止まる。
「ん？」
眉をしかめて自分の後ろを凝視する弟に、バラートもいぶかしげに後ろを振り向いた。
そして、耳に入ってきたわずかな音に、ジジとは逆に口の端を吊り上げる。
「んーん。　いいサウンド」
「古典的過ぎない？」
ジジは顔をしかめると、バラートの前から数歩横にずれた。
小難しそうな顔をして腕を組むジジを見て少し笑うと、バラートはその横に並んで立つ。
「古い遺跡なんだから古典でいいだろうが」
「そういうもん？」
「そういうもん」
二人が耳に捕らえたのは、小さな地響きのような音だった。
まだ石が転がる程度の音出しかないが、その音の正体は容易に予測できる。

「いまどき転がる岩トラップって」
あきれたように言うジジ。
転がる岩トラップ。
それは、地下道などの狭い道で、ぎりぎりの大きさの岩を転がして進入差を押しつぶすという、絵本にも出てくるほど有名なトラップだ。
あまりにもお約束過ぎて、最近作られるダンジョンにははずかしくて仕掛けられていないという。
「当時は最先端だったんじゃね？」
バラートは笑いながら肩をすくめて見せると、左手を軽く顔の前に掲げた。
すると、まるでオーロラのような光の揺らぎが腕の周りに発生し始める。
揺らぎは徐々に中指に嵌めた指輪に集まり始め、指輪に刻まれた魔法陣をなぞる様に蠢き始めた。
バラートはそれを目で確認して満足そうにニヤつくと、来た道を戻るように歩を進め始める。
そうこうしている間に、はじめは小さかった転がるような音が段々と大きくなってきていた。
ジジが手にしているライトの範囲無いにはまだ見えないが、岩は確実にこちらに近づいてきている。
青白い光に包まれていた指輪の表面に、急激な変化がおき始めた。
指輪を覆っていた青白い光が、銀色へと変わり始めたのだ。
銀色の揺らぎのような帯は徐々に青白い光を侵食していき、バラートの腕を覆う光すべてを銀へと染め替えてしまう。
バラートは指輪を嵌めた左手を前に突き出すと、大きく手を広げた。
右手はズボンのポケットに突っ込まれ、その表情はにやけたままだ。
道幅は優に４ｍを超えていて、この道をふさぐ大きさの岩が転がってきていると分かっているのであれば、普通そんな余裕の有る態度は取れないだろう。

何せ相手は巨大な鉱物の塊なのだ。
人間の一人や二人、わけも無くミンチにするだろう。
だが、バラートにもジジにも、臆した様子は微塵も無い。
段々と音が大きくなり、ついには壁や天井を揺らすほどの大きな振動へとなっていく。
耳朶を叩く地響きは、間違えなく巨大な何かが転がってきていると確認できるものだ。
「あ」
突然、ジジが思い出したように声を上げた。
「ん？」
それに反応したバラートが振り向くのと、ジジのライトが照らし出した先に突然巨大な影が差したのは、ほとんど同時だった。
巨大な影の正体は、予想通り巨大な丸い岩だった。
道の幅ぎりぎりに削りだされただろうそれは、直線状にあるものすべてを砕きつく産ばかりの勢いで転がってくる。
瞬く間にバラートにせまった岩は、突き出された銀色に輝く腕にぶち当たった。
ように見えた。
だが、実際はその直前で、まるで防壁にでもぶち当たったかのようにその直進を止まっている。
なにかにぶち当たったような音を上げるわけでもなく、岩が砕けるような破壊音も上がらない。
ただ、バラートのかざした手のひらの直前で、ぴったりと岩が停止したのだ。
「岩、止めたあとどうするの？　手外したらまた転がってくるんじゃない？」
「あー。　そうだな」
ジジの言葉に納得したようにうなずきながら、バラートは突き出した手の前で停止した岩へと目を移した。
膨大なエネルギーを吸収し、衝撃をほぼ０にすることで攻撃の破壊

力を吸収する防御用マジックアイテム。
それを使った岩を眺め、バラートは小首をかしげた。
「そこまで考えてなかった」
肩をすくめて言うバラートに、ジジは思わず膝から崩れ落ちそうになるのを、必死にこらえるのだった。

三十八話

「というわけで金が手に入った」
計斗はクスフリから巻き上げたコインを食堂のテーブルの上に並べると、ゴキゴキと首の関節を鳴らした。
完全におっさんの動きだと思いつつも突込みを入れないのは、クスフリの良心だろう
とはいえ、表情が引きつっているので何を考えているかは察されていそうだが。
「というわけでって何がかわかんないんすけど・・・」
「気にするな。　で、金の単位は“ドウ”でいいのか？」
現金が手に入ったところで、計斗はクスフリからこの国の貨幣について説明を受けていた。
世界共通通貨、などという便利なものは無く、やはり各国で製造発行しているという。
元々の世界は国家間のやり取りが希薄ということで、国をまたぐ流通には金や物々交換が主流なのだとか。
「ほかの国ではあるそうですが、この国では紙幣はないんすよ。
金貨、銀貨、銅貨の３種類っすね」
そういうと、クスフリはテーブルに置かれたコインを並べ始めた。
金貨、銀貨、銅貨。
サイズ的には、どれも日本の五百円と同じぐらいだ。
「元々は銅貨何枚で銀貨と同じ、銀貨何枚で金貨と同じ価値って勘定のしかただったんすけどね。　それじゃあ分かりにくいってことで、単位をそろえたんすよ」
「それで一番下の銅にそろえた訳か。　しかし金貨が五万ドウとか言うのは響きが悪いな」
日本で言う円、アメリカで言うドルが、この国のドウになるのだそうだ。

ちなみに、この食堂のランチが一人前４５０～５００ドウ。
端の方で売っているオカズを挟んだパンが１００～１２０ドウ。
「そのまま円だろうがこれでは」
値段からかんがみるに、１円＝１ドウ　でまず間違いないだろう。
どうも計斗は、それが気に入らないらしい。
「分かり安すぎるだろう。　もっとこう、レートが複雑だったり銅貨の柄だけで額を見極めるとかそういうアクションは無いのか。何で数字が書いてあるんだ怠慢だろう」
「怠慢って・・・なんに対してっすか。　いいじゃないっすか分かりやすくて。　またそのアクションっていうのか意味わかんないっすし」
ぶつくさと文句を言う計斗をなだめながら、クスフリはお茶をすする。
「ん？」
腕を組んでぶつくさ言っていた計斗だったが、クスフリのすすっているお茶を見て動きが止まった。
自分の前においてあるコップに入っているお茶に目をむけ、何かを確認するように覗き込む。
突然しゃべるのをやめてお茶をにらみつける計斗に、クスフリは不思議そうに首をかしげる。
「どうかしたんすか？」
「いや。　今気がついたんだが。　お茶が緑色だぞ」
「そりゃ。　おちゃっぱは緑ですから」
「ちゃっぱ？　エリメラが入れていたのは紅茶だっただろう」
「へ？」
計斗の言葉に、クスフリは眉をしかめた。
エリメラといえば、エリメラ王女のことだろう。
「はぁ。　まあ、紅茶でしたね」
「この国には完全発酵茶と無発酵茶が混在しているのか」
「むはっこう、え？」

頭の上に「？」マークを浮かべているような顔のクスフリに、計斗は軽く肩をすくめた。
「茶葉はこの世界でも木に生える葉っぱなのだろう？」
「ええ。　あー、そういえば紅茶も緑茶も同じ木から取れるとか聞いたことはあるっすけど」
「茶葉というのは、収穫した時点から細胞が壊れ内部の物質で発酵が始まる。　それを高温で蒸すなどして発酵する原因である酵素の発酵作用を破壊し、酸化を止めるわけだが、これをどの段階で止めるかで茶の種類が変わる」
「え、じゃあ、緑茶は発酵してるんですか？」
「緑茶はまったく発酵していない無発酵茶と呼ばれる種類になる。　とってすぐに高温にさらし発酵を止める。　それに対して紅茶は完全発酵茶と呼ばれることもあるように発酵しきったものだ」
「あー。　だから紅茶の葉っぱって茶色なんすか」
「まあな」
そこまで話したところで、二人同時に緑茶をすする。
「ふー」
「はー」
動きがほとんど同じなのは、息が合ってきた証拠だろうか。
「とはいえ、この世界でもそうなのかわからんけどな」
「あー。　でもそうなんじゃないっすか？　色とか同じ何すよね？」
「ああ。　共通する動植物も多いしな。　同じだとは思うんだが。　食い物に詳しい人物に聞いてみたいところだが」
計斗のその言葉に、クスフリは何かを思い立ったような表情になる。
「そういえば、ここの料理長が詳しいかも知れないっすよ」
「料理長？」
「ここの食堂の料理長さんっすよ。　つか、この城の食事全般取り仕切ってる人っすね」
「何かこの国のその手の人物はろくなのが居ないような気がするんだが。　ガルド老といいカロルコといい工場長といい」

「なんてこというんすか」
顔をしかめるクスフリ。
が、「そんなことないっすよ」という言葉は出てこなかった。
実際クスフリも似たようなことを思っていたからだろう。
「で、どういう人物なんだ」
「ええっと。　一等百人長で、元々は遊撃歩兵中隊の隊長をしてたんすけど。　なんか転戦してるうちに現地の食材で料理することに目覚めたらしいんすよね」
「ほー。　騎士か。　遊撃から後方支援へ転属といったところか？」
「そうっすよ。　一等百人長っすし、料理もうまいって事で、今では城の料理長兼後方支援部隊の中隊長っすね」
「普通なら左遷なんだろうがな。そういった人事は」
「本人が希望しての異動っすから」
「まあ、その場合そうだろうな」
うなずきながら、計斗はポケットから引っ張り出した布袋にコインを詰め始める。
コインはそれなりの大きさがあるので、日本の財布タイプのものでは入りきらない。
巾着袋のようになっているそれの口を結びながら、ふと計斗は思いついたように声を上げる。
「食い物に詳しいということは猟師とかに伝手が有ったりするかも知れんな」
「はぁ。　そうかもしれませんけど。　それがどうかしたんですか？」
「この世界の動物には興味がある。　戦うことになるかもしれんしな」
戦うことに〜　のくだりで、がくっとこけるクスフリ。
だが、だいぶ計斗の発言に慣れてきたのだろう。
座りなおしながら眉間を押さえると、軽いため息を吐くだけで何とか気を落ち着ける。

「まあ、確かにそういうのはあるかも知れないっすけど・・・」
「言ってみるか」
言うが早いか、計斗はすっくりと立ち上がると、すたすたと厨房のほうへと歩き始めた。
「ちょっ　はやっ！　待ってくださいよ！」
背中を向けて歩いていく計斗に、クスフリはあわてて立ち上がり追いかける。
が、数歩歩いたところで立ち止まると、あわてて元の席に引き返す。
テープルの上に残してあった食器類をトレーに載せ、近くにあったテーブルクロスでテーブルを拭くと、ほかに汚れが無いか指差し点検。
忘れ物なども無いことを確認すると。
「よしっ！」
うなずきながらそう言い、再び計斗を追って駆け足を始める。
変なところで気の回るクスフリだった。

広く、清潔感の漂う厨房は、どこか現実世界のそれにも似た構造だった。
上下水道に、清掃の行き届いた床、壁。
冷蔵庫などこそ無いが、食材はどれも新鮮だ。
特に、高い天井からつるされている全長３ｍほどの魚は、びちびちと跳ね回り恐ろしいほどの新鮮さを見せ付けている。
その魚はやたらと鱗が硬そう・・・というか岩っぽい何かがへばりついているような形状をしていた。
巷では「鋼鉄魚」と呼ばれるこの魚は、鱗が装甲のように進化した超高硬度を誇る鎧をまとった怪魚である。
身は非常においしいのだが、如何せん鱗が硬すぎて食べるのに一苦労。

斧やらナタやらハンマーやらをつかって、ようやく調理することができる魚である。
が、その魚の前に立つ料理人が手にしていたのは、そういった巨大な鈍器ではなかった。
ただ一本の、包丁。
刃渡り１m、薄みで細いそれは、一見、刀の様でもあった。
実際、侍とかが持てば鉄とかも切れる一品だろう。
しかし、持っている料理人が包丁だと言い張るのであくまでそれは包丁だった。
白い割烹着の上に、なぜかプレイトメイルを着込んだ挑発の料理人は、鋭い眼光で鋼鉄魚をにらみ付けた。
そして、その目がカッと見開かれる。
刹那、料理人の手にしていた包丁が一閃される。
「ちぇぇぇぇぇぇぇぇすとぉぉぉぉぉ！！！　オララララララ！」
鋼鉄魚の鱗がまるで紙切れのように切り裂かれ、白く美しい身が舞い飛ぶ。
乱雑に宙を舞っているかのように見えるその身は、まるで吸い込まれるかのようにテーブルの上に置かれた皿に吸い込まれていく。
一つ一つ、測ったように同じ厚さ、同じ長さの鋼鉄魚の身は、ただ乱雑に皿の上に落ちているわけでなかった。
まるで職人が一つ一つ丁寧に盛り付けたかのように、整然と並んでいっている。

「どこぞのグルメアニメでこんな光景見たことあるぞ」
引きつった表情で思わずそうつぶやいた計斗に、クスフリはただただ引きつった顔で乾いた笑いを返すことしかできなかったという。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5687p/

とりっぷ

2011年12月19日00時46分発行